

姫路市

今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡

緊急街路整備事業山吹線に伴う発掘調査報告書2

2008年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡

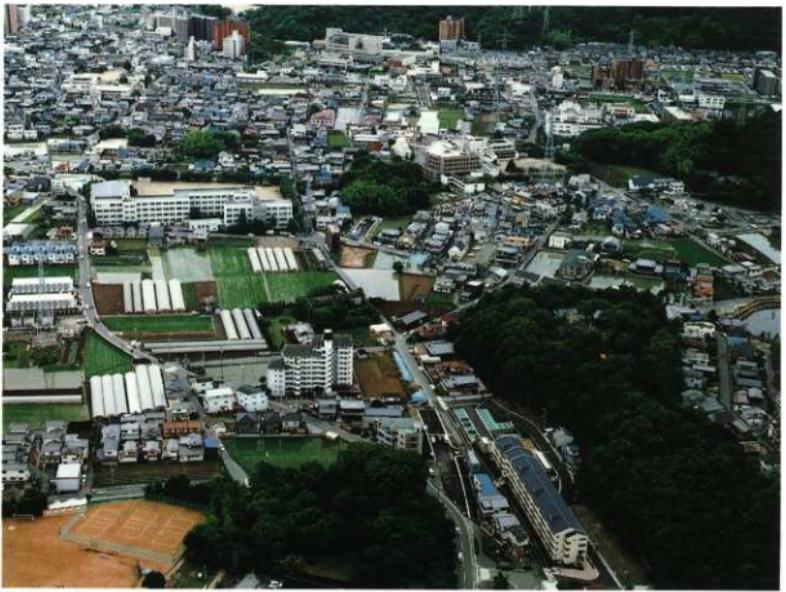
緊急街路整備事業山吹線に伴う発掘調査報告書 2

2008年3月

兵庫県教育委員会



遠景（西から・空中写真一平成14年度撮影）



遠景（北から・空中写真一平成14年度撮影）



今宿遺跡・山吹遺跡（真上から・空中写真一平成13年度撮影）



131



132



3



4

今宿遺跡平成13年度調査区出土陶磁器

例　　言

1. 本書は、兵庫県姫路市西今宿5丁目・8丁目に所在する、今宿遺跡および山吹遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収している発掘調査の記録はいずれも、兵庫県姫路土木事務所が計画した緊急街路整備事業山吹線によるものである。兵庫県教育委員会が兵庫県姫路土木事務所の依頼を受けて平成10年度・13年度・14年度・16年度に本発掘調査を実施した。なお、同事業による今宿遺跡の調査成果のうち、本報告書において対象外とした以南の区域にかかる調査成果については、別冊の『今宿遺跡Ⅰ』(兵庫県文化財調査報告333冊)に所収されている。
3. 発掘調査は種定淳介、別府洋二、森宮正、山田清朝、小川弦太、上田健太郎が担当した。なお、発掘調査の各年度・調査区ごとの担当者、調査期間、委託業者に関しては第1章第2節に明示した。
4. 出土遺物整理は兵庫県中播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成18年度・19年度に実施した。
5. 本書の執筆は各調査員を行い、文責は目次に明記した。また、本書の編集は杉本淳子の補助を得て上田が行った。
6. 本書に関わる写真・図面などの記録、出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館において保管している。
7. 発掘調査にあたっては、以下の方々からご教示、ご協力を得た。記して感謝の意を表します。

(順不同敬称略)

秋枝芳、大谷輝彦、小柴治子、中川猛

凡　　例

1. 採図の座標値は、平成14年4月1日の測量法改正に伴い、世界溝地系に基づく平面直角座標系の数値に補正している。なお、平面直角座標系は第V系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水準(T.P.)を基準としている。
2. 本書で使用した地図のうち、図版2の地図は国土地理院発行25,000分の1「姫路北部」(平成9年)および「姫路南部」(平成8年)を使用した。
3. 遺物は原則として、掲載順に通し番号を付けているが、今宿遺跡と山吹遺跡ではそれぞれ別個の通し番号を設け、分けて掲載している。また、石器にはS、玉類にはJ、金属器のうち鉄器にはF、銭貨にはCをそれぞれの頭に付加し、土器と区別を図っている。
4. 弥生土器および上師器、陶磁器については実測図の断面部分を白抜きにしているが、須恵器は断面部分を墨塗り、また黒色土器および瓦器・瓦は断面部分に網掛けを施すことによって区別している。

目 次

第1章 今宿・山吹遺跡の概要と調査に至る経緯	
第1節 今宿・山吹遺跡の概要	（上田）1
第2節 本発掘調査の経過と体制	（上田）1
第3節 整理作業・報告書作成の経過と体制	（上田）4
第2章 今宿遺跡の成果	
第1節 平成13年度の調査	（上田）5
第2節 平成14年度の調査	（山田・小川）15
第3章 山吹遺跡の成果	
第1節 平成10年度の調査	（篠宮）37
第2節 平成13年度の調査	（上田）38
第3節 平成16年度の調査	（上田）39

表 目 次

第1表 今宿遺跡出土土器一覧表	34
第2表 今宿遺跡出土石器一覧表	36
第3表 今宿遺跡出土金属器一覧表	36
第4表 山吹遺跡出土土器一覧表	41
第5表 山吹遺跡出土玉類一覧表	41
第6表 今宿遺跡及び山吹遺跡と周辺の遺跡	42

挿図目次

第1図 今宿遺跡及び山吹遺跡の調査区配置図	2
第2図 地元説明会風景	3
第3図 高岡西小学校6年生児童見学風景	3
第4図 土師器皿の法量分布	30
第5図 土師器皿の分類	31
第6図 平成13年度調査区SB01柱穴出土土器	38
第7図 平成16年度調査区布堀状土坑列出土玉類	40
第8図 平成16年度調査区落ち込み出土土器	40

図版目次

- 図版1 兵庫県・姫路市・今宿遺跡及び山吹遺跡の位置
図版2 今宿遺跡及び山吹遺跡と周辺の道路
図版3 緊急街路整備事業山吹線と関係する調査区

今宿遺跡

- 図版4 今宿遺跡の各年度調査区

平成13年度調査区

- 図版5 調査区平面図・土層断面図
図版6 調査区北側平面図
図版7 SB01・SB02
図版8 SB03～SB05
図版9 SD01～SD03土層断面図
図版10 SK01～SK14
図版11 SB01
図版12 出土土器①（撲立柱建物跡・土坑・柱穴・井戸）
図版13 出土土器②（SD01・SD02）
図版14 出土土器③（SD03第1層・第2層）
図版15 出土土器④（SD03第3層）
図版16 出土土器⑤（SD03第4層～第8層須恵器）
図版17 出土土器⑥（SD03第4層～第8層土師器①）
図版18 出土土器⑦（SD03第4層～第8層土師器②と笄生土器・包含層）・出土金属器

平成14年度調査区

- 図版19 調査区平面図
図版20 調査区土層断面図
図版21 SH01・SH06・SB07
図版22 SB08・SB09
図版23 P05・SK15～SK21
図版24 SK22～SK29
図版25 SK30・SK31・SX01・SX02
図版26 SD04～SD08土層断面
図版27 出土土器①（堅穴住居跡・柱穴・土坑）
図版28 出土土器②（撲立柱建物跡・柱穴・土坑）
図版29 出土土器③（土坑・構・土壤墓・包含層）
図版30 出土土器④（包含層）・出土石器・出土金属器

山吹遺跡

- 図版31 山吹遺跡の各年度調査区

平成10年度調査区

- 図版32 調査区平面図・溝土層断面図
図版33 調査区土層断面図・SB01・出土土器

平成13年度調査区

- 図版34 調査区平面図・北壁土層断面図
図版35 東壁土層断面図・SB01・SD01土層断面

平成16年度調査区

- 図版36 調査区平面図北部・中部
図版37 調査区平面図南部
図版38 布掘り状上坑列溝土層断面・SK01～SK03・調査区上層断面図

卷首図版目次

卷首写真図版1 空中写真 上 這景（西から・空中写真－平成14年度撮影）
下 遺跡（北から・空中写真－平成14年度撮影）

卷首写真図版2 空中写真 上 今宿遺跡・山吹遺跡（真上から・空中写真－平成13年度撮影）
遺物 下 今宿遺跡平成13年度調査区出土陶器

写真図版目次

今宿 遺跡

平成13年度調査区

- 写真図版1 遺跡 調査区全景（空中写真）
写真図版2 遺跡 上 調査区全景（北から）
中 調査区北半部（南から）
下 調査区南半部（北から）
写真図版3 遺構 上 井戸SE01（東から）
中 井戸SE01石積最下段根太・樋部（東から）
下 井戸SE01石積最下段根太・樋部（東から）
写真図版4 遺構 上 井戸SE01断面削除状況（北から）
中 土坑SK05（南から）
左中 土坑SK01（東から）
右中 土坑SK11（南から）
左下 土坑SK08（南から）
右下 土坑SK10（東から）
写真図版5 遺情 上 溝SD03全景（西から）
中 溝SD03（東から）
下 溝SD03最下層土器出土状況（東から）
出土土器①（獨立柱建物・土坑①）
写真図版6 遺物
写真図版7 遺物
写真図版8 遺物
写真図版9 遺物
写真図版10 遺物
写真図版11 遺物
写真図版12 遺物
写真図版13 遺物
写真図版14 遺物
写真図版15 遺物
写真図版16 遺物
出土土器②（土坑②・井戸①）
出土土器③（井戸②・溝SD01・溝SD02）
出土土器④（溝SD03第1層・第2層①）
出土土器⑤（溝SD03第2層②）
出土土器⑥（溝SD03第3層）
出土土器⑦（溝SD03第4層～第8層須恵器①）
出土土器⑧（溝SD03第4層～第8層須恵器②）
出土土器⑨（溝SD03第4層～第8層土師器他①）
出土土器⑩（溝SD03第4層～第8層土師器他②）
出土土器⑪（溝SD03第4層～第8層土師器他③・包含層の土器）
出土金屬器

平成14年度調査区

- 写真図版17 遺情 上 調査区全景（南から）
中 調査区西北部（南東から）
下 調査区南部（東から）
写真図版18 遺構 上 積穴住居SH01全景（西から）
中 積穴住居SH01全景（北から）
下 積穴住居SH01上層出土状況（西から）

写真図版19	遺構	上	掘立柱建物SB06（西から）
		中	柱穴P06土器出土状況（西から）
		下	柱穴P08裏面（東から）
写真図版20	遺構	上	土坑SK17全景（南から）
		中	土坑SK18全景（西から）
		下	土坑SK18土器出土状況（南から）
写真図版21	遺構	上	土坑SK20全景（西から）
		中	土坑SK21全景（南から）
		下	土坑SK22全景（西から）
写真図版22	遺構	上	土坑SK23全景（西から）
		中	土坑SK24全景（西から）
		下	土坑SK28全景（西から）
写真図版23	遺構	上	土坑SK29全景（西から）
		中	土坑SK30全景（西から）
		下	土坑SK31全景（東から）
写真図版24	遺構	上	土壤窓SX01検出状況（西から）
		中	土壤窓SX01全景（東から）
		下	土壤窓SX02全景（南から）
写真図版25	遺物		出土土器①（弥生時代の遺構①）
写真図版26	遺物		出土土器②（弥生時代の遺構②・掘立柱建物・柱穴）
写真図版27	遺物		出土土器③（土坑・溝①）
写真図版28	遺物		出土土器④（溝②・土壤窓・包含層①）
写真図版29	遺物		出土土器⑤（包含層②）・出土石器・出土金属器

山吹遺跡

平成10年度調査区

写真図版30	遺跡	上	調査区全景（北東から）
		下	調査区全景（北から）
写真図版31	遺跡	上	A・B区全景（南から）
	遺構	中	A区溝SD01（東から）
		下	A区溝SD01土器出土状況（北から）
写真図版32	遺構	上	溝SD02（北から）
		中	溝SD02（南から）
		下	溝SD02土層断面（南から）
写真図版33	遺跡	上	C・D区全景（東から）
	遺構	中	C区（北から）
		下	D区（北から）
写真図版34	遺物		出土土器

平成13年度調査区

写真図版35	遺跡	上	調査区全景（空中写真）
	遺構	中	SD01（南から）
		下	SD01上層断面（南から）

平成16年度調査区

写真図版36	遺跡		調査区全景（空中写真）
写真図版37	遺跡	上	調査区全景（南から）
		中	調査区全景（北から）
	遺構	下	溝SD01上層断面（南から）
写真図版38	遺構	上	土坑SK01（南から）
		中	布縄り状土坑列（南から）
		下	布縄り状土坑列（南から）

第1章 今宿・山吹遺跡の概要と調査に到る経緯

第1節 今宿・山吹遺跡の概要

今宿遺跡および山吹遺跡は、姫路市西今宿5丁目および8丁目に所在する。これまで姫路市教育委員会により、山吹遺跡においては北部で、今宿遺跡においては南部で、調査が行われており、特に今宿丁田遺跡の銅鐸鉢型の発見は北東900mの名古山遺跡の銅鐸鉢型とともに大いに知られるところである。今回の調査成果をも勘案すれば、今宿遺跡および山吹遺跡は、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代から室町時代を中心とした複合遺跡である。

河遺跡は旧夢前川の形成した沖積平野上に立地し、遺構検出面の標高は概ね20m前後を測る。付近は現在の市街地中心部から北西側の郊外部に移行する部分にあたり、平安時代に地名を記録した『和名類聚抄』にその記載の見られる「草上」の一帯と目される。特に山吹遺跡の周辺は播磨風土記における「巨智里」に比定され、式内社の高岳神社が所在する。周囲には飛鳥時代に創建された辻井廃寺や、難文時代中期から弥生時代に至る辻井遺跡が知られている（図版2・第6表）。

なお、本報告において所収した両遺跡の5次にわたる本発掘調査は、兵庫県姫路土木事務所が計画した緊急街路整備事業山吹線によるものである。同事業による今宿遺跡の調査成果のうち、本報告書において対象外とした以南の区域における調査成果については、別冊の『今宿遺跡I』（兵庫県文化財調査報告第333冊）に所収されている。また、遺跡の地理的環境および歴史的環境に関する同報告書に含まれるため、そちらを参照されたい。

第2節 本発掘調査の経過と体制

1 今宿遺跡

平成13年度

確認調査（遺跡調査番号：2001091）

調査担当：多賀茂治

本発掘調査（遺跡調査番号：2001106）・確認調査（遺跡調査番号：2001107）

調査専門員：西口和彦

調査担当：種田淳介・上田健太郎

調査補助員：柴田妃三光 現場事務員：玉越綾子

調査請負業者：栄伸工業株式会社（発掘調査工事）・株式会社大設（空中写真測量）

平成14年度

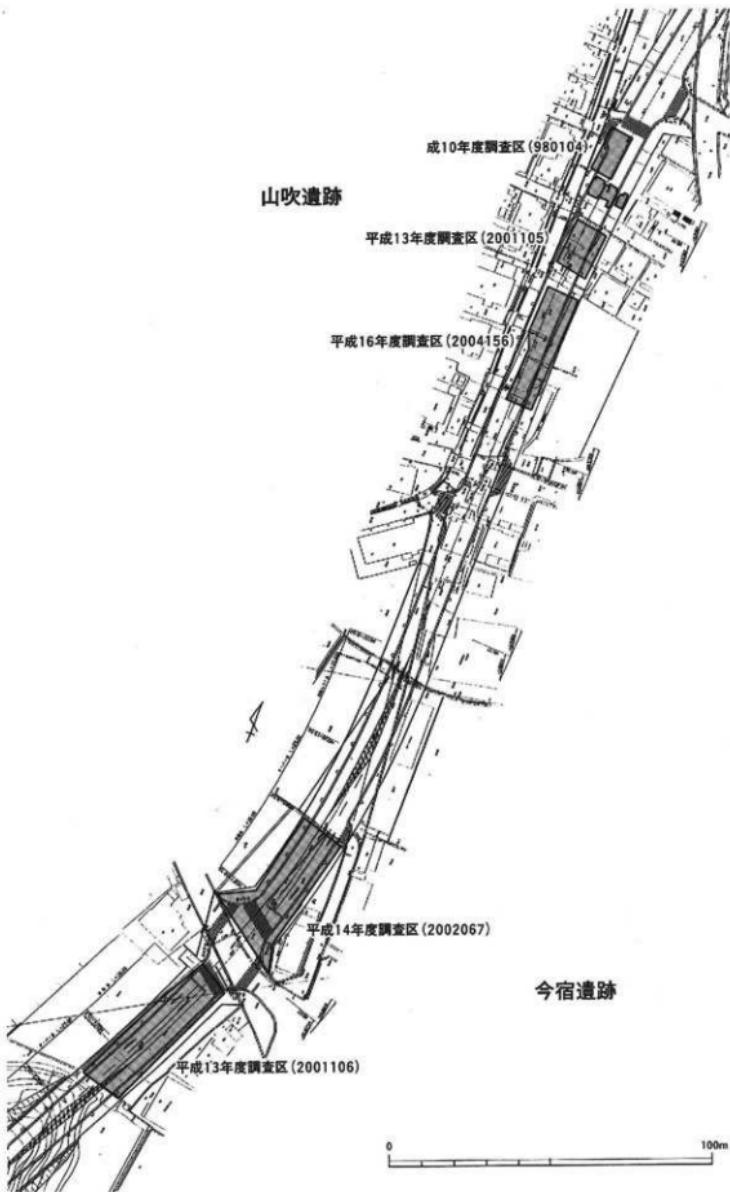
本発掘調査（遺跡調査番号：2002067）・確認調査（遺跡調査番号：2002091）

調査専門員：西口和彦

調査担当：山田清朝・小川弦太

調査補助員：森崎由起子 現場事務員：覚野郁子

調査請負業者：栄伸工業株式会社（発掘調査工事）・株式会社アコード（空中写真測量）



第1図 今宿遺跡及び山吹遺跡の調査区配置図

なお、平成13年度および平成14年度の本発掘調査時には、周辺の住民を対象とした地元説明会や、近隣の高岡小学校および高岡西小学校児童・高岡中学校生徒を対象とした遺跡見学会を行っている。

平成13年度は10月13日に地元説明会を開催し、約200名の参加が得られた。また、10月10～12日・15日の4日間にわたり、高岡小学校・高岡西小学校・高岡中学校の児童・生徒約1000名に対して遺跡の概要の説明会を実施した。

平成14年度は6月26日に高岡中学校の1年生約200名に対し遺跡概要の説明会を行った。また、6月29日には地元説明会を開催し、約70人の参加が得られた。

2 山吹遺跡

平成9年度

確認調査（遺跡調査番号：970380）

調査担当：種庭淳介

平成10年度

本発掘調査（遺跡調査番号：980104）

調査専門員：西口和彦

調査担当：篠宮 正・矢野治巳

平成13年度

本発掘調査（遺跡調査番号2001105）

調査専門員：西口和彦

調査担当：種庭淳介・上田健太郎

調査補助員：柴田妃三光 現場事務員：玉越綾子

調査訪ね業者：栄伸工業株式会社（発掘調査工事）・株式会社人設（空中写真測量）

平成15年度

確認調査（遺跡調査番号2003143）

調査担当：甲斐昭光

平成16年度

本発掘調査（遺跡調査番号2004156）

調査専門員：西口和彦

調査担当：別府洋二・上田健太郎

調査補助員：清水洋子

調査訪ね業者：菅原土木株式会社（発掘調査工事）・株式会社サンコム（空中写真測量）



第2図 地元説明会風景



第3図 高岡西小学校6年生児童見学風景

第3節 整理作業・報告書作成の経過と体制

平成18年度

工程管理担当：岡田章一

保存処理担当：岡本 伸秀

整理作業担当：上田健太郎

遺物実測担当：岡崎輝子・柏木明子・柏原美音・佐伯純子

土器接合担当：眞子ふさ恵・西口由紀・木村淑子・小野潤子・三好綾子・奥野政子・又江立子・荒木

由美子

金属器保存処理：栗山美奈・大前篤子・藤井光代・清水幸子

平成19年度

工程管理担当：森内秀造

整理担当職員：篠宮 正・山田清朝・小川弦太・上田健太郎

遺物実測等担当：杉本淳子・藤川紀子・古谷章子

土器復元担当：西口由紀・島村順子・藏幾子・奥野政子・荒木由美子・藤池かづさ

第2章 今宿遺跡の成果

第1節 平成13年度の調査

1 基本層序

調査前の地表において上塗化した表土層（1層）以下は旧耕作土層（2・3層）で構成され、基盤層（4層）に至る（図版5）。各遺構は4層上面において、検出した。遺構検出面は、現地表面より30～80cmであり、概ね標高19m前後を測る。

2 掘立柱建物跡

調査区北端部分の、SD03以北において5棟を検出した。5棟ともに、SD03以北でもやや西寄りに偏った箇所に重複して建てられている（図版6）。

S B 0 1（図版7・写真図版2）

検出状況 SB02・04・05と重複する範囲に位置する。西側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模 南北3間（5.6m）×東西2間（4.0m）以上で、東側に1間×3間の庇状の建物構造が付属し、さらに東側にはこの庇状の構造物と同規模の間口で1間×2間の建物構造が認められる。床面積は38.24m²、主軸はN24° Eを測る。建物と庇状の構造が柱穴において北端の1箇所を除いて重複関係にはないが、主軸方向および柱穴の同一機軸上での存在から、少なくともある同一時期に存在した一連の建物と判断した。柱掘方は直径25～35cmである。

出土遺物

土器 柱穴内より、14世紀後半頃と考えられる土師器鍋の底部片等の土器の細片が出土している。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半頃と考えられる。

S B 0 2（図版7・写真図版2）

検出状況 SB01・03・05と重複する範囲に位置する。北側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模 未検出の柱穴を含むものの、南北2間（3.4m）以上×東西3間（5.6m）に復元される。床面積は19.56m²、主軸はN35° Eを測る。柱掘方は直径20～32cmである。

出土遺物

土器 柱穴内より、13世紀代のいわゆる播磨丹型¹¹⁾の土師器鍋や、14世紀代と考えられる断面三角形の鉢の瓦質の羽釜をはじめ、土器の小片が出土しているが、固化には耐えない。

時期 出土土器から判断して、14世紀代と考えられる。

S B 0 3（図版8・写真図版2）

検出状況 SB02と重複する範囲に位置する。北側および西側の調査区外へと延びる可能性がある。

形態・規模 東西5間（7.9m）分の柱穴列を確認した。主軸はN66° W、柱掘方は直径21～29cmを測る。

出土遺物

土器 柱穴内より土師皿をはじめとする上器の細片、布目瓦が出土しているが、図化には耐えない。

時期 出土土器から判断して、中世の範囲内に収まると考えられる。

S B 0 4 (図版8・写真図版2)

検出状況 SB01・05と重複する範囲に位置する。西側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模 未検出の柱穴を含むものの、南北2間(3.6m)以上×東西3間(4.4m)に復元される。床面積は17.84m²、主軸はN25°Eを測る。柱掘方は直径20~31cmである。

出土遺物

土器(図版12・写真図版6) 1は須恵器の捏鉢である。他に、自然釉の厚くかかった常滑焼と思われる胴部片、須恵器小片、播州型の土師器鍋小片、土師皿小片、瓦質土器小片などが出土している。

時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。

S B 0 5 (図版8・写真図版2)

検出状況 SB01・02・04と重複する範囲に位置する。

形態・規模 未検出の柱穴を含むものの、南北1間(1.7m)以上×東西3間(4.6m)に復元される。床面積は8.37m²、主軸はN14°Eを測る。柱掘方は直径22~36cmを測る。

出土遺物

土器 柱穴内より図化には耐えないが、絞杉状のタタキを施す壺胴部をはじめとする須恵器小片、土師器小片、土師皿小片などが出土している。

時期 出土土器から判断して、13世紀から14世紀代にかけての時期と考えられる。

3 柱穴

出土遺物

土器(図版12・写真図版6) 2は手づくね成形の土師皿で、底部から口縁部が屈曲して外反するコースター状を呈する。3は龍泉窯青磁碗の底部で、釉薬の発色が良好で釉自体が厚い。高台部分墨付には鉄泥漿が施され赤褐色に鮮やかに発色する。13世紀前半であろう。4は白磁の四耳壺の底部である。底部の器壁が厚く、高台部は露胎である。12世紀後半から13世紀初め頃のものであろう。

4 土坑

調査区北半部において検出した。SD03の南部に5基検出したほかは、すべてSD03以北に密集する。

S K 0 1 (図版10)

検出状況 調査区中央部に位置する。

形態・規模 平面形は北側に膨らみがちな楕円形を呈する。断面形は上部で周縁から緩やかに傾斜した後、中央に向かって急激に落ち、壁状に立つ。長径108cm、短径91cm、検出面からの深さ45cmを測る。

埋土は4層からなる。2・3層はベース土をブロック状に混じりつつ埋まっており、その後1層は緩やかな傾斜の上部とともに埋没している。

出土遺物

土器（図版12・写真図版6）5は口縁付近が斜めに立ち上がる土師器皿。6は口縁部が著しく内傾し、端面を持つ瓦質の羽釜。口縁下には一段段差を設ける。鋸部は下向きにやや長めに伸びる。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半から15世紀前半の可能性が考えられる。

S K 0 2（図版10・写真図版4）

検出状況 調査区中央部に位置する。

形態・規模 平面形は中央がくびれ気味のビーンズ状の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈する。長径99cm、短径50cm、検出面からの深さ7cmを測る。

出土遺物

土器 土師皿底部片、土師器鍋などの小片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 出土した土器より、中世の範囲内に収まると考えられる。

S K 0 3（図版10）

検出状況 調査区中央部に位置する。

形態・規模 平面形は楕円形をなし、断面形は皿状をなす。下層中に焼土ブロックを含む。長径92cm、短径67cm、検出面からの深さ20cmを測る。

出土遺物

土器（図版12・写真図版6）9は瓦質の鍋である。外面を細かいハケで調整する。

時期 出土土器から判断して、15世紀前半と考えられる。

S K 0 4（図版10・写真図版4）

検出状況 調査区中央部に位置する。

形態・規模 平面形は西側に膨らみがちな楕円形を呈する。壁が立ち気味のため断面形はU字形状を呈する。長径92cm、短径81cm、検出面からの深さ39cmを測る。底部に扁平な縫が3つ認められた。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 出土した土器からは詳細な時期を決めることが不可能である。

S K 0 5（図版10・写真図版4）

検出状況 SD03の南肩、東縁付近で検出された。SD03を切る。西半分は調査区外である。

形態・規模 平面形は楕円形状の不規則円形で、長径243cm以上、短径278cm、検出面からの深さ28cmを測る。底部付近に縫が2つ認められた。

出土遺物

土器（図版12・写真図版6）7・8は瓦質の有段羽釜。7は口縁部が内傾し、端部が鋭角な鋸部が短く水平にのびる。8は胴部から口縁部が直立して、端面がやや内傾しつつ上を向く。鋸部は短く直線的にやや上向きに取り付けられる。他に図化しなかったが、平行タタキを施す須恵器胴部片など小片が出土している。

時期 出土土器から判断して、15世紀前半から中頃と考えられる。

S K 0 6 (図版10)

検出状況 調査区中央部に位置する。

形態・規模 平面形は西側に膨らみがちな梢円形を呈する。壁が立ち気味のため断面形はU字形状を呈する。長径92cm、短径81cm、検出面からの深さ39cmを測る。底部に扁平な疊が3つ認められた。

出土遺物

土器 平行タタキを施す須恵器胴部片など小片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 山土土器から判断して、12世紀後半から13世紀代の可能性を考えられる。

S K 0 7 (図版10)

検出状況 調査区北部に位置する。SB02を切り、柱穴に切られる。

形態・規模 平面形は梢円形を呈し、断面形は皿状を呈する。長径82cm、短径58cm、検出面からの深さ33cmを測る。

出土遺物

土器 細片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 切りあい関係および出土した土器より、14世紀以降の中世の範囲内と考えられる。

S K 0 8 (図版10・写真図版4)

検出状況 調査区北端に位置する。北半分は調査区外である。

形態・規模 平面形は梢円形を呈し、断面形は皿状を呈する。長径58cm以上、短径78cm、検出面からの深さ33cmを測る。

出土遺物 一切出土していない。

時期 不明である。

S K 0 9 (図版10)

検出状況 調査区北端に位置する。SK10を切り、南西部部分をSK11を切られる。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。長径88cm、短径58cm、検出面からの深さ46cmを測る。

出土遺物

土器 手づくね成形の土師皿や播丹型土師器鍋などの小片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 山土土器から判断して、中世の範囲内と考えられる。

S K 1 0 (図版10・写真図版4)

検出状況 調査区北部に位置する。SB01・04・05・SK11を切る。SK09に切られる。

形態・規模 平面形は長方形状を呈し、断面形は皿状を呈す。長さ219cm、幅172cm、深さ12cmを測る。

出土遺物

土器 (図版12・写真図版6) 10は球状の体部をもち口縁部が内傾するタイプ。鋒部は口縁部付近に二等辺三角形状に設けられるも丸く畳く収まる。外面は細かいハケ調整を施す。

金属器 (図版18・写真図版16) F1は刀子で刃先を欠損する。茎部は長さ4.2cm、幅1.8cmを測る。F3は不明鉄製品で釘的な機能が考えられる。断面方形の芯に断面円形の傘のような形状の外縁部分が取り付

く。この傘のような部分から芯が出ていた箇所では、芯が若干折れ曲がっている。残存長7.5cm、傘部幅1.5cm、芯幅0.7cmを測る。

時期 出土七器から判断して、14世紀から15世紀代と考えられる。

S K 1 1 (図版10・写真図版4)

検出状況 調査区北部に位置する。SB01・05・SK09・10に切られる。

形態・規模 平面形は隅丸の長方形状を呈し、断面形は逆台形気味である。長さ160cm、幅87cm、検出面からの深さ15cmを測る。土器は土に中層（2層）に含まれる。

出土遺物

土器（図版12・写真図版6・7）11は土師皿で口縁付近が屈曲気味である。12は小型の壺の胴部である。「お齒黒壺」のような形態で、一見須恵質のようであるが上師質である。内側に付着物が認められるが成分は不明である。13は青磁の邊弁文碗で、口縁部付近はわずかに外反気味立ち上がり端部を丸くおさめる。外面には鈎蓮弁文を施す。森田分類の青磁綱I-5-a類に相当し¹²、13世紀中頃の時期が与えられる。他に岡化しなかったが、丹波焼大甕や須恵器大甕の胴部が出土している。なお、鍋や羽釜類の出土は皆無である。

時期 出土土器から判断して、13世紀中頃と考えられる。

S K 1 2 (図版10)

検出状況 調査区北端に位置する。北半分は調査区外である。

形態・規模 半分程度しか残存しないが、平面形は梢円形から隅丸長方形状を呈すと思われる。長さ64cm以上、幅120cm、検出面からの深さ45cmを測る。

出土遺物

土器（図版12・写真図版7）14は須恵器の壺で、頸部には斜方向の平行タタキを、肩部以下には綾杉状のタタキを施す。他に岡化しなかったが、須恵器など小片が出土している。

時期 山土器から判断して、12世紀後半から13世紀代の可能性が考えられる。

S K 1 3 (図版10)

検出状況 調査区北部のSD03北肩付近に位置する。柱穴に切られる。

形態・規模 平面形は梢円形、断面形は皿状を呈す。長さ62cm、幅55cm、検出面からの深さ16cmを測る。

出土遺物 摺丹型鏡、須恵器、土師皿などの細片が出土しているが、岡化には耐えない。

時期 出土した土器より、中世の範囲内と考えられる。

S K 1 4 (図版10)

検出状況 調査区北部に位置する。柱穴に切られる。

形態・規模 平面形は梢円形で、断面は逆台形状を呈する。長さ76cm、幅60cm、検出面からの深さ50cmを測る。

出土遺物 瓦質の三足鍋の脚部などの小片が出土している。

時期 出土七器から判断して、12世紀から13世紀にかけての時期が考えられる。

5 井戸

S E 01 (図版11・写真図版3・4)

検出状況 調査区北半部に位置する。SD01の南肩を切る状態で掘削される。

形状・規模 円形プランの掘り方に、椭円形を呈する石積みが施された井戸である。掘り方は直徑2.7～2.9m、検出面から底部までの深さは約3.5mを測り、にぶい黄褐色疊層泥じり粘質シルトから細粒砂層まで掘り込まれていた。その断面形は逆台形を呈し、下面からはさらに水溜部分を掘り込む2段掘りとなっている。この水溜部分の掘り方も断面逆台形となっており、直徑60cm、深さ41cmを測るが、曲物など木質遺物は残存していないかった。

石積みは最上段では長円形をなし、長円形のまま深さ1m付近で南北幅が最大限に狭まって短径が最も小さくなり、それ以下では次第に円形に近づく。石積み最下段では、その直下の四角形に組まれた根太の形状に影響されて方形に配されている。その上部では、四隅の上部を持ち送ることにより円形に近づけられている。

出土遺物

土器 (図版12・写真図版7・8) 15～19は埋土から、20～29は裏込め土からの出土である。

15は土師器の高杯の脚部である。16・17は須恵器で、16は高杯の杯と脚部の境日部分、17は底面部。18は手づくね成形の土師皿で、コースター状を呈する。19は瓦質の三足鍋の脚部である。

20は土師器の高杯の脚部である。21～26は須恵器である。21は楕の底部であろうか、22は甕もしくは鉢の底部であろう。23は口縁のみの圓化であるが甕である。口縁部は短く大きく外反し、端面を持つ。24・25はともに須恵器の捏鉢で口縁下端を拡張するが、25のほうは口縁下への拡張がより顕著で端部全体が肥厚し、端面が垂直となる。26は大甕の頸部で波状文を沈線で区画する。27は丸瓦で、回面に布目痕を残す。28は手づくね成形の土師皿で、外面口縁下部をヨコナード調整により仕上げている。29は土師器鉢で口縁端に平坦面を設ける。30は龍泉窯青磁の盤で、内面に型押しで花弁文を施す。

時期 裏込め土中の遺物の下限が14世紀後半から15世紀前半にかけてである。本遺構の切るSD03最上層の遺物の時期と近接するものの、SD03埋没後の15世紀前半頃に掘削されたものと考えられる。

6 溝

S D 01 (図版5・9・写真図版2)

検出状況 調査区南側で検出した。調査区を東西に横断する。

形態・規模 幅2.2m、検出面からの深さ21cmを測る。ほぼ直線的に伸びるが、調査区西半分においては二股に分岐している。

出土遺物

土器 (図版13・写真図版8) 31～36はいずれも須恵器である。31・32は杯Gである。31は回転ヘラキリで切り離した平坦な底部から直線的に開き、外面上に稜を持って口縁部が立ち上がる。33は碗であろう。34は高杯で、厚い底部から直線的に開く杯部に、透かし孔を持たない低いラッパ状の脚部が取り付く。35はII頸部および底部を欠く。休部は、肩部と体部との境に明確な稜をなす算盤玉型を呈する。本来ラッパ状に開く口頭部を持つ長頸器とも考えられるが、肩部以上の器壁が非常に薄く体部下のカーブもき

ついで平瓶であるの可能性も指摘しておく。36は壺で、口頸部と胴部の破片が接点を持たないため復元は困難を極めたが、倒卵形の胴部に短く開く口頸部の器形に復元するに至った。

時期 出土土器は飛鳥III・IVの範疇に収まる。7世紀後半と考えられる。

SD02 (図版5・9・写真図版2)

検出状況 調査区中央よりやや南寄り、SD01のすぐ北に位置する。

形態・規模 ほぼ直線的に伸び、幅57cm、検出面からの深さ16cmを測る。断面形はU字形をなす。

出土遺物

土器 (図版13・写真図版8) 37は球形の肩部に直口とする口縁部がつく。摩耗が激しいが外面はタテハケ調整が施される。38は大型の土師器壺で、口頸部は胴部からくの字状に屈曲しつつ外反して開く。口縁端は上方につまみあげる。外面胴部はタテハケ調整が、内面口頸部にはヨコハケ調整が顕著である。

時期 出土土器が土師器のみのため判然としないが、7世紀後半頃と考えられる。

SD03 (図版6・9・写真図版5)

検出状況 調査区北部を東西に横断する。

形態・規模 幅7.3m、検出面からの深さ1.7mを測る。断面形は横長のV字形に近いものの、溝底は幅90cm程の平坦な底面を有する。南北両肩付近は緩く傾斜するが、傾斜変換点を境に北側斜面は南側斜面に比して急激に傾斜している。主軸方向はN67°Wを測る。

層序は埋土の観察と遺物の状況から、大きく3層に分かれる。上層は1・2層が該当し、12世紀後半から15世紀代までの遺物を含む。中層は3層が該当し、8世紀代から10世紀代の遺物を含む。下層は、整理段階において4~8層出土の土器の多くが接合できることから、これらの層を一括して扱う。

出土遺物

土器 (図版14~18・写真図版9~16) 39~47が第1層出土、48~70は第2層出土 (以上上層出土)、71~79は第3層出土 (中層出土)、80~130は第4層から第8層出土 (下層出土) の土器である。

39~42は土師皿、口縁部付近にはヨコナデを施し、42は体部と底面の間に稜をなす。43は須恵器捏鉢で、口縁上端を拡張する。44は備前焼の櫛鉢でおろし日を有する。45・46は須恵器大型壺の胴部であろうか、左右3枚ずつ葉を持つ植物の茎が浮き出されている。47~51は輸入陶磁器片。47は龍泉窯青磁碗で、内面に劃花文を施す。13世紀前半であろう。48は同安窯系青磁の皿。やはり13世紀前半であろう。49は龍泉窯青磁碗で、外面には周縁を浅く削り出して広型の無鎮連弁文を浮き立たす。14世紀前半であろう。50は白磁の皿で底部内面に櫛描文で草花文を描く。13世紀代。51は龍泉窯青磁碗の底部。幅広で低い輪高台を削りだす。底部外面には高台脇まで意図的に施釉され、高台裏は露胎である。13世紀代。

52~58は弥生時代後期の土器。52は蓋口縁で、頸部から折れ曲がる口縁は端部を上方に拡張する。53~55は壺の底部であろうか、いずれもタテハケ調整を施し、55のみタテハケ調整の後タタキを施す。56はタタキを施す壺底部、57は円形の透かしを持つ高杯脚部。58は壺胴部の肩部分。2つ以上の竹管文が施される。59は須恵器高杯の脚部。60は須恵器捏鉢で、口縁端部を上下ともにわずかに拡張する。61・62はともに球状の体部をもち口縁部が内傾するタイプの土師器鉢。61の鋸部は口縁部よりやや下に二等辺三角形状に設けられ、62では口縁部より離れて直線的に長く取り付けられる。63は巣内産瓦器碗である。器高の低平化の進み、断面三角形状の高台を持つ。内面には團線状の暗文を施し、見込み部には連

統輪文となる。13世紀前半から中頃の時期が与えられる。64は瓦質の羽釜で、内面は細かくハケ調整が施される。65は平瓦で凹面には布目痕、凸面にはやや太めの繩タタキが残存する。66は龍泉窯青磁であるが碗か皿かは判別しがたい。開き気味の口縁部であり、口縁端で肥厚しつつさらに外側に開く。67は龍泉窯青磁碗で、外面に周囲を薄く削りだすこと無錫の広形蓮弁文を浮き上がらせる。14世紀前半。68・69は漸戸の灰釉陶器。68は碗の口縁。69は平瓶であろうか、外面体部下半以下は露胎である。70は托状皿の底部、平高台状の形状を呈する。

71は杯B身で器高の低い系統、72は突帯のめぐる椀。相生市縁ヶ丘窯産。73は甕または壺の底部。体部外部にはタタキを施し、外側にふんばる輪高台を付ける。74~79は平瓦。78において他の回面に布目痕を持ち、74~76は凸面に格子タタキを施す。77の凸面には指紋が非常に顕著に留まる。なお、78は摩滅しつつも繩タタキが凸面には鉄線切りおよび布の縞じが、79の凸面にはナデ消されながらも繩目が、施された痕跡が認められる。

80~103は須恵器、104~130は十師器である。

80~82は杯B蓋で、81はかえりが付き、より古相を示す。83~89は杯A。多くは器高が高く体部が丸いが、85のように器高の低いもの、88・89のように体部がやや直線的になるものが含まれる。90・91は杯B。91は直立気味に立ち上がり、高台は底面の外側気味に付いて外に向かって張る。92は直径25.9cmに復元される皿で、口縁端部を外側に引き出し、丸く収める。93・94は高杯。93は杯部の脚部に移行する部分に段を設ける底部断面が肥厚する。94は底径の大きめな直状の杯部に、スカート状に開く脚部を取り付く。95は壺Lで、扁平な卵形の体部にやや外反する頸部を持つ。口縁の基部は2段構成である。97は壺K、いわゆる長頸壺の口縁部で沈線をめぐらす。98は同じく壺Kの胴部から底部で、高台は外に向かって張る。99は平瓶である。器高が高く、体部は丸みを帯びる。内外ともに底部付近は丹念にヘラケズリを行う。口縁部は、口径は大きめであるが、短く直線的に開く。100は甕Aである。口径が18.3cmと中型程度の甕で、外反する頸部をもち、口縁部は端部を上方につまみあげる。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。101は甕C（広口甕）である。口縁端部は平坦で端部は内面に突出気味である。102は甕F、いわゆる大甕で、外面口縁下に波状文を施す。103は甕である。焼きが粗悪である。格子状タタキを施す。

104から113は大型の甕である。口縁部は109・112を除いて外反する。これらの口縁端部の多くは直線的に切ったのみであるが、111では顕著に、105・106・113ではわずかに上につまみあげている。口縁部は105・108・109・113では激しく「く」の字形に折れ曲がるが、104・106のように胴部へとだらかに移行するものも認められる。胴部外面はタテハケ調整が施され、内面はヘラケズリが行われているようであるが摩耗が激しく定かではない。

114から119は小型の甕である。胴部は球形に近く、口縁部は115や118のように直線的に開くものと、114・116のように屈曲して上部につまみあげるものとがある。胴部外面はタテハケ調整、内面は摩耗が激しく及ぶがヘラケズリの痕跡がうかがえる。

120・121は弥生土器で、120は後期前半の甕の口縁で、「く」の字形に屈曲した後端面をやや広めにとり、摩耗するがすかに退化凹線を留めている。121は高杯の脚部で器壁が厚い。後期後半頃であろうか。

122・123は土師器の皿A。124・125は土師器の杯Aで、底部と体部の境界に稜をなして外反しつつ側に開くが、口縁端では内側に丸く治める。

127はカマドの破片で、口縁部から焚き口右側上半部にかけてが残る。口縁部は外面に稜をなし、「く

の字形を呈する。128・129は把手付き鏡である。128は下ぶくれ気味の球形の体部に、口縁部はくの字状を呈しながらもやや緩やかに開く。胴部には最大径より上位に牛角形の把手が1対付く。口縁端部には面取りがなされ、体部外面はハケ調整、内面下半はヘラケズリ、上半は横方向の板ナデで調整し、口縁はヨコナデで仕上げる。内面全体にユビオサエ痕を顯著にとどめる。129は胴部最大径付近に把手のつく破片。130は瓶の胴部。

時期 下層出土の土器から、7世紀後半に掘削されたことが考えられる。最上部に15世紀の備前焼(44)を含むが、本造様を切るSE01の裏込め遺物の時期をも勘案すれば、ほぼ14世紀後半頃までに比較的短期間に埋没しており、15世紀には完全に埋没する。

7 包含層出土の遺物

土器 (図版18・写真図版16) 131・132は青みを帯びた灰白色を呈し、13世紀代の華南窯の粗製の合子である。内外ともに天井部は釉を施すが、蓋と身の合わざる部分、すなわち外面口縁端付近および内面体部付近は露胎である。

金属器 (図版18・写真図版16) F2は釘で残存長3.8cm、幅0.5cmを測る。

8 小 結

古代の遺構・遺物について

飛鳥時代（7世紀後半）に3本の溝（SD01～SD03）が掘削されている。

SD01およびSD02に関しては遺物が7世紀後半に限定されることから、短期間に埋没している可能性が高い。SD01から出土した土器は飛鳥III～IVで、後述するSD03にやや先行する要素を持つ。SD02から出土した土器は土師器のみで詳細な時期に較るのは困難を伴うが、SD01に近い時期のものと見られ、SD02がやはり7世紀後半頃に掘削された可能性が考えられる。

SD03は4層から8層にかけて（D層）、3層（中層）、1・2層（上層）に分かれれる。上層は12世紀から15世紀代の遺物が中心となり後述するが、概ね14世紀後半頃に埋没するまで存続している。

下層から出土した土器は、90・91の杯B、98の壺Kなど8世紀前半に下る可能性を持つ一群を含み、中には95の壺Iは8世紀後半にまで下る様相を呈するものも存在するが、概ね飛鳥IVから平城Iの範疇に取まる。下層の堆積時期としては、7世紀後半から8世紀前半にかけての時期が考えられる。

中層から出土した土器では、71は8世紀代に上る可能性を残すが、平安時代中期（10世紀代）のものと考えられる綠ヶ丘窯産72など、平安期のもので構成されており、下層より新相を示す。

さて、中層に含まれる瓦の年代であるが、7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。一方で、2層に含まれている瓦が8世紀代に属す。すなわち、下層に含まれる土器と同時期の瓦が中層に含まれ、中層に含まれる土器と同時期の瓦が上層に含まれる状況となっている。これは日常の什器が使用された年代と構中に投棄された年代とのタイムラグが比較的小さいのに対し、瓦は建物の屋根に葺かれた年代と建物が廃絶または屋根瓦の葺き替えがなされるまでに、建物の一定の存続期間が介在しタイムラグが大きいことによるのではないか。瓦が生産されてから構に埋設するに至るまでにたどる挙動が土器のライフサイクルに比べて、比較的の長期間にわたった要因が考えられるのである。

SD03に関しては埋没過程の観察から、飛鳥時代から奈良時代にかけての管理が想定される。SD03の主軸方向はN67°Wである。この主軸は播磨国分寺創建以前の条里方向であるN27°SないしN63°Wに近似しており、掘削時期である飛鳥時代にこのような条里地割が存在し、それに沿った主軸方向に計画的に造営された可能性が高い。

中世の遺構について

掘立柱建物跡は、SD03の北側に密集する。出土土器が小片に限られ詳細な時期を判別するにはいささかの困難を伴うが、概ね13世紀代から14世紀後半にかけて存続したものと思われる。SB02のみが主軸方向を若干東へ振るもの、他は概ねSD03と主軸方向を共にしており、SD03以南に中世遺構が極めて密度が低いことも含め、埋没しながらも少なくとも14世紀代まではSD03により居住域が区画されていたことがうかがえる。

先述のとおりSD03は中世（14世紀後半から15世紀にかけて）まで存続する。上層（1・2層）の遺物は12世紀後半から13世紀代の土器を含みつつも14世紀代の土器が中心となる。埋没後掘削された井戸の裏込め土に含まれる遺物の時期が非常に近接していることからも、14世紀後半ないし15世紀にかけて比較的短期間に埋没していると考えられる。

SD03の埋没後時期を基すしてSE01が掘削されていることから、溝の埋没により地割区画が変貌した可能性が高い。また、上坑群は13世紀頃から15世紀以降のものまで、建物群が密集していた箇所に掘削されている。

SD03付近では15世紀以降の明確な建物が認められないが、土坑は15世紀以降にも認められる。このことから、それまで居住区域であった箇所がSD03埋没を契機に非居住空間へと変遷していくが、なおも土坑は掘削され、何らかの形で土地利用が継続されていたことが読み取れる。なお、平成14年度調査区では15世紀および16世紀代の土器を含む柱穴が存在しており、15世紀以降居住域はより北側に移動した可能性も考えられる。

なお、13世紀から14世紀にかけては、土師皿の数量が多いことや、鉄泥漿を施した飛び青磁風の青磁碗や白磁四耳壺の存在から、掘立柱建物の住人は莊園開発を直接担った有力農民層というよりは、交通の要所となるわち都市域に居住したやや富裕な消費階層であった可能性が考えられる。

注

1) 土師器鍋の「播丹型」というタイプは、「成形に須恵器の成形技法の伝統を引くタタキ技法を用い、東播磨地域から丹波地域を主な分布範囲とする（岡田・長谷川2003）」タイプをさす。

なお、土師器鍋の編年観は、岡田章一・長谷川眞による編年（岡田・長谷川2003）に拠っている。

2) 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978

なお、この他の陶磁器については森田編年を参考にしつつ、岡田章一氏よりご教示を賜った。

参考・引用文献

岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003

第2節 平成14年度の調査

1 堅穴住居跡

調査区南東部において堅穴住居跡1棟を検出した。

S H O 1 (図版21・写真図版18)

検出状況 調査区南東壁際で検出したため、住居は調査区外へ続がる。検出した屋内施設は、高床部と周壁溝である。

形態・規模 住居跡の大半が調査区外となるため、住居跡の平面形、床面積は不明である。しかし、住居跡の南西隅が隅丸であり、住居跡西辺が直線的であることから、住居跡は隅丸方形であった可能性が高い。検出した西辺の長さは4.3mを測る。高床部は地山を掘り残して作られ、検出した屋内では途切れるところはない。高床部の幅は1m、中央床面からの高さは20cmを測る。周壁溝は検出面での幅10～20cm、深さは5cm前後を測る。主柱穴は検出できなかった。

出土遺物

土器 (図版27・写真図版25・26) 弥生土器甕 (133～138)、壺 (139)、底部 (140) が出土している。

甕は2つのタイプに分類できる。1つは、口縁部端部を上下に拡張し、端面をつくるタイプ (133～136)、もう1つは口縁部端部を丸く收めるタイプ (137) である。138は底部破片のため分類はできない。前者の端面をつくるタイプは、体部内面の調整において、頸部下端までヘラケズリを行う共通の特徴を持つ。体部外表面においては、各個体でばらつきがあり、133はヘラミガキ、134と136はタテハケ後ナデ調整を行う。135は摩耗のため調整は不明である。端面においては、134には1条の、135・136には2条の回線を施す。後者の137は口縁部にヨコナデ調整を行い、体部外表面はタタキの後タテハケ調整を行うが、体部上部にはタタキを残す。138は底部破片である。調整は、体部内面に指押さえ、体部外表面にタテハケを施す。体部外表面は二次焼成により赤変している。

139は壺で頸部を欠く。体部は球形に近い。調整は、体部外表面にタテハケ調整を行い、体部内面は摩耗のため判別しにくいが、ナデもしくは板ナデを行う。体部外表面に煤の付着が確認できる。

140は底部の破片である。指押さえとナデにより成形されたごく短い脚部がつく。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡4棟を検出した。

S B 0 6 (図版21・写真図版19)

検出状況 調査区の北西部で検出した。SD04を切る。

形態・規模 東西2間×南北1間 (4.2m×1.9m) の東西に主軸をもつ側柱建物である。主軸はN83.5°E、平面積は約8m²。柱穴の規模はそれぞれが直径20cm前後、P04で検出した柱旗の直径は14cmを測る。

出土遺物 遺物の出土はなかった。

時期 時期は不明である。

S B 0 7 (図版21)

検出状況 調査区の北西部、SB06の南で検出した。建物の西側が調査区外へと拡がる可能性がある。

形態・規模 南北2間×東西1間以上 (6.2m×2.6m以上) の総柱建物と考えられる。柱穴の規模は、それぞれが直径20cm前後を測る。

出土遺物

土器 柱穴内より上器の細片が出土しているが、図化には耐えない。

時期 出土土器から判断して、12~13世紀代と考えられる。

S B 0 8 (図版22)

検出状況 調査区の南東部、SH01の北側で検出した。SD08と切り合い関係にあり、SD08に切られる。

形態・規模 東西2間以上×南北2間 (2.5m以上×4.2m) の総柱建物と考えられる。柱穴の規模はそれぞれ直径26~30cmを測る。P01、P02、P03で検出した柱桿の直径は、10~14cmを測る。

出土遺物 遺物の出土はなかった。

時期 時期は不明である。

S B 0 9 (図版22)

検出状況 調査区の南西部で検出した。

形態・規模 東西3間以上×南北2間以上 (3.6m以上×4.2m以上) の総柱建物と考えられる。柱穴の規模はそれぞれ直径20~30cmを測る。建物周辺は柱穴が密集する区域であり、P02、P03、P04は他の柱穴と切り合い関係にある。建物自体の拡張や建て替えの可能性が考えられる。

出土遺物 土器が出土している。

土器 (図版28) P04とP05から出土している。P04からは、土師器の皿と須恵器の甕が出土している。図化できたのは144の皿に限られる。他に、図化できなかつたが、より小型の皿も出土している。144は、手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。

P05からは、土師器の皿と鏡が出土しているが、図化できたのは鏡の1点 (143) に限られる。口縁部のみの小片で、内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。皿には、小型のものと、より大型の2タイプが認められる。

時期 出土土器から、13世紀から14世紀にかけての時期に位置付けられる。

3 柱穴

平成14年度の調査では、建物を構成する柱穴以外にも多数の柱穴を検出した。多くは遺物の出土が皆無であるが、なかには時期の特定ができる遺物が出土した柱穴もある。

P 0 1 (図版19)

検出状況 調査区北東部、SB06の西で検出した。

出土遺物

土器 (図版27) 口縁部の端部片 (141) が出土している。口縁部端面に凹線を施す。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

P 0 2 (図版19)

検出状況 調査区西部、SX02の北で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の中皿 2個体 (145・146) が出土している。2個体とも同タイプに分類できるもので、手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。ただし、145はヨコナデ調整が1段であるのに対し、146は2段施されている。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半代と考えられる。

P 0 3 (図版19)

検出状況 調査区西部、SX02の南で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の大皿 1個体 (147) が出土している。手づくねにより整形後、口縁部が弱いヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、12世紀末と考えられる。

P 0 4 (図版19)

検出状況 調査区西部、SD07の北で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿 (148) が出土している。手づくねによる整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、16世紀代と考えられる。

P 0 5 (図版19)

検出状況 調査区東部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器と瓦器が出土している。土師器は、小皿と大皿 (149) が出土しているが、小皿は小片のため固化できなかった。149は、手づくねによる整形後、口縁部が2段のヨコナデ調整により仕上げられている。下段のヨコナデ調整は、わずかに施されているに過ぎない。瓦器は、瓶の小片が出土している。

時期 出土土器から判断して、13世紀代と考えられる。

P 0 6 (図版19・23・写真図版19)

検出状況 調査区東部、SB05の西で検出した。

形態・規模 平面形は円形を呈し、直径28cm、検出面からの深さ33cmを測る。埋土上層から、重なった状態で土師器の皿が出土している。

出土遺物

土器 (図版28・写真図版26) 土師器の皿類が一括で出土している (150~162)。法量的に2タイプに分類でき、いずれも手づくねによる整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、ゆが

みが顕著である。特に、大型の皿は、口縁部を外方に折り返すようなヨコナデ調整が施されている。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半と考えられる。

P 07 (図版19)

検出状況 調査区南東部、SK24とSD08の間で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の大皿が1点 (163) 出土している。手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。全体的に歪みが顕著である。

時期 出土土器から判断して、13世紀代と考えられる。

P 08 (図版19・写真図版19・20)

検出状況 調査区南東部、SD08の西で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿が2点 (164・165) 出土している。165は全て手づくねにより整形されており、粘土紐の離ぎ目も観察することができる。一方、164は、口縁部が最後にヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、14世紀から15世紀と考えられる。

P 09 (図版19)

検出状況 調査区南東部、SD09の西で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の皿と鍋が出土しているが、図化できたのは166の皿のみである。166は手づくねにより整形後、口縁部が3段のヨコナデ調整により仕上げられている。鍋は体部片が出土しており、外面は平行叩きにより仕上げられている。また、外面には煤の付着が認められる。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半と考えられる。

P 10 (図版19)

検出状況 調査区南東部、SD09の南で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿と中皿が出土している。図化できたのは小皿1点 (167) に限られ、中皿は小片のため図化できなかった。167は、手づくねにより整形後、口縁部が弱いヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、16世紀代と考えられる。

P 11 (図版19)

検出状況 調査区南部、SK25の北で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の中皿が1点 (168) 出土している。手づくねにより整形後、口縁部が2段の

ヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、13世紀～14世紀にかけての時期と考えられる。

P 1 2 (図版19)

検出状況 調査区南西部、P13に切られて検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の皿が出土しているが、図化できたのは小皿2点 (169・170) に限られる。2点とも、手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整によりつまみあげられている。他に、図化できなかつたが、より大型の皿も出土している。

時期 出土土器から判断して、16世紀代と考えられる。

P 1 3 (図版19)

検出状況 調査区南西部、P12を切って検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿・中皿と白釉陶器 (171) が出土している。小皿と中皿については、小片のため図化できなかつた。171は皿の底部と考えられ、内面のみ白釉がかけられている。胎土は陶土からなり、底部は回転ヘラケズリにより仕上げられている。後世に混入したものと考えられる。

時期 出土土器から判断して、14世紀代と考えられる。

P 1 4 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 須恵器の捏鉢1点 (172) が出土している。口縁部のみの小片で、口縁端部がわずかに上方につまみあげられている。

時期 出土土器から判断して、13世紀前半と考えられる。

P 1 5 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿 (174) と中皿 (173) が出土している。173は、手づくねによる整形後、口縁部が2段のヨコナデ調整により仕上げられている。2段のヨコナデ調整のうち、下側は弱いヨコナデ調整である。174は全体が手づくねにより整形されている。

時期 出土土器から判断して、14世紀～15世紀にかけての時期と考えられる。

P 1 6 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 七師器の皿と平瓦が出土している。図化できたのは175の小皿に限られる。手づくね

による整形後、口縁部が弱いヨコナデ調整により仕上げられている。他に、圓化できなかったが、より大型の皿も出土している。平瓦は、凹面には布目が、凸面には格子叩きが認められ、桶巻造りによるものである。

時期 出土土器から判断して、16世紀代と考えられる。

P 17 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿と須恵器の甕が出土している。小皿 (176) は、手づくねによる整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。甕は、小片のため圓化できなかったが、外面に叩きが認められ、熱を受け赤色に変化している。この他、粘土塊も出土している。

時期 出土土器から判断して、14世紀後半と考えられる。

P 18 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の皿・鍋、青磁の碗が出土している。圓化できたのは177の青磁碗に限られる。龍泉窯系の碗で、外面に蓮弁が認められる。土師器の鍋は体部片が出土しており、外面は叩き整形により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、14世紀代と考えられる。

P 19 (図版19)

検出状況 調査区南西部で検出した。

出土遺物

土器 (図版28) 青磁の碗が1点 (178) 出土している。全面に釉が掛けられているが、高台先端は欠き削られている。近世後期と考えられる。

時期 山土土器は近世の十器であるが、埋土の特徴が他の柱穴と同じことから、中世の遺構と考えられる。178については、後世の混入と考えられる。

4 土坑

十坑は調査区全体にわたって検出した。分布の傾向としては、柱穴が集中している調査区南部で多く検出されている。出土遺物は皆無のものや、土器小片のみのものが多く、遺物を圓化できたものは少ない。

S K 15 (図版19・23)

検出状況 調査区北東部、SB06の建物範囲内で検出した。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径70cm、短径65cm、検出面からの深さ20cmを測る。横断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐シルトとそれが混じる暗褐極細砂の2層からなる。埋没の状況から

人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S K 1 6 (図版19・23)

検出状況 調査区西壁に接して検出した。土坑西側は調査区外へ拡がる。

形態・規模 平面形は半円形を呈する。調査区際での長軸は長さ180cmを測り、検出面からの深さは最大25cmを測る。縦断面は皿状を呈する。埋上は礫が堆積している。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S K 1 7 (図版19・23・写真図版20)

検出状況 調査区東部、SX01に隣接して検出した。SX01を切る。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径96cm、短径60cm、検出面からの深さ7cmを測る。横断面は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色細砂の1層である。

出土遺物

土器 須恵器壺片、土師器皿片が出土したが岡化には耐えられない。

時期 出土遺物から14世紀と考えられる。

S K 1 8 (図版19・23・写真図版20)

検出状況 調査区西部、SX02と重複して検出した。SX02を切る。

形態・規模 平面形はいびつな梢円形を呈する。規模は長径57cm、短径50cm、検出面からの深さ20cmを測る。横断面は逆台形を呈する。埋土は、土器片・炭化物を含む暗褐色細砂とぶい黄褐色細砂の2層からなる。

出土遺物

土器 (図版28) 土師器の小皿(179)が山上している。手づくねによる成形後、口縁部が弱いヨコナデ削裁により仕上げられている。

時期 出土遺物から16世紀代と考えられる。

S K 1 9 (図版19・23)

検出状況 調査区南部、SD07の北で検出した。

形態・規模 平面形は長梢円形を呈する。規模は長径145cm、短径55cm、検出面からの深さ12cmを測る。横断面は皿状を呈する。埋土は褐色細砂の1層である。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S K 2 0 (図版19・23・写真図版21)

検出状況 調査区南部、SD07の北で検出した。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径65cm、短径50cm、検出面からの深さ15cmを測る。横断面は逆台形を呈する。埋土には土器片、炭化物を含む。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物

土器 土師器の皿の小片が出土している。

時期 出土遺物から13～14世紀代と考えられる。

S K 2 1 (図版19・23・写真図版21)

検出状況 調査区南部、SD07と切り合い関係にあり、SD07を切る。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径155cm、短径100cm、検出面からの深さ25cmを測る。

横断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂～中砂1層からなり、土器片、炭化物を含む。

出土遺物 土器、石器、金属器が出土している。

土器 (図版28・写真図版27) 土師器のみが出土している。器種としては、皿・碗・鉢が出土している。

皿は、中皿(181)と小皿(184)の2タイプが出土している。181は、全体を手づくねによる整形後、口縁部を一段つまむような弱いヨコナデ調整により、仕上げられている。また、内面見込みは、ナデ調整により仕上げられている。184は、口縁部がわずかに残存するもので、口径を復元することはできなかった。全体を手づくねによる整形後、口縁部はわずかにナデ調整により仕上げられている。

碗は182の1個体である。口縁部がわずかに残存するもので、皿に分類される可能性も否定できない。内外面とも手づくねによる整形後、ヨコナデ調整により仕上げられている。

鉢も183の1個体である。底部を中心に残存するもので、全体の器形は明らかにできない。杯の可能性も考えられる。内外面ともヨコナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

石器 (図版30・写真図版29) 砕石(S1)を出土した。

金属器 (図版30・写真図版29) 宋銭(C2)を出土した。

時期 出土遺物から15世紀前半と考えられる。

S K 2 2 (図版19・24・写真図版21)

検出状況 調査区南部、SD07の南で検出した。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径170cm、短径70cm、検出面からの深さ20cmを測る。

横断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色細砂1層からなり、土器片、炭化物を含む。埋土は人工的に埋め戻されている。

出土遺物

土器 土師器が出土しているが、小片のため器種の特定も困難である。ただし、胎土の特徴から、鎌倉時代以降と考えられる。

時期 出土遺物から13世紀～14世紀と考えられる。

S K 2 3 (図版19・24・写真図版22)

検出状況 調査区南部、SD07の東で検出した。

形態・規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長径85cm、短径68cm、検出面からの深さ22cmを測る。横

断面は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂1層からなり、土器片が混じる。

出土遺物

土器 土師器の鋸の体部片が出土しているが、小片のため同化できなかった。外面は叩き整形により整形され、煤の付着が認められる。

時期 出土遺物から14世紀代と考えられる。

SK 24 (図版19・24・写真図版22)

検出状況 調査区南東部、SH01を切って検出した。土坑東側は調査区外へ続く。

形態・規模 平面形は長方形を呈する。規模は長辺150cm、短辺87cm、検出面からの深さ38cmを測る。横断面は、逆台形を呈する。埋土の觀察から、SK24は一度埋没した後に再び掘削が行われたと言える。埋土は4層からなり、最初の土坑は褐極細砂～細砂、灰黄褐色シルト質極細砂の2層からなる。次の土坑は暗灰黄褐色細砂、褐細砂の2層からなる。

出土遺物

土器 (図版28) 上師器の皿1点 (180) が出土している。内外面とも摩滅が著しいが、ヨコナデ調整により仕上げられている。

時期 出土遺物から15世紀代と考えられる。

SK 25 (図版19・24)

検出状況 調査区南端で検出した。

形態・規模 平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は長さ230cm、幅85cm、検出面からの深さ15cmを測る。横断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色細砂～細砂の1層からなり、土器片、炭化物を含む。

出土遺物 遺物の出土はなかった。

時期 時期は不明である。

SK 26 (図版19・24)

検出状況 調査区南端で検出した。土坑南側は調査区外へ抜がる。

形態・規模 検出した平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は長さ170cm、幅70～90cm、検出面からの深さ20cmを測る。断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質極細砂の1層からなり、土器片、炭化物を含む。

出土遺物

土器 (図版27・写真図版25・26) 弥生土器の瓶 (142) が出土している。

142は底部の破片である。中央に直径6mmの孔を穿つ。体部内面にはナデ調整を行い、指押さえの痕跡が残る。体部外面にはタタキ調整を行う。

時期 出土遺物から弥生時代と考えられる。

SK 27 (図版19・24)

検出状況 調査区南西部で検出した。

形態・規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長辺90cm、短辺80cm、検出面からの深さ20cmを測る。縦

断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色細砂の1層からなる。

出土遺物

土器（図版29・写真図版27） 土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼が出土している。

土師器は、中皿（190）と小皿（187～189）が出土している。皿は、口縁部がわずかに残存する個体で、全体を手づくねにより整形され、その後口縁部が1段のヨコナデ調整により仕上げられている。小皿は3個体とも同タイプに分類できるものである。全体が手づくねにより整形されている。このため、全体的にひずみが顕著である。

須恵器は、捏鉢の小片（186）が出土している。口縁端部が上方に大きく引き延ばされている。焼成は良好である。

この他、瓦質土器は羽釜が出土している。備前焼は小片が出土しているが、器種の特定も困難である。

時期 出土遺物から、14世紀後半～15世紀と考えられる。

S K 2 8 （図版19・24・写真図版22）

検出状況 調査区南西部で検出した。

形態・規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長径120cm、短径70cm、検出面からの深さ40cmを測る。

横断面はU字状を呈する。埋土は暗褐色極細砂～細砂の1層からなり、土器片、炭化物を含む。

出土遺物

土器 土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は、鍋と皿が出土している。鍋は肩部が出土しており、外面はタタキにより整形されている。皿は、いわゆる京都系タイプに分類されるものである。須恵器は甕の口縁部片が出土している。

時期 出土遺物から13世紀～14世紀と考えられる。

S K 2 9 （図版19・24・写真図版23）

検出状況 調査区南西部で検出した。SK30に切られ、SK31を切る。

形態・規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長径65cm、短径55cm、検出面からの深さ20cmを測る。横断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の1層からなり、土器片を含む。

出土遺物

土器（図版29・写真図版27） 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、皿と鍋が出土している。皿は、193と192が出土している。193は、全体が手づくねにより整形されている。192は、手づくねによる整形後、口縁部が2段のヨコナデ調整により仕上げられている。特に、上側は強いヨコナデ調整により仕上げられている。鍋は小片のため図化できなかつたが、鉄鉢形の一部と外面にタタキが認められる体部の小片が出土している。

須恵器は、捏鉢（191）が出土している。口縁端部を下方にわずかに引き延ばし、拡張させている。焼成は良好である。

時期 出土遺物から14世紀代と考えられる。

S K 3 0 （図版19・25・写真図版23）

検出状況 調査区南西部で検出した。SK29を切る。

形態・規模 平面形はいびつな楕円形を呈する。規模は長径135cm、短径75cm、検出面からの深さ35cmを測る。横断面は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の1層からなり、土器片、炭化物を含む。

出土遺物

土器 (図版28・写真図版27) 土師器、須恵器、焼土塊が出土している。

土師器は、皿・甌・鍋が出土しているが、圓化できたのは185の皿1個体に限られる。185は、手づくねによる整形後、口縁部を1段の強いヨコナデにより仕上げられている。また、体部から底部にかけては、内面は横方向のナデにより仕上げられているが、外面は未調整に近い。この他、鍋は体部片が出でており、外面に平行タタキが認められる。甌も体部片が出でしており、外面にタタキが認められる。

須恵器は、甌の口縁部片が出土している。

時期 出土遺物から14世紀後半と考えられる。

S K 3 1 (図版19・25・写真図版23)

検出状況 調査区南西部で検出した。SK29と切り合い関係にあり、SK29に切られる。

形態・規模 検出した平面形は円形を呈する。径56cm、検出面からの深さ10cmを測る。断面は皿状を呈する。埋土は暗黄褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

出土遺物

土器 土師器の小皿・中皿・鍋が出土しているが、いずれも小片のため圓化できなかった。鍋は体部片が出土しており、外面は叩き整形により仕上げられ、煤の付着が認められる。

時期 出土した遺物から13世紀～14世紀と考えられる。

5 土壙墓

検出した土坑のうち、その形状、出土遺物などから墓である可能性がある2基を土壙墓とした。これらの土壙はいずれも東西方向を長軸とし、土壙の平面形が長方形を呈する。掘削も丁寧に行われた様子があり、土壙底部は水平を保つ。

S X 0 1 (図版19・25・写真図版24)

検出状況 調査区東部で検出した。SK17と切り合い関係にあり、SK17に切られる。

形態・規模 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ136cm、幅44cm、検出面からの深さ16cmを測る。長軸を東西方向とし、墓壙底部は水平を保つ。墓壙断面は、南側が垂直に近い立ち上がりとなるが、北側は緩やかに立ちあがる。埋土はにぶい黄褐色細砂と褐色細砂の2層からなり、褐色細砂層上面にわずかに灰が混じる。

出土遺物

土器 (図版29・写真図版28) 土師器と青磁が出土している。

土師器は小皿と羽釜が出土している。小皿は、199～202の4個体である。法量的な差が認められるが、いずれも全体を手づくねにより整形後、口縁部は1段のヨコナデ調整により仕上げられている。199を除いては、ヨコナデ調整はわずかに施されている程度である。

羽釜は198の1個体である。体部内外面をハケ調整により仕上げ、その後鈎を貼付け、指サエによ

り整形されている。最後に、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。鰐以下外面に煤の付着が認められる。鰐の幅は1.4cmを測る。

青磁は、碗の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土した遺物から13世紀後半と考えられる。

S X 0 2 (図版19・25・写真図版24)

検出状況 調査区西部、SB07の南側で検出した。SK18に切られる。

形態・規模 平面形は長方形を呈し、長さ230cm、幅56cm、検出面からの深さ10cmを測る。長軸をやや南よりの東西方向に持つ。墓坑底部は水平を保つ。墓坑横断面は直状を呈する。埋土は灰褐色シルト質極細砂～中砂1層からなり、土器片を含む。

出土遺物

土器 (図版29・写真図版28) 土師器の皿 (203～207) が出土している。皿は、全体を手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土した遺物から14世紀後半と考えられる。

6 溝

S D 0 4 (図版19・26・写真図版17)

検出状況 調査区北部で検出した。SB06と切り合い関係にあり、SB06に切られる。西端は調査区外へと伸び、東端は徐々に浅くなり調査区内で収束する。

形態・規模 南西から北東方向へ直線的に伸びる溝である。長さ15m、最大幅90cm、横断面での深さ10cm前後を測る。断面は中心が一番深くなる緩やかなV字状を呈する。埋土は、黒褐色シルト混じり暗褐色細砂1層からなる。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S D 0 5 (図版19・26・写真図版17)

検出状況 調査区北部、SB06とSB07の間で検出した。他の造構との切りあいは認められない。SB07の梁行方向とはほぼ平行する。

形態・規模 北北東から南南西へ直線に伸びる溝である。長さ4m、幅30～80m、横断面での深さ10cmを測る。断面は直状を呈する。埋土は黒褐色シルト混じり暗褐色細砂1層からなり、小石を含む。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S D 0 6 (図版19・26・写真図版17)

検出状況 調査区北西部、SB07の建物範囲内で検出した。SB07との切りあいは認められない。SB07の梁行方向とはほぼ平行する。

形態・規模 途中で方向と幅を若干変化させながら、北北東から南南西へと直線的に伸びる溝である。長さ5.4m、幅40~70m、横断面での深さ4cmを測る。横断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト混じり暗褐色細砂1層からなる。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

S D 0 7 (図版19・26・写真図版17)

検出状況 調査区南部で検出した。SK21と切り合い関係にあり、SK21に切られる。

形態・規模 西端は調査区外へと伸び、東端は調査区内で収束する。東から西へと緩やかに弧を描きながら伸びる溝である。長さ12m、幅は最狭部分で1m、西側調査区際では5.5mを測る。横断面での深さ32~37cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は水平である。埋土はにぶい褐色シルト質極細砂と円礫からなり、土器片、炭化物が混じる。

出土遺物

土器 土師器の鍋と瓦質土器の鍋が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

時期 出土した遺物から13世紀以降と考えられる。

S D 0 8 (図版19・26・写真図版17)

検出状況 調査区南東部で検出した。SB08と重複する。柱穴に切られるが、建物との切り合い関係は認められない。SB08の梁行方向とほぼ平行する。

形態・規模 SH01西側から北東へと直線的に伸びた後、東側へ直角に曲がる溝である。東端は一段深くなり、調査区外へと伸びる。直線部分の長さ7.4m、幅50~100cmを測る。横断面は皿状を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は褐色シルト質極細砂、にぶい黄褐色シルト質極細砂、にぶい黄褐色細砂の3層からなる。埋没の状況から、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器が出土している。

土器 (図版29・写真図版27・28) 土師器の鍋が出土している。鉄鉢形(194・195)と羽釜形(196・197)の2タイプに分類できる。194と195については、その特徴から同一個体の可能性の高いものである。完形近くに復元できた194は、体部から口縁部にかけての外表面を叩き整形後、口縁部が強いヨコナデ調整により仕上げられている。その後、内面はハケ調整が施されている。外表面には煤の付着が顕著に観察できる。

196と197についても、同一個体の可能性の高いものである。体部を叩き整形後、口縁部下に鉗を貼付け、口縁部と合わせて強いヨコナデ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整により仕上げられている。鉗以下の外表面には煤の付着が認められる。

時期 出土した遺物から15世紀代と考えられる。

S D 0 9 (図版19・26・写真図版18)

検出状況 調査区南部、SH01の西側で検出した。SH01を切り、その西辺と直交する。

形態・規模 東西に直線的に伸びる溝である。長さ90cm、幅30cm、横断面での深さ10cmを測る。横断面は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。

出土遺物 遺物の出土は無い。

時期 時期は不明である。

7 包含層

出土遺物

土器（図版29・30・写真図版28・29） 土師器・瓦質土器・備前焼・陶器が出土している。

土師器は、皿（208・209）・鉢（210）・鍋（211）が出土している。皿は、2個体とも小皿に分類されるものであるが、整形技法を異にする。208は手づくによる整形後、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。一方209は、全てが手づくねにより整形されている。

鉢の210は、形態的に須恵器の捏鉢に類似する。胎土の特徴から土師器と判断したものである。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

鍋の211は、鉄鉢形に分類されるもので、外面を叩き整形、内面をハケ調整後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。体部外面に煤の付着が認められる。

瓦質土器はいずれも羽釜が出土している（217～219）。3個体ともその特徴を同じくするもので、体部外面を指オサエにより整形後、鉗を貼付け、口縁部とあわせてヨコナデ調整により仕上げられている。鉗の幅は1.3cm～1.4cmを測る。また、219の体部外面には煤の付着が認められる。

備前焼は、壺（213）・甕（214～216）・擂鉢（212）の各器種が出土している。なお、擂鉢を除いては、須恵質に焼成されている。壺の213は、口縁端部を大きく折り返し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。甕は3個体出土しているが、口縁端部の特徴が異なる。214は端部をわずかに外反させているが、216は大きく折り返されている。いずれも、回転ナデ調整により仕上げられている。そして、215は、大きく折り返しその端部が口縁部と接合し、口縁部が玉縁状をなしている。216を除いては、焼成は良好である。擂鉢の212は、口縁端部が体部に対して直交する端面を有する。焼成も良好である。

陶器は、220の1個体である。皿と考えられ、江戸時代後期と考えられる。

8 小 結

弥生時代の成果について

平成14年度調査区において弥生土器を出土した遺構は、SH01、P01、SK26である。完形で出土した土器はなく、図化のできた器種は壺、甕、高坏脚部、瓶であり、その他は底部や口縁部片などである。ここでは必要に応じて平成13年度調査区のSD03出土資料も含めて、本調査区周辺の弥生時代における広がりについて整理したい。

今宿遺跡のある播磨地域では、今里幾次による弥生式土器の編年作業に始まり¹⁾、その後の発掘調査による資料の増加に伴い西播磨、東播磨における弥生土器の編年が確立しつつある²⁾。今宿遺跡出土の弥生土器の検討を進めるにあたっては、これらの研究のうち長友朋子・田中元浩が行った西播磨地域の編年を基にして行っていく³⁾。

今回出土した遺物では、甕の個体数が最も多く、形態も観察できるため、甕を中心に検討を進める。

これら甕を出土した遺構は、平成13年度のSD03、平成14年度のSH01である。

SD03出土の53、54、55、56は甕の底部である。53、54、55は体部外面にハケ調整、56は体部外面にタキを施す。55、56の体部内面はハケ調整が行われる。いずれも長友・田中編年においてV期後半以降（弥生時代後期後半以降）の様相を示す。また、120は甕の口縁部であり、端面をつくり、かすかに掘回線を施す。長友・田中編年においてV期前葉（弥生時代後期前半）の様相を示す。

SH01出土の133～136は口縁端部を上下に拡張して端面をつくり、凹線を施す。体部外面はヘラミガキおよびハケ調整を施し、体部内面は頸部下端付近までヘラケズリを行う。これは、長友・田中編年のV期初頭（弥生時代後期初頭）の様相を示す。137の口縁端部は丸く、口縁部にヨコナデを行なう。体部外面はタキの後、ハケ調整を行うが体部上半にはタキが残る。これは、長友・田中編年のV期後半以降の様相を示している。甕以外では、139は体部外面にハケ調整を行い、体部内面は摩滅して判別しにくいが、板ナデが指ナデの調整を行なう。肩部は球形を呈し、小形の壺である。ヘラケズリを行なっていない点、体部が球形化している点などからV期後半、141は口縁部に凹線を施しており、甕との比較からV期初頭、172は体部外面にタキがあるためV期後半に位置付けられると考えたい。

今回の調査では弥生時代後期初頭と弥生時代後期後半の遺物が出土していることが判明した。このなかで、若干の考察を行なわなければいけないのが、平成14年度調査のSH01である。

SH01からは、V期初頭の133～136、V期後半の137、139が出土している。同一住居内から2時期の遺物が出土している。出土状況は、137が高床部直上から出土し、それ以外の土器は住居中央部の埋土最下層から出土している。遺物の出土状況から137が住居廃絶時の土器と考えられるが、堅穴住居の埋没過程において偶然に高床部に廃棄されたとも考えられる。このことからSH01は古くてV期初頭の住居であり、新しくてもV期後半には廃絶していたと考えられる。

平成13・14年度に行った調査区は、弥生時代後期初頭の遺構が存在する可能性が判明したが、中心は後期後半となる。しかも、検出した遺構は溝1条と堅穴住居1棟、土坑1基、柱穴1基とわずかである。今回の調査区が集落の中心とは考えにくく、その縁辺地域であったと考えられる。

注

- 1) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態（一）」『考古学研究』第15巻4号 1969
今里幾次「播磨弥生式土器の動態（二）」『考古学研究』第16年第1号 1969
- 2) 森岡秀人・荒木幸治「播磨地域における弥生土器編年研究の沿革素描」『大手前大学史学研究所オーブン・リサーチ・センター研究報告第5号 弥生土器集成と編年 一播磨編一』 大手前大学史学研究所 2007
- 3) 長友朋子・出中元浩「西播磨地域の土器編年」『大手前大学史学研究所オーブン・リサーチ・センター研究報告第5号 弥生土器集成と編年 一播磨編一』 大手前大学史学研究所 2007

参考文献

- 甲斐昭光『周世人相遺跡』 兵庫県教育委員会 1990
山田清朝『市之郷遺跡』 兵庫県教育委員会 2007

山田清朝(編)『美之利遺跡』 兵庫県教育委員会 1997

正岡龍大「凹線紋・擬回轉紋」『弥生文化の研究』3 雄山閣出版 1986

岸本道昭「播磨弥生後期土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡－仮称揖龍農業共同組合営農センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 龍野市教育委員会 1998

中田宗伯「弥生時代中期土器の検討」『東有牛・沖田遺跡－ほ場整備事業に伴う発掘調査－』赤穂市教育委員会 2003

中世土器について

当該期の土器としては、土師器・須恵器・瓦器・備前焼・青磁・白磁が出土している。本項では、平成14年度調査区川土器の具体的年代の検討を行うこととする。

(1)土師器

碗・皿類・鉢・鍋が出土している。器種ごとにその特徴を検討する。

I : 皿類

いざれも手づくね成形によるものである。口径と器高を基準とした法量分布(第4図)をみると、口径が①13cm以上、②10cm～12cm、③9cm以下の大きく3タイプに分類することができる。以下、便宜上、①を大皿、②を中皿、③を小皿と呼称する。

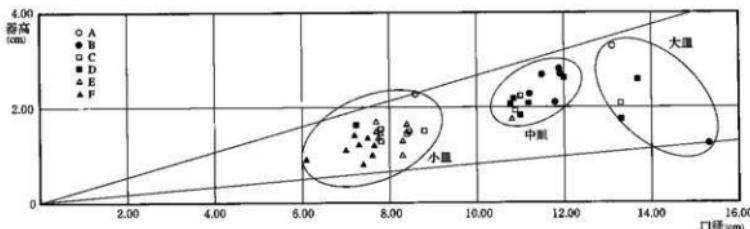
大皿は、形態・製作技法上、A～Dの4タイプに細分できる(第5図)。大皿Aは、体部から口縁部にかけて大きく内湾気味に立ち上がるもので、163の1個体が該当する。口径に対して器高が高い点が、特徴である。13世紀代と考えられる。

大皿Bは、口縁部が短く内湾気味に立ち上がるものである。147が該当する。兵庫津編年¹²⁾において、12世紀末に位置付けられている。

大皿Cは、口縁部を2段のヨコナデ調整により仕上げるものである。149が該当する。

大皿Dは、底部から体部にかけて緩やかに立ち上がるのに対し、口縁部は折り返すようなヨコナデ調整により仕上げられるものである。口径に対して器高の高いD1(150)と、器高の低いD2(203)に細分できる。兵庫津編年において、14世紀後半に位置付けられている。

中皿は、形態・製作技法上、A～Fの6タイプに細分できる。中皿Aは、鉢形をなし、口縁部がヨコナデ調整によりわずかに外反するものである。完存するものは認められないが、口径に対して深いタイプである。146・145・151・207が該当する。P02・P06において、中皿Cと共に伴っている。



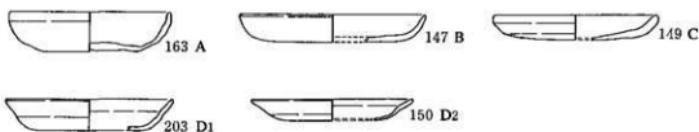
第4図 土師器 皿類の法量分布

中皿Bは、中皿Aに対して器高の低い一群である。全体的に口縁部の外反が顕著である。全体的に器壁が薄く仕上げられるB1(152・173)、逆に厚く仕上げられるB2(153・185)、B1同様器壁が薄く仕上げられ平底をなすB3(154)に細分できる。兵庫津編年において、B1とB3は14世紀前半に、B2は14世紀後半に位置付けられている。

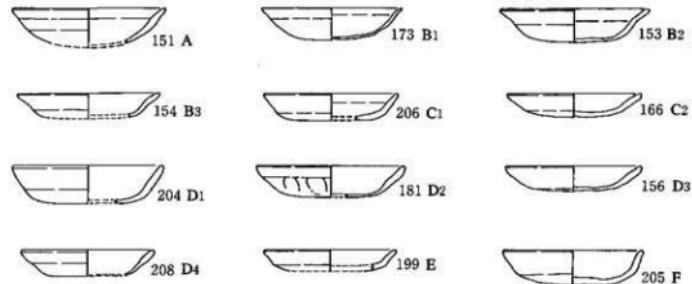
中皿Cは、大皿Dの小型のものである。体部から口縁部にかけての立ち上がりが急なC1(206)、口径に対して器高が低いC2(166)に細分できる。大皿D同様、兵庫津編年において、14世紀後半に位置付けられている。

中皿Dは、薄い底部に対して口縁部がほぼ直線的のびるもの。口縁部が内湾傾向かつ、肥厚気味である点が特徴的である。口径に対して器高が高いD1(204)、D1より器高が低いD2(181)、D2よりさらに浅いD3(155・156・144)、口縁部が顕著に肥厚するD4(208・168)、の4タイプに細分でき

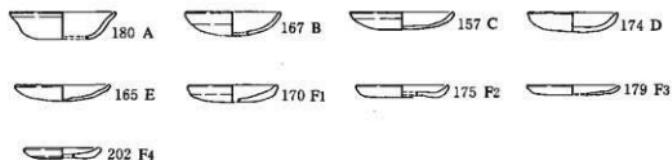
大皿



中皿



小皿



第5図 土師器皿の分類

る。兵庫津編年において、D 2とD 3は15世紀前半に、D 4は14世紀後半に位置付けられている。

中皿Eは、短く外反する口縁部を有するタイプである。199の1個体が該当する。兵庫津編年において、13世紀後半に位置付けられている。

中皿Fは、中皿Eに対して器高が高いタイプである。205の1個体が該当する。

小皿は、形態・製作技法上、A～Eの5タイプに細分できる。小皿Aは、小皿のなかでは深い杯形を呈するものである。内湾気味に立ち上がる体部に対し、口縁部が横ナデ調整により外反するものである。中皿Cに類似する。180の1個体が該当する。

小皿Bは、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる、やや深いタイプの皿である。167の1個体が該当する。本町遺跡において、16世紀代の資料に出上例が認められる²⁾。

小皿Cは、手づくね成形後、口縁部を弱い横ナデ調整により仕上げるタイプである。157・158・161・162・164・176が該当する。14世紀後半とされるP 06において、共伴している。

小皿Dは、整形手法は同じであるが、小皿Cより口径に対して器高が高いタイプである。174の1個体が該当する。P 15において14世紀前半に位置付けられる中皿B 1と共に伴しているが、市之郷遺跡においては、15世紀の資料中から出土している³⁾。よって、14世紀から15世紀にかけての時期に位置付けられるものと考えられる。

小皿Eは、手づくね成形のみで仕上げるタイプである。底部は丸底に近く、不安定である。法量的には、小皿Cと大きな変化は認められない。159・160・165・187～189・209・217の8個体が該当する。市之郷遺跡では、15世紀代の一括資料中に認められる。SK 27では14世紀後半の捏鉢と共に伴していることから、14世紀後半～15世紀に位置付けられる。

小皿Fは、平底の底部に口縁部が短く立ち上がるものの、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。法量的に最も小型のタイプである。口縁部に明確な端面が形成されているF 1 (169・170・193・200・201)、F 1ほど端面が明確ではなく、口縁部の立ち上がりがわずかなF 2 (148・175)、口径に対して器高が低く、口縁部の立ち上がりがわずかなF 3 (179)、F 3をより小型化したF 4 (202)、の4タイプに細分できる。兵庫津編年において、16世紀後半に位置付けられている。

II : 鍋類

いわゆる鉄かぶと形・羽釜形・菱形の3タイプが出土している。鉄かぶと形については、15世紀代に位置付けられるものである⁴⁾。194・195・211の3個体が該当する。市之郷遺跡でも、15世紀前半に位置付けられる資料中から出土している。羽釜形は196・197の2個体に限られる。鉄かぶと形同様、15世紀前半に位置付けられるものである。菱形については143の1個体で、13世紀代に位置付けられるものである。

III : 羽釜類

196の1点出土している。半球形の体部上半に、比較的幅の狭いつばを貼り付けるタイプである。

(2) 須恵器

捏鉢が出土している。172・186・191の3個体である。172は13世紀前半に、186は14世紀後半に、191は14世紀から15世紀にかけてと考えられる。

(3) 瓦質土器

三足鍋と考えられる鍋が3点(217～219)出土している。市之郷遺跡においては、13世紀前半の一括資料中に出土例が認められる。

(4) 備前焼

壺・甕・擂鉢が出土している。

I : 壺

213の1個体である。口縁部の特徴から、14世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

II : 甕

214～216の3個体出土している。いずれも口縁部の特徴を異にし、214が13世紀代に、215が14世紀前半に、216が14世紀後半に、それぞれ位置付けられる。

III : 擂鉢

212の1個体である。Ⅲ期に位置付けられるものである。14世紀中頃と考えられる。

注

- 1) 関田章一・長谷川 真『兵庫津遺跡II－一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
兵庫県教育委員会 2004 以下、当報告における編年を「兵庫津編年」と呼称。
- 2) 秋枝 芳『本町遺跡』姫路市教育委員会 1984
- 3) 山田清朝『市之郷遺跡－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I－』兵庫県
教育委員会 2005 以下、市之郷遺跡に関する記述は、全て当該報告による。
- 4) 前掲1)

第1表 今宿遺跡出土土器一覧表

器物番号	器物名	出土地場	出土層位	種別	器種	法面 (cm)			残存	
						口径	底面	裏面		
1	12	6	S004	陶器	縦鉢	24.8	(4.2)	—	口縁1/8	
2	12	6	P029	土器	盆	11.6	2.2	9.2	口縁1/4 底盤1/2	
3	12	6	P031	陶器	盆	—	—	—	底盤片	
4	12	6	P033	土器	臼	—	—	—	—	
5	12	5	SK01	第1層 第1巻	臼	—	—	—	—	
6	12	5	SK01		瓦片±器	12.9	2.5	3.4	口縁1/3	
7	12	6	SK05	瓦片±器	羽茎	35.9	(4.5)	—	口縁1/6	
8	12	6	SK09	瓦片±器	羽茎	25.2	(4.4)	—	口縁1/2箇	
9	12	5	SK03	瓦片±器	羽茎	30.0	(7.0)	—	口縁1/3	
10	12	5	SK10	土器	縦鉢	24.7	(10.4)	—	口縁1/6種	
11	12	6	SK11	土器	縦鉢	25.2	(2.75)	—	口縁1/3	
12	12	6	SK11	土器	縦鉢	9.1	(1.6)	7.7	口縁1/4	
13	12	7	SK1	青白釉	輪	—	(5.7)	5.1	底盤1/3	
14	12	7	SK12	底盤	輪	17.1	(4.4)	—	口縁1/2	
15	12	—	井戸内土中上	土器	底盤	—	(5.5)	—	底盤底片	
16	12	7	SE01	井戸内土中上	土器	底盤	—	(3.8)	—	底盤形のみ
17	12	7	SE01	井戸内土中下層	底盤	—	(2.05)	—	底盤底片1/4	
18	12	7	SE01	井戸内土中下層	底盤	—	(2.75)	7.6	底盤1/8	
19	12	5	SE01	井戸内土中上	瓦片±器	足	12.9	—	11.6	口縁1~2束1/5
20	12	5	SE01	井戸内土中上	瓦片±器	足	身(8.4)	幅(2.5)	身(2.6)	足の先端を欠く
21	12	5	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底	—	5.3	—	口縫1/2箇
22	12	5	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底	—	(1.6)	5.6	底盤2/3
23	12	5	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底	—	(4.05)	9.0	底盤1/4
24	12	5	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底	22.7	(4.5)	—	口縁1/4
25	12	5	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底盤	25.4	(6.1)	—	口縁1/8
26	7	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底盤	25.4	(5.7)	—	口縁1/10	
27	7	SE01	井戸内土中	瓦片±器	底	—	—	—	—	
28	7	SE01	井戸内土中	瓦片±器	輪	13.15	(2.1)	—	口縫1/2束1/4	
29	8	SE01	井戸内土中	瓦片±器	輪	—	(4.5)	—	口縫わざ	
30	8	SE01	井戸内土中	瓦片±器	輪	15.8	(3.6)	—	口縫1/5	
31	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	8.8	1.6	5.5	口縫1/2束1/2
32	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	10.1	3.25	5.0	口縫わざ2ヶ 直縫はば充形
33	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	13.85	(5.7)	—	口縫1/9
34	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	—	(5.2)	—	底盤底片
35	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	21.2	(47.3)	—	口縫1/8束2/20束2/30束2/30束2/16
36	13	8	SD01	第1階~第2階	瓦片±器	輪	8.4	(9.8)	—	口縫1/5
37	13	8	SD02	第1階~第2階	土器	身	24.3	(10.9)	—	口縫1/9
38	13	8	SD02	第2階下半	土器	身	6.6	1.2	8.0	口縫5/6
39	14	9	SD03	第1層	土器	身	6.5	1.2	6.2	口縫1/6
40	14	9	SD03	第1層	土器	身	6.2	1.7	4.7	口縫1/3
41	14	9	SD03	第1層	土器	身	8.7	(2.0)	—	口縫1/2
42	14	9	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	—
43	14	9	SD03	第1層	土器	身	31.44	(5.17)	—	口縫1/6
44	14	9	SD03	第1層	土器	身	29.0	12.8	14.8	口縫2/2 束縫1/2箇
45	14	9	SD03	第1層	土器	身	—	(14.5)	—	外側底片
46	14	9	SD03	第1層	土器	身	—	(9.8)	—	外側底片
47	14	9	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
48	14	10	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
49	14	10	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
50	14	10	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
51	14	10	SD03	第1層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
52	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	—	—	底盤底片
53	14	9	SD03	第2層	土器	身	25.3	(4.0)	—	口縫1/12箇
54	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(2.2)	5.1	底盤2/2
55	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(2.4)	5.3	底盤3/1
56	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(2.65)	5.4	底盤3/1
57	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(3.8)	5.5	底盤3/1種
58	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(4.8)	—	底盤底片
59	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	(2.1)	—	引脚底片
60	14	9	SD03	第2層	土器	身	—	—	—	底盤のみ
61	14	10	SD03	第2層	土器	身	26.6	(3.6)	—	口縫1/4
62	14	10	SD03	第2層	土器	身	22.8	(4.9)	—	口縫1/13
63	14	10	SD03	第2層	土器	身	26.1	(0.7)	—	口縫1/13
64	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	—	(3.45)	5.2	底盤1/3
65	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	25.3	(4.1)	—	口縫1/36
66	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	—	(5.8)	—	底盤のみ
67	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	—	—	—	外側底片
68	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	—	—	—	口縫底片
69	14	10	SD03	第2層	瓦片±器	輪	—	—	—	底盤底片
70	14	10	SD03	第2層	土器	身	—	—	—	底盤1/1
71	15	11	SD03	第3層	土器	身	—	(2.2)	6.7	底盤1/1
72	15	11	SD03	第3層	土器	身	20.2	4.15	15.25	口縫若干 西高部1/5
73	15	11	SD03	第3層	土器	身	—	(2.9)	—	安樂の一部のみ
74	15	11	SD03	第3層	土器	身	—	(5.25)	15.2	克縫1/9
75	15	11	SD03	第3層	瓦片	身	身(8.05)	幅(7.2)	身(2.25)	底盤2/2
76	15	11	SD03	第3層	瓦片	身	身(4.6)	幅(6.9)	身(2.25)	破片のみ
77	15	11	SD03	第3層	瓦片	身	身(5.7)	幅(8.85)	身(3.3)	—
78	15	11	SD03	第3層	瓦片	身	身(12.7)	幅(11.85)	身(2.45)	左上縫
79	15	11	SD03	第3層	瓦片	身	身(14.85)	幅(11.45)	身(2.55)	—
80	16	12	SD03	第3層	瓦片	身	身(13.1)	幅(14.45)	身(1.8)	駆動の一部のみ
81	16	12	SD03	第3層	底盤	身	—	(2.9)	—	つまみ付破片

報告 番号	国鉄 番号	発見 箇所	出土場所	出土属性	種別	器種	法量 (m)			現存
							一口径	合基	底径	
81	16	12	SD03	第3層	唐物器	杯込壺	12.7	3.2	—	口縁1/2弱
82	16	12	SD03	第3層	唐物器	杯込壺	16.2	(3.2)	—	口縁1/2弱
83	16	12	SD03	第3層	唐物器	杯込壺	10.4	3.6	5.9	口縁1/2弱
84	16	12	SD03	第3層	唐物器	杯込壺	19.85	(3.3)	7.45	口縁1/2弱
85	16		SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	12.0	2.65	8.0	口縁地わざけ
86	16	12	SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	12.0	3.8	7.6	口縁1/4弱 伴形1/12
87	16	12	SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	11.9	3.8	7.5	はな形
88	16		SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	12.0	3.7	6.3	口縁1/2 底部1/4弱
89	16	12	SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	12.0	3.3	9.0	口縁1/1.5 底部2/3
90	16	12	SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	11.4	4.7	8.8	口縁1/2弱
91	16	12	SD03	第3層	陶瓦器	杯込壺	12.0	8.45	16.0	口縁1/2 強度1/5
92	16		SD03	第3層	陶瓦器	皿	25.9	(2.6)	21.0	口縁~底部1/5
93	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋杯	11.6	(4.1)	—	口縁1/4弱
94	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋杯	—	(5.1)	—	肩付器と杯形の一部のみ
95	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋し	16.6	20.2	17.0	口縁1/4 底部1/2 欠損
96	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(2.9)	9.0	底付1/10
97	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(19.3)	—	預留のみ
98	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(11.7)	12.0	底付1/5 休部1/7
99	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	平底	10.5	15.67	9.2	口縁1/4
100	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋A	17.7	(6.45)	—	口縁1/3
101	16		SD03	第3層	陶瓦器	蓋B	32.5	(5.1)	—	口縁1/1.2
102	16	13	SD03	第3層	陶瓦器	蓋C	—	(12.5)	—	肩付小片
103	16		SD03	第3層	陶瓦器	蓋F	—	(6.6)	—	各部小片
104	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	23.7	(13.05)	—	口縁1/2
105	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	23.4	(8.3)	—	口縁むずか 斜面1/4
106	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	24.2	(9.9)	—	口縁1/4
107	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	25.4	(8.3)	—	口縁むずか 強度1/6
108	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	27.7	(9.85)	—	口縁1/7
109	17	14	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	27.8	(9.25)	—	口縁1/2
110	17		SD03	第3層	陶瓦器	蓋	29.7	(8.5)	—	口縁1/10
111	17	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	22.3	(13.9)	—	口縁3/4(複数不可)
112	17	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	22.7	(21.05)	—	口縁1/8
113	17	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	25.8	(27.2)	—	口縁複数不可3片で1/2
114	17	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	25.9	(18.4)	—	口縁1/2強度1/3
115	17		SD03	第3層	陶瓦器	蓋	14.9	(4.7)	—	口縁1/9
116	17	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	14.2	(5.3)	—	口縁強度若干
117	17	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(3.9)	—	強度1/4弱
118	17	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	17.0	(4.8)	—	口縁1/3弱
119	17	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	15.6	(13.1)	—	口縁4/5
120	18		SD03	第3層	陶瓦器	蓋	20.0	(4.5)	—	口縁1/4強
121	18		SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(7.9)	—	肩付のみ
122	18	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋A	13.6	2.6	11.7	口縁1/4
123	18	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋B	17.4	2.4	12.7	口縁1/6
124	18	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋A	16.6	4.0	13.8	口縁1/5 底部1/3
125	18	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋A	18.7	(3.8)	14.7	口縁1/6
126	18		SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(6.4)	—	電子鏡観
127	18	15	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	29.6	(18.6)	—	口縁1/4強口ひさしの一部
128	18	15	SD03	第3層	陶瓦器	把手付筒	20.2	(24.8)	25.9	口縁2/3
129	18		SD03	第3層	陶瓦器	把手付筒	—	(6.6)	—	把手破片
130	18	16	SD03	第3層	陶瓦器	蓋	—	(8.0)	—	円錐形破片把手あり
131	19	16	SD03	第3層	陶瓦器	合子壺	—	(2.2)	—	口縁竹西瓶片
132	19	16		合子壺	合子壺	—	(2.05)	—	口縁竹西瓶片	
133	27	25	SD01	第7下層	骨付土器	圓	18.85	(8.9)	—	口縁1/2
134	27	26	SD01	第7下層	骨付土器	圓	20.0	(8.0)	—	口縁4/6器
135	27	26	SD01	第7下層	骨付土器	圓	18.0	(8.9)	—	口縁1/2器
136	27	25	SD01	第7下層	骨付土器	圓	15.8	(8.25)	—	口縁1/8
137	27	25	SD01	ペッド上	骨付土器	圓	17.2	(12.8)	—	口縁1/5 休部1/4
138	27	25	SD01	第7下層	骨付土器	圓	—	(3.0)	4.3	直腹3/4のみ
139	27	25	SD01	第7下層	骨付土器	骨頭物	—	(10.5)	3.3	伊勢1/4強度1/6
140	27	25	SD01	第7下層	骨付土器	?	—	(4.1)	5.9	底付1/2
141	27	P01		骨付土器	?	—	(1.2)	—	—	口縁むずか
142	27	25~26	SK25	骨付土器	?	—	(4.6)	1.5	—	—
143	28		SD04-P06	上部	土器	圓	23.6	(3.2)	—	直腹
144	28		SD04-P06	上部	土器	圓	11.0	(1.85)	6.5	口縁1/9
145	28		P06	上部	土器	圓	11.0	(2.45)	6.5	口縁1/6
146	28		P06	上部	土器	圓	11.0	(3.9)	—	口縁1/4
147	28		P06	上部	土器	圓	15.3	1.26	13.0	口縁1/2強
148	28		P04	土器	圓	7.0	1.1	5.5	口縁1/4 底部1/2弱	
149	28		P05	土器	圓	13.3	2.1	6.8	口縁1/4	
150	28		P06	土器	圓	13.3	1.76	6.7	口縁1/4	
151	28		P06	土器	圓	12.4	(2.9)	—	口縁1/4	
152	28	26	P06	土器	圓	11.9	2.7	6.2	口縁2/3	
153	28	26	P06	土器	圓	11.9	2.8	7.4	口縁3/4	
154	28	26	P06	土器	圓	11.8	(2.1)	7.9	口縁1/4強	
155	28	26	P06	土器	圓	11.2	(2.1)	7.4	口縁1/2弱	
156	28		P06	土器	圓	10.0	2.1	6.9	口縁1/6	
157	28	26	P06	土器	圓	8.45	1.5	5.7	口縁1/2 完存	
158	28	26	P06	土器	圓	8.4	1.45	4.8	口縁3/4	
159	28	P06	土器	圓	8.3	1.0	5.8	口縁1/5		
160	28	25	P06	土器	圓	8.3	1.3	5.8	口縁1/4	

報告 番号	測定 番号	算定 基準	出土遺構	出土部位	種別	器種	法量 (cm)			備考
							口径	標高	底径	
151	28	26	P06		土師器	壺	7.8	1.45	4.4	口径14 底径14
152	28	26	P06		土師器	壺	7.8	1.3	4.3	口径12 底径12
153	28		P07		土師器	壺	13.1	3.3	7.8	口径16 底径16
154	28		P08		土師器	壺	7.8	1.55	5.7	口径15 底径15
155	28		P09		土師器	壺	7.75	1.35	5.45	口径14 欠損 底径14
156	28		P10		土師器	壺	7.8	(1.95)	—	口径14.5 底径14.5
157	28		P11		土師器	壺	10.0	(2.3)	—	口径15.5 底径15.5
158	28		P12		土師器	壺	7.3	1.2	4.9	口径13 底径13
159	28		P12		土師器	壺	7.2	1.4	4.1	口径13 底径13
171	28		P13		白陶器	壺	—	(1.9)	5.65	底部のみは完形
172	28		P14		土師器	壺	30.8	(3.5)	—	口径むちに底存
173	28		P15		土師器	壺	11.5	2.7	7.2	口径15.5 底径15.5
174	28		P15		土師器	壺	7.25	1.85	4.5	口径14~底径14.5
175	28		P16		土師器	壺	7.6	1.0	6.1	口径14~底径13
176	28		P17		土師器	壺	8.8	1.5	3.1	口径16 底径16
177	28		P18		青磁	壺	15.85	(2.5)	—	口径16
178	28		P19		青磁	壺	10.9	3.8	6.0	口径14~底面わづか
179	28		SK18		土師器	壺	7.4	8.0	6.15	口径15.5 底径15.5
180	28		SK24		土師器	壺	8.6	2.3	4.8	口径17
181	28	27	SK21		土師器	壺	12.0	3.85	8.0	口径14
182	28		SK21		土師器	壺	11.8	(2.35)	—	口径16
183	28		SK21		土師器	壺	—	(2.9)	9.5	底部欠損
184	28		SK21		土師器	壺	—	(1.1)	—	口径むちに底存
185	28	27	SK30		土師器	壺	11.2	2.3	6.9	口径14
186	29		SK27		灰陶器	壺	23.7	(5.2)	—	口径むちに底存
187	29	27	SK27		土師器	壺	3.9	1.45	5.7	口径ほぼ完全
188	29		SK27		土師器	壺	8.4	1.65	4.15	口径16
189	29	27	SK27		土師器	壺	7.7	1.5	5.9	口径13
190	29		SK27		土師器	壺	—	(2.35)	—	口径むちに底存
191	29	27	SK29		灰陶器	壺	32.5	(0.3)	—	口径12
192	29		SK29		土師器	壺	11.0	(2.9)	—	口径13
193	29		SK29		土師器	壺	7.65	1.2	5.9	口径14
194	29	27	SD08		土師器	壺	29.8	(11.9)	—	口径12
195	29	27	SD08		土師器	壺	26.1	(11.1)	—	口径10
196	29	27	SD08		土師器	壺	23.0	(6.8)	—	口径17
197	29	28	SD08		土師器	壺	23.0	(4.65)	—	口径15
198	29	28	SK01		土師器	壺	23.1	(6.2)	—	口径16
199	29		SK01		土師器	壺	11.2	(1.75)	—	口径むちに底存
200	29		SK01		土師器	壺	8.1	(1.45)	7.6	口径14
201	29		SK01		土師器	壺	7.5	1.35	4.2	口径15
202	29		SK01		土師器	壺	6.1	0.9	5.4	口径15
203	29		SK02		土師器	壺	13.7	2.6	8.15	口径15~底径10
204	29	28	SK02		土師器	壺	12.2	3.1	9.1	口径14
205	29	29	SK02		土師器	壺	11.0	2.25	6.8	口径15~底径14
207	29		SK02		土師器	壺	12.0	(3.2)	—	口径16
208	29		合金器		土師器	壺	10.85	2.2	—	口径むちに底存
209	29	28	合金器		土師器	壺	7.7	1.7	4.8	口径むちに底存17~底径13
210	29		合金器		土師器	壺	29.2	(3.3)	—	口径むちに底存
211	29	28	合金器		土師器	壺	28.9	(4.2)	—	口径むちに底存
212	29		合金器		炳付壺	壺	28.8	(3.5)	—	口径16
213	29	29	合金器		炳付壺	壺	10.1	(3.6)	—	口径14
214	30	29	合金器		炳付壺	壺	44.3	(6.45)	—	口径12.4
215	30	29	合金器		炳付壺	壺	41.75	(5.25)	—	口径12.2
216	30	29	合金器		炳付壺	壺	33.85	(8.8)	—	口径12.20
217	30		五金器		五金器	刀子	23.7	(5.5)	—	口径11.05
218	30		五金器		五金器	刀子	20.6	(3.7)	—	口径11.11
219	30	29	五金器		五金器	刀子	23.5	(7.3)	—	口径むちに底存15
220	30		五金器		刀子	刀	11.85	(1.55)	—	口径15

第2表 今宿遺跡出土石器一覧表

報告 番号	測定 番号	算定 基準	出土遺構	出土部位	種別	器種	法量 (cm)			備考
							口径	標高	底径	
S1	30	29	SK21		石製品	磨石	(13.33)	3.47	1.30	重さ76.4g

第3表 今宿遺跡出土金属器一覧表

報告 番号	測定 番号	算定 基準	出土遺構	出土部位	種別	器種	法量 (cm)			備考
							口径	標高	底径	
F1	18	16	SK10	第1層	金属器	刀子	6.59	1.8	2.72	
F2	18	16			金属器	打	3.8	0.6	0.5	
F3	18	16	SK10	第1層	金属器	打	7.49	1.49	0.7	
F4	30	29	合金器		金属器	打	6.6	1.2	2.75	
F5	30	29	SD07		金属器	打	5.6	2.16	0.8	
F6	30	29	柱穴		金属器	打	5.8	0.8	0.8	
F7	30	29	柱穴		金属器	不明	4.55	4.95	0.7	
F8	30	29	柱穴		金属器	不明	7.2	5.9	1.0	
C1	30	29	P26		鉄物	皇帝造實	2.45	2.48	3.11	
C2	30	29	SK01		鉄物	皇帝造實	2.50	2.48	3.12	

第3章 山吹遺跡の成果

第1節 平成10年度の調査

1 掘立柱建物跡

S B 0 1 (図版33・写真図版33)

検出状況 C・D区で検出した。SB01の柱穴P02とP03はSD01を切っている。C・D区の間には現代建物基礎による搅乱があり、この部分の柱穴の有無は不明である。

形態・規模 南北2間(3.2m)以上×東西2間(2.8m)以上である。主軸はN 8° Eを測る。柱掘形は直径30cm前後の円形もしくは長径50cm前後の椭円形を呈す。柱痕跡はP01で直径18cm、P03で直径20cmを測る。柱掘形の深さはP01が33cm、P02が26cm、P03が66cm、P04が20cm、P05が16cmとばらつきがある。

出土遺物

土器 柱穴P01から上師器の小片が出土したが、図化できなかった。

時期 不明である。

2 溝

S D 0 1 (図版32・写真図版31)

検出状況 A・C・D区で検出した。A区でSD02と交差しているが切り合は不明である。C区とD区でSB01の柱穴P03とP02に切られている。

形態・規模 直線の東西溝で、N 88° Wの方向を示している。延長12mを調査し、僅かに西から東に向かって傾斜している。幅0.6m、検出面からの深さ0.25m程度で、断面形は浅い逆台形である。

出土遺物

土器 (図版33・写真図版34) 須恵器壺Bと土師器の小片とサヌカイトの剥片が出土した。1はA区のSD02より西侧の上層からまとめて出土した須恵器壺Bで、口縁部から底部まで復原できた。球形の体部に直立する口頸部がつく。体部外面はタタキ後、カキメを施している。6は須恵器壺体部破片である。

時期 出土遺物から古代と考えられる。

S D 0 2 (図版32・写真図版30・32)

検出状況 A・B区で検出した。A区でSD01と交差しているが切り合は不明である。

形態・規模 直線の南北溝で、N 3° Wの方向を示している。延長22mを調査し、北から南に向かって傾斜している。幅1.2m、検出面からの深さ0.5m程度で、断面形は逆台形である。

出土遺物

土器 (図版33・写真図版31) 須恵器壺と土師器壺が出土し、須恵器壺を図化した。2～5は須恵器壺体部破片である。

時期 出土遺物から古代と考えられる。

3 小結

平成10年度の調査区は、山吹線の発掘調査の最北端である。正方位の東西溝SD01と正方位の南北溝SD02と掘立柱建物SB01を検出した。SB01周辺には柱穴が他にも存在しているが、現代建物基礎による擾乱や調査区外にも広がっているため建物の復原はできなかった。

南北溝SD02は平成13年度調査区のSD01に統いており、同一である。正方位の溝SD01とSD02は周辺地割と同方向であり、出土遺物は溝の埋没時期を示すものと考えられ、溝あるいは周辺の地割が古代に通るものとして重要である。

第2節 平成13年度の調査

1 掘立柱建物跡

SB01 (図版35・写真図版35)

検出状況 調査区北端に位置する。北側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模 南北1間 (2.0m) 以上×東西2間 (4.1m) 以上である。床面積は8.2m²以上で、主軸はN 4° Eを測る。柱樋方は直径19~29cmである。

出土遺物

土器 (第6図) 1は瓦質の羽釜で、口縁端を平坦に仕上げ、長めの鋸がやや下向きに付けられている。他に手づくね成形と思われる土師皿の細片が出土しているが、図化に耐えない。

時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。

2 溝

SD01 (図版34・35)

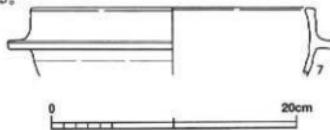
検出状況 調査区を南北に通る。

形態・規模 主軸はN 1° W、幅1.3m、検出面からの深さ29cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物

土器 須恵器の小片が出土している。

時期 詳細な時期は不明である。



3 小結

第6図 平成13年度調査区SB01柱穴出土土器

本調査区ではSD01の出土遺物が乏しく、時期を判断できなかった。平成10年度調査区のSD02と同一の構造とされることから古代と考えられるが、掘立柱建物跡の主軸方向も近く、中世まで階層され区画していた可能性も考えられる。なお、構造検出面からは14世紀前半とされる須恵器捏鉢の破片や14世紀代の龍泉窯青磁碗の小片も出土している。

第3節 平成16年度の調査

1 溝

S D 0 1 (図版38・写真図版37)

検出状況 調査区北端部にて検出した。削平が激しく一端を土疣状に検出するにとどまった。

形態・規模 幅64cm、検出面からの深さはわずかに9cmを測る。断面形はうすい皿状を呈する。

出土遺物

土器 須恵器の小片が出土しているが、炭化には耐えない。

時期 詳細な時期は不明である。

2 土坑

調査区南半部を中心に8基検出したが、出土遺物も稀で詳細は不明である。3基を個別報告する。

S K 0 1 (図版38・写真図版38)

検出状況 調査区南部に位置する。

形態・規模 平面形は台形に近い、南側に膨らみがちな不整円形を呈する。断面形は底面が平坦であるため逆台形に近い。長さ112cm、幅103cm、検出面からの深さ10cmを測る。底部付近に直径5~25cm程度の礫が含まれていた。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

S K 0 2 (図版38)

検出状況 調査区南部に位置する。西側半分は攪乱を受ける。

形態・規模 平面形は隅丸長方形状、断面形は皿状を呈する。長さ125cm、残存幅41cm、検出面からの深さ15cmを測る。

出土遺物 土師皿底部片、須恵器胴部片などの小片が出土しているが、炭化には耐えない。

時期 出土した土器より13世紀から14世紀にかけての可能性が考えられる。

S K 0 3 (図版38)

検出状況 調査区南部に位置する。東端に攪乱を受ける。

形態・規模 平面形は北端が尖る稍円形をなし、断面形は皿状をなす。長径131cm、短径102cm、検出面からの深さはわずかに6cmを測る。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

3 布掘り状土坑列

検出状況 調査区東側で5条、西側で8条以上を検出した。

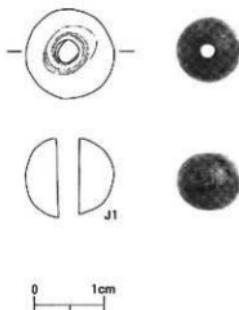
形態・規模 東側では幅30cm程度、西側では幅20cm程度の範囲に、連続的に長さ約30cm前後の小土坑が連なっている。東側では幅30cmの布掘り状の溝に、連続ないしは10cm程度の間隔を空けて断続的に小土坑を設けている。西側では削平が大きいために、本来東側のように小土坑が連続していたのが、上部が削平されて失われた結果、深いもののみが残存し間隔が空いたものと考えられる。検出面からの深さは東側で6~19cm、西側で10cm程度を測る。

出土遺物

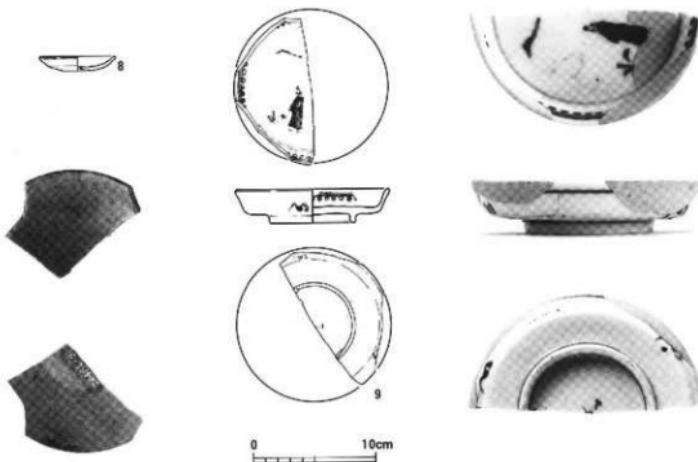
土器 須恵器や土師器の小片が出土したが、図化には耐えない。

玉類（第7図）赤褐色呈する石製の小玉で、直径1.3cm、高さ1.2cmを測る。穿孔部付近を平坦面状にやや平滑にしている。穿孔は鋭利な錐状の工具で図の上面側から一方向において行っている。最大径3.3mm、最小径3.0mmを測る。

時期 出土遺物からは判断しかねるが、下記の通り東側列を切る落ち込みから幕末期の遺物が出土しており、近世末期以前と考えられる。



第7図 平成16年度調査区
布掘り状土坑列出土玉類



第8図 平成16年度調査区落ち込み出土土器

4 その他の遺物

土器（第8図）北東隅の落ち込みから近世末期の遺物が出土している。2点を図化した。

1は灰釉の灯明皿で、外面口縁端付近まで施釉するが外面は露胎である。外面全体にケズリが施されるが、底部は糸切りである。外面口縁下には灯芯に伴って焼けた痕跡がとどまっている。2は東山焼の染付けの皿で、底部裏に「東山」の銘が見える。

5 小結

本調査区北端では、平成10年度・13年度調査区で検出した南北方向の溝の続きをかろうじて検出することができた。削平が激しく及ぶために、わずか長さ1.3mの範囲を検出するにとどまつた。そのため溝が本来、南側のどこまで及んでいたのかは不明である。

布堀り状土坑列は、この遺構を切る落ち込みから幕末頃の遺物が出土していることから、江戸時代後半以前に設けられたと見て大過なかろう。想像をたくましくすれば、姫路藩で奨励された商品作物である綿花栽培に伴い、鐵で構を設け播種された可能性も考えうるが、埋土の自然科学的分析を行っていないため想像の域は出ない。

第4表 山吹遺跡出土土器一覧表

報告書番号	区分	序数	出土層位	出土層名	種別	器種	測量(cm)			現存
							口径	器高	底径	
1	34	34	SD01		須恵器	盤	(15.6)	径25.9	丸底	口縁1/4
2	34	34	SD02		須恵器	盤	4.8	径6.3	厚3.6	伴都磨片
3	34	34	SD02		須恵器	盤	6.6	径7.7	厚3.9	伴都磨片
4	34	34	SD02		須恵器	盤	4.65	径4.1	厚3.6	伴都磨片
5	34	34	SD02		須恵器	盤	3.9	径4.8	厚3.6	伴都磨片
6	34	34	SD01		須恵器	盤	5.0	径6.0	厚3.9	伴都磨片
7	第5回	SB01	柱穴埋土中	柱穴土巣	羽竿	(22.0)	(5.6)	—	口縁1/7割	
8	第9回	落ち込み		灰陶器	灯明皿	(6.1)	1.15	2.5	口縁1/6底部1/3	
9	第9回	落ち込み		急付	盤	(12.4)	2.76	5.9	口縁1/6底部1/2	

第5表 山吹遺跡出土玉類一覧表

報告書番号	区分	序数	出土層位	出土層名	種別	器種	測量(cm)			現存
							口径	器高	底径	
J1	第7回	布面状土坑列		石製品	玉類	長1.3	幅1.3	厚1.2	完形	

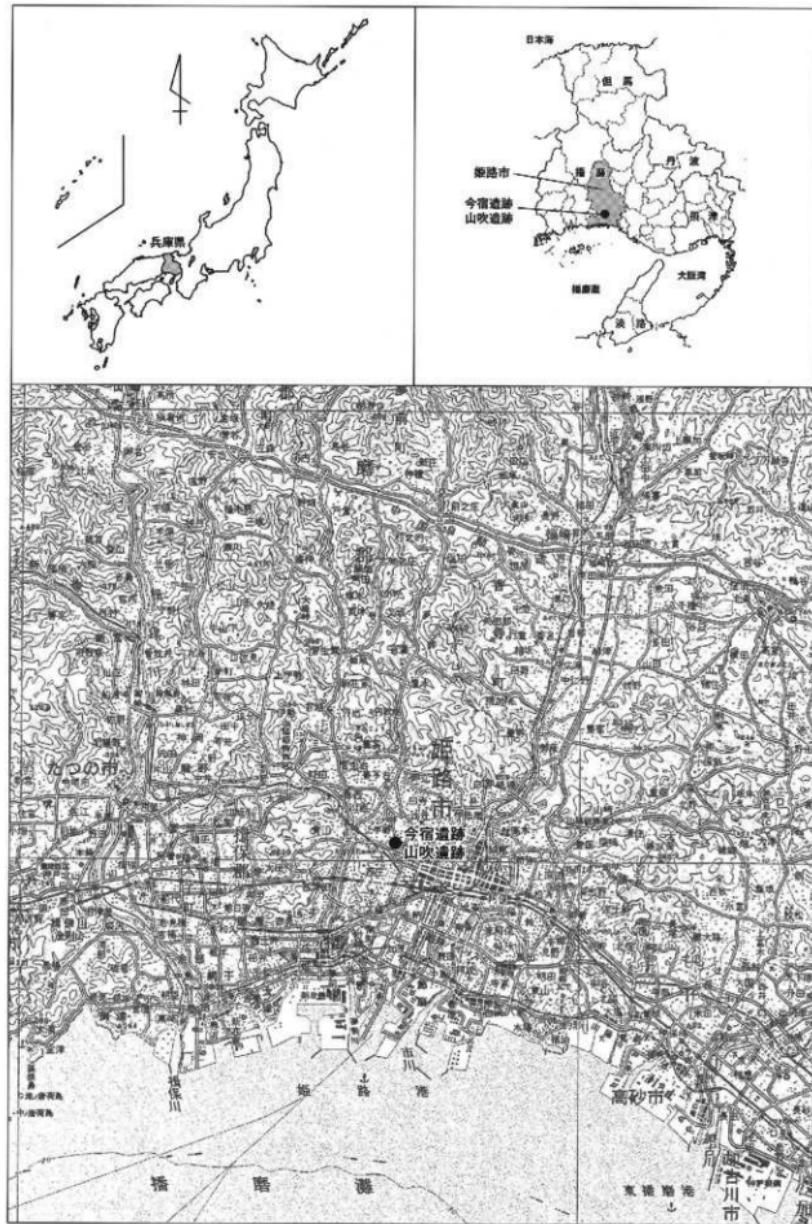
第6表 今宿遺跡及び山吹遺跡と周辺の遺跡（図版2と対応）

図版2	遺跡番号	道路の名称	道路の所在地	時代	種類
1	G00129	引照寺前	福岡市東区引照寺前	古墳	寺院
2	G00130	天神山古戻跡	福岡市東区天神山古戻跡	古墳	古墳
3	G00033	天神山古戻跡	福岡市東区天神山古戻跡	古墳	古墳
4	G00131	天神山古戻跡	福岡市東区天神山古戻跡	古墳	古墳
5	G00133	天神山古戻跡	福岡市東区天神山古戻跡	古墳	古墳
6	G00024 - G00032	天神山古戻跡	福岡市東区天神山古戻跡	古墳	古墳
7	G00134 - G00014	安足城跡・武芋橋江鹿跡	福岡市東区安足城跡	古墳～奈良	城郭・集落・遺跡
8	G00135	町田池跡	福岡市東区町田池跡	魏文～肥生	城址
9	G00141	西尾山古戻跡	福岡市東区西尾山古戻跡	古墳	古墳
10	G00137 - G00140	曾見山古戻跡	福岡市東区曾見山古戻跡	古墳	古墳
11	G00143	曾見山古戻跡	福岡市東区曾見山古戻跡	平安～中世	城郭
12	G00144	曾見山古戻跡	福岡市東区曾見山古戻跡	古墳	城址
13	G00142	曾見山古戻跡	福岡市東区曾見山古戻跡	古墳	城址
14	G00148	御野川古戻跡	福岡市東区御野川古戻跡	古墳	古墳
15	G00145 - G00147	龜山古戻跡	福岡市東区龜山古戻跡	古墳	古墳
16	G00146	川原井谷跡	福岡市東区川原井谷跡	古墳	古墳
17	G00115	曾見山古戻跡	福岡市東区曾見山古戻跡	古墳	古墳
18	G00104 - G00211	御野川古戻跡	福岡市東区御野川古戻跡	古墳	古墳
19	G00203	山吹遺跡	福岡市東区山吹遺跡	古墳	古墳
20	G00019 - G00020	大谷口遺跡	福岡市東区大谷口遺跡	古墳	古墳
21	G00002	幾尾遺跡	福岡市東区幾尾遺跡	古墳	古墳
22	G00195	山阴古戻跡	福岡市東区山陰古戻跡	古墳	古墳
23	G00047	前山遺跡	福岡市東区前山遺跡	古墳	古墳
24	G00201	大池古戻跡	福岡市東区大池古戻跡	古墳	古墳
25	G00200	河野遺跡	福岡市東区河野遺跡	古墳	古墳
26	G00199	曾留山古戻跡	福岡市東区曾留山古戻跡	古墳	古墳
27	G00198	下隈遺跡	福岡市東区下隈遺跡	古墳	古墳
28	G00197	岸の下隈遺跡	福岡市東区岸の下隈遺跡	古墳	古墳
29	G00196	大谷口遺跡	福岡市東区大谷口遺跡	古墳	古墳
30	G00059 - G00065	上山吹遺跡	福岡市東区上山吹遺跡	古墳	古墳
31	G00062	山吹遺跡	福岡市東区山吹遺跡	古墳	古墳
32	G00063	立井寺跡	福岡市東区立井寺跡	古墳～宇摩	寺院
33	G00050	伏父山古戻跡	福岡市東区伏父山古戻跡	古墳	古墳
34	G00151	伏父山古戻跡	福岡市東区伏父山古戻跡	古墳	古墳
35	G00152 - G00155	御野川古戻跡	福岡市東区御野川古戻跡	古墳	古墳
36	G00146 - G00169	牟六代古戻跡	福岡市東区牟六代古戻跡	古墳	古墳
37	G00180	山吹遺跡	福岡市東区山吹遺跡	古墳	古墳
38	G00161	今宿遺跡	福岡市東区今宿遺跡	古墳	古墳
39	G00165	今宿遺跡	福岡市東区今宿遺跡	古墳	古墳
40	G00164	名古山古戻跡	福岡市東区名古山古戻跡	古墳	古墳
41	G00252	近崎古戻跡	福岡市東区近崎古戻跡	古墳	古墳
42	G00277	御田遺跡	福岡市東区御田遺跡	古墳	古墳
43	G00078 - G00308	山所遺跡	福岡市東区山所遺跡	古墳	古墳
44	G00096	山所遺跡	福岡市東区山所遺跡	古墳	古墳
45	G00287	山所遺跡	福岡市東区山所遺跡	古墳	古墳
46	G00288	山所古戻跡	福岡市東区山所古戻跡	古墳	古墳
47	G00289	山所古戻跡	福岡市東区山所古戻跡	古墳	古墳
48	G00290 - G00391	御野川古戻跡	福岡市東区御野川古戻跡	古墳	古墳
49	G00457	上山遺跡	福岡市東区上山遺跡	古墳	古墳
50	G00461	御田遺跡	福岡市東区御田遺跡	古墳	古墳
51	G00446	八反古戻跡	福岡市東区八反古戻跡	古墳	古墳
52	G00446	斐田遺跡	福岡市東区斐田遺跡	古墳	古墳
53	G00453	千代子古戻跡	福岡市東区千代子古戻跡	魏文～肥生	古墳
54	G00456	高畠古戻跡	福岡市東区高畠古戻跡	古墳	古墳
55	G00455	糸田遺跡	福岡市東区糸田遺跡	古墳	古墳
56	G00454	村香港跡	福岡市東区村香港跡	古墳	古墳
57	G00441	福祐遺跡	福岡市東区福祐遺跡	魏文～古墳	古墳
58	G00440	風友遺跡	福岡市東区風友遺跡	古墳～古墳	古墳
59	G00439	小山遺跡	福岡市東区小山遺跡	古墳～古墳	古墳
60	G00444	西尾木古戻跡	福岡市東区西尾木古戻跡	古墳	古墳
61	G00412 - G00873 - G00883	平納山古戻跡	福岡市東区平納山古戻跡	古墳	古墳
62	G00443	平納山古戻跡	福岡市東区平納山古戻跡	古墳	古墳
63	G00972	平納山古戻跡	福岡市東区平納山古戻跡	古墳～古墳	古墳
64	G00954	平納山古戻跡	福岡市東区平納山古戻跡	古墳	古墳
65	G00988	平納山古戻跡	福岡市東区平納山古戻跡	古墳	古墳
66	G00130	牛久保古戻跡	福岡市東区牛久保古戻跡	古墳	古墳
67	G00436	浜田遺跡	福岡市東区浜田遺跡	古墳	古墳
68	G00435	竹の井遺跡	福岡市東区竹の井遺跡	古墳	古墳
69	G00437	吉原遺跡	福岡市東区吉原遺跡	古墳～古墳	古墳
70	G00432	飯杵・船岡(川東区)遺跡群・第8地点	福岡市東区飯杵・船岡(川東区)遺跡群・第8地点	古墳	古墳
71	G00411	長財遺跡	福岡市東区長財遺跡	古墳	古墳
72	G00415	軋束遺跡	福岡市東区軋束遺跡	古墳	古墳
73	G00413	更久屋遺跡	福岡市東区更久屋遺跡	古墳	古墳
74	G00416	西久保遺跡	福岡市東区西久保遺跡	古墳	古墳
75	G00417	中町穴室遺跡	福岡市東区中町穴室遺跡	古墳～中世	集落
76	G00412	大町遺跡	福岡市東区大町遺跡	古墳	古墳
77	G00417	丁田遺跡	福岡市東区丁田遺跡	古墳～古墳	古墳
78	G00419	中ノ町遺跡	福岡市東区中ノ町遺跡	古墳	古墳
79	G00420	後原・大津川河原地内遺跡 第1地点	福岡市東区後原・大津川河原地内遺跡 第1地点	古墳	古墳
80	G00424	後原・大津川河原地内遺跡 第2地点	福岡市東区後原・大津川河原地内遺跡 第2地点	古墳	古墳
81	G00419	玉川遺跡	福岡市東区玉川遺跡	古墳	古墳
82	G00419	玉川遺跡	福岡市東区玉川遺跡	古墳	古墳
83	G00448	後原山古戻跡	福岡市東区後原山古戻跡	古墳	古墳
84	G00576	元賀利(川辺)遺跡第3地点	福岡市東区元賀利(川辺)遺跡第3地点	古墳～中世	古墳
85	G00560	四ヶ所遺跡	福岡市東区四ヶ所遺跡	古墳	古墳
86	G00575	米賀利(川辺)遺跡第4地点	福岡市東区米賀利(川辺)遺跡第4地点	古墳～中世	古墳
87	G00592 - G00396 - G00768 - G00769	竹山遺跡	福岡市東区竹山遺跡	古墳	古墳

図

版

図版1 兵庫県・姫路市・今宿遺跡及び山吹遺跡の位置

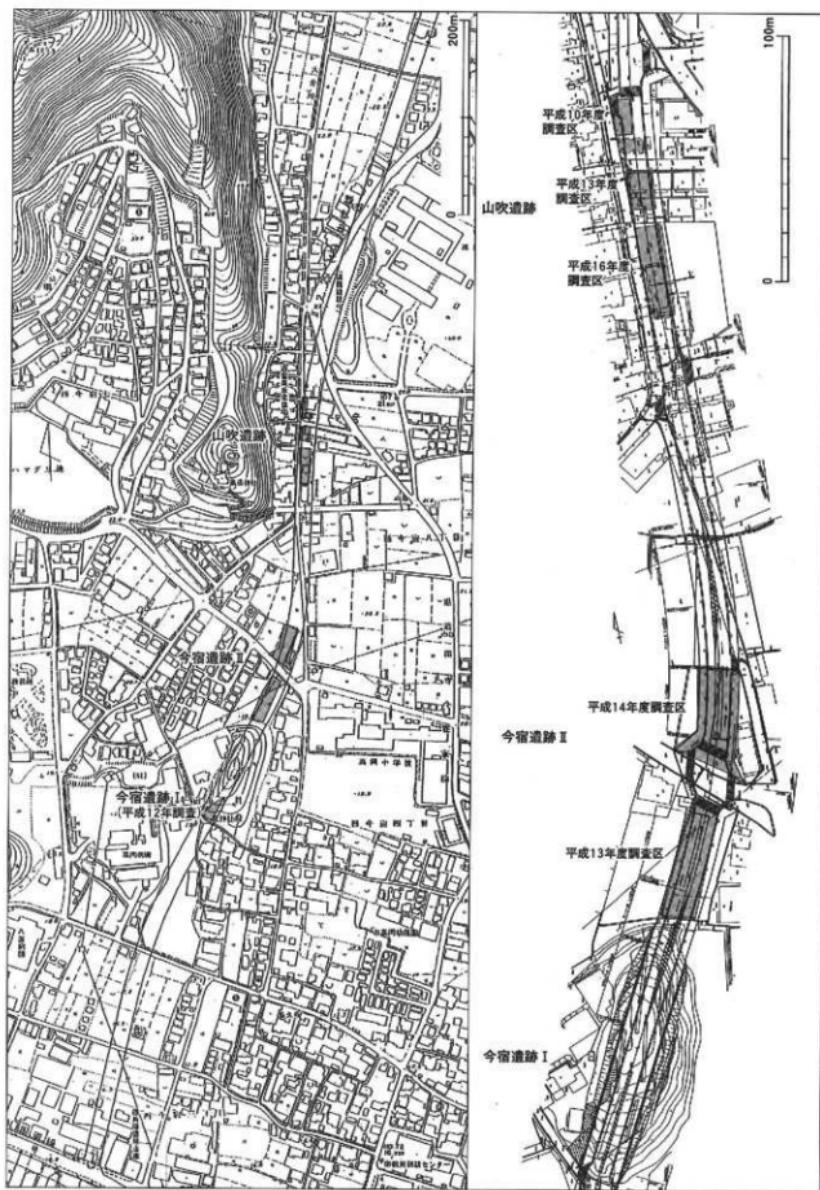


図版2 今宿遺跡及び山吹遺跡と周辺の遺跡

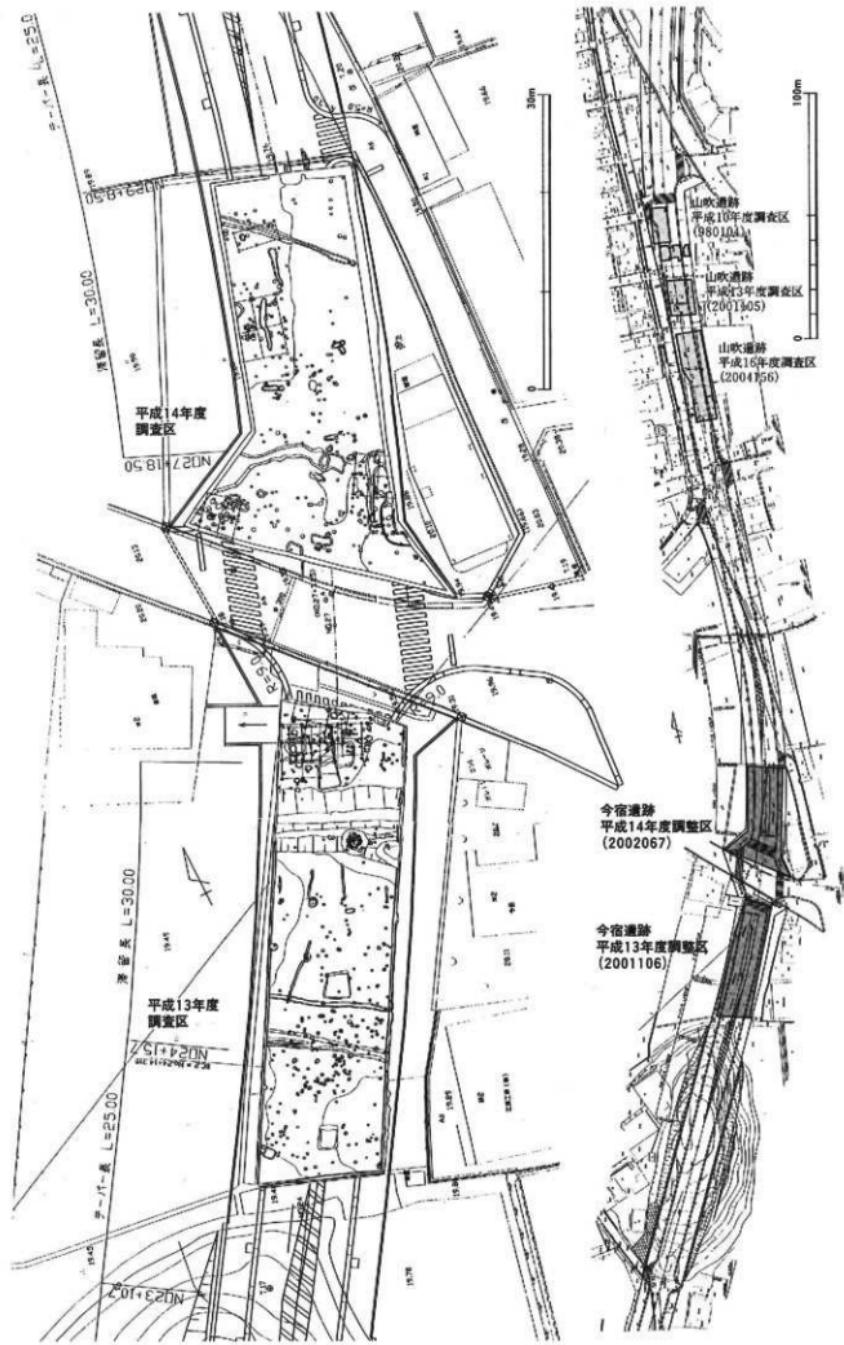


遺跡の番号・名称は第6表(P42)と対応している。

図版3 緊急街路整備事業山吹線と関係する調査区



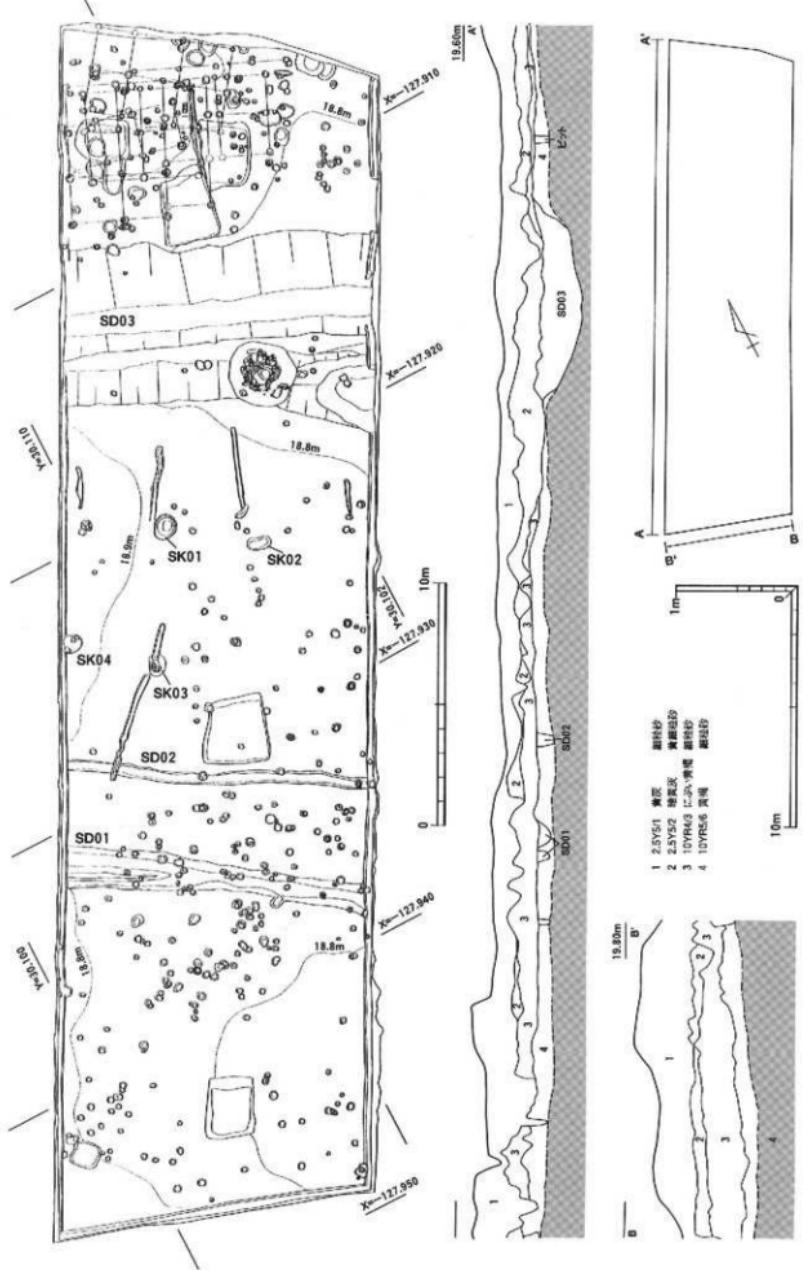
図版4 今宿遺跡の各年度調査区



図版5

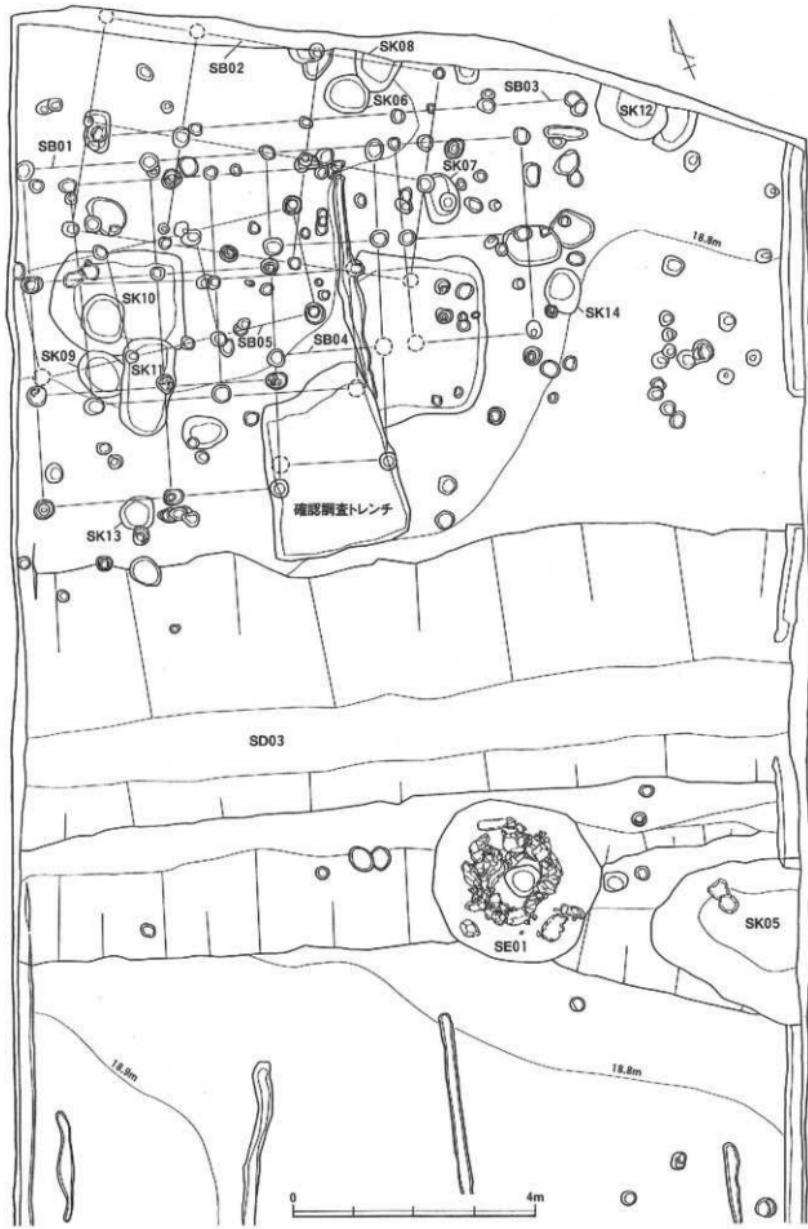
調査区平面図・土層断面図

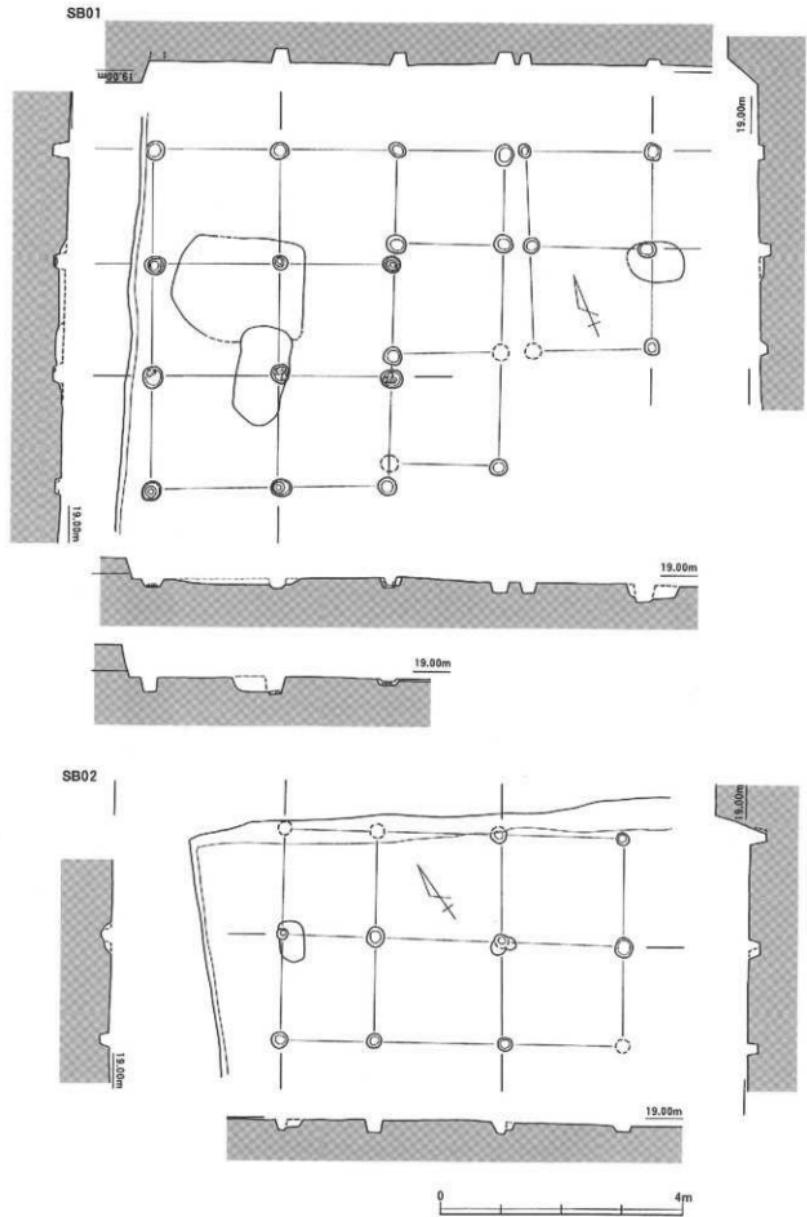
今宿選駆
平成13年度調査区



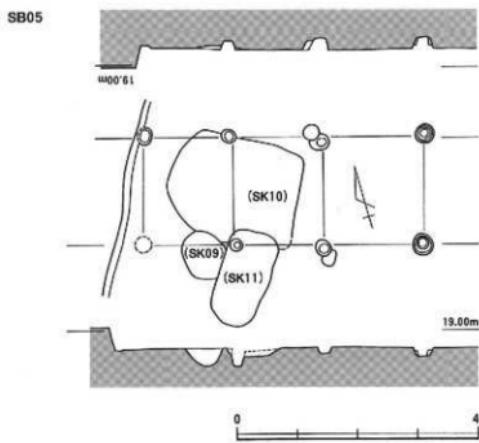
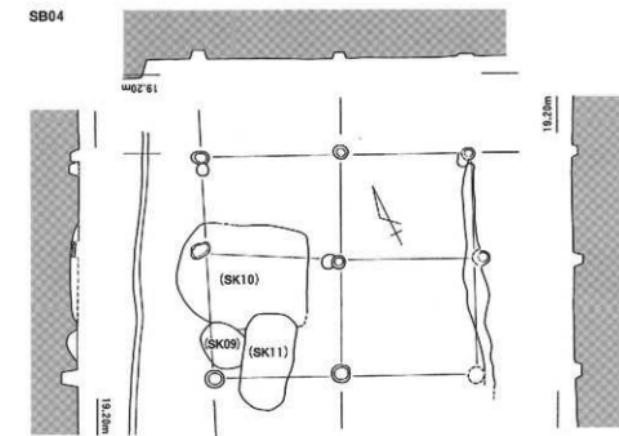
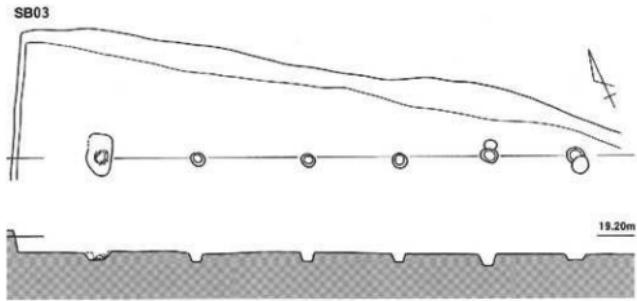
図版 6
調査区北部平面図

今宿道路
平成13年度調査区

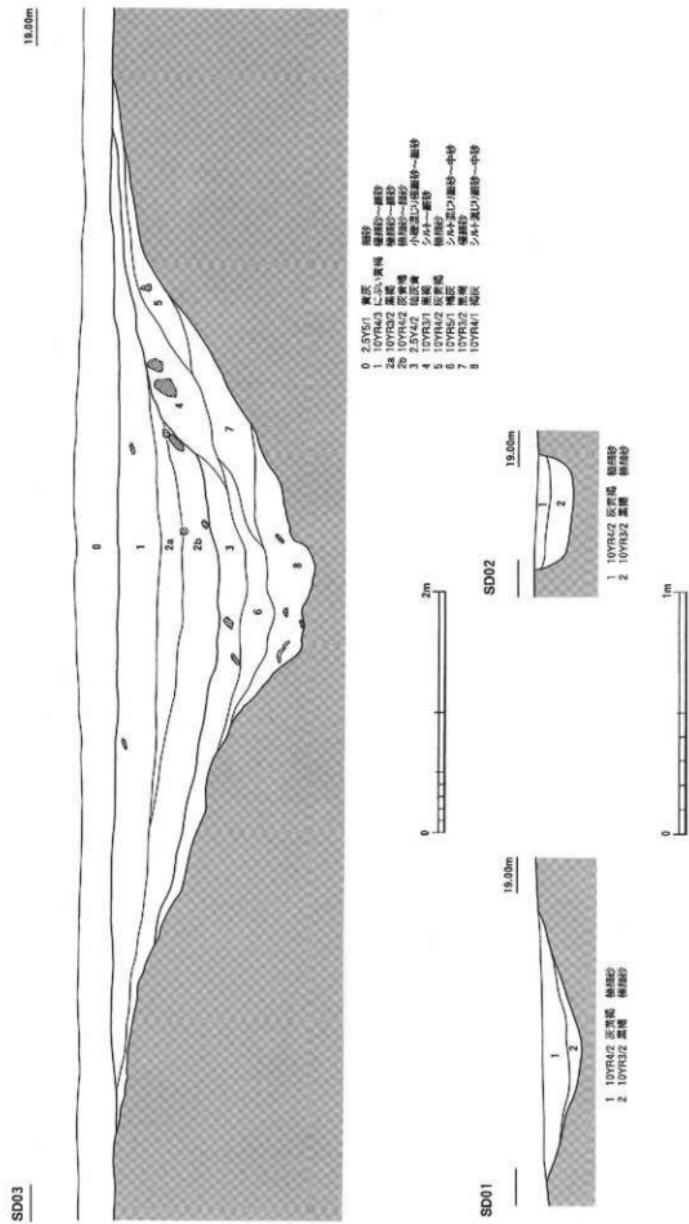


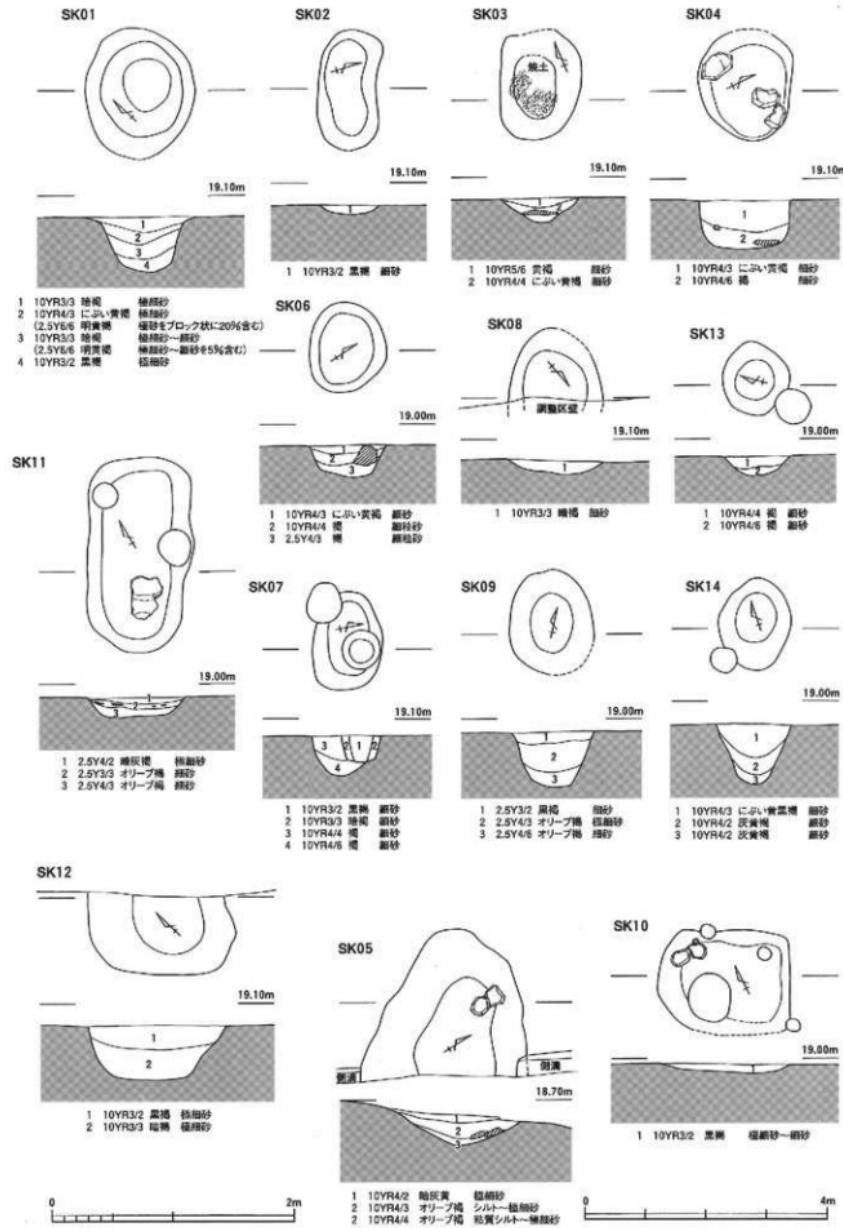


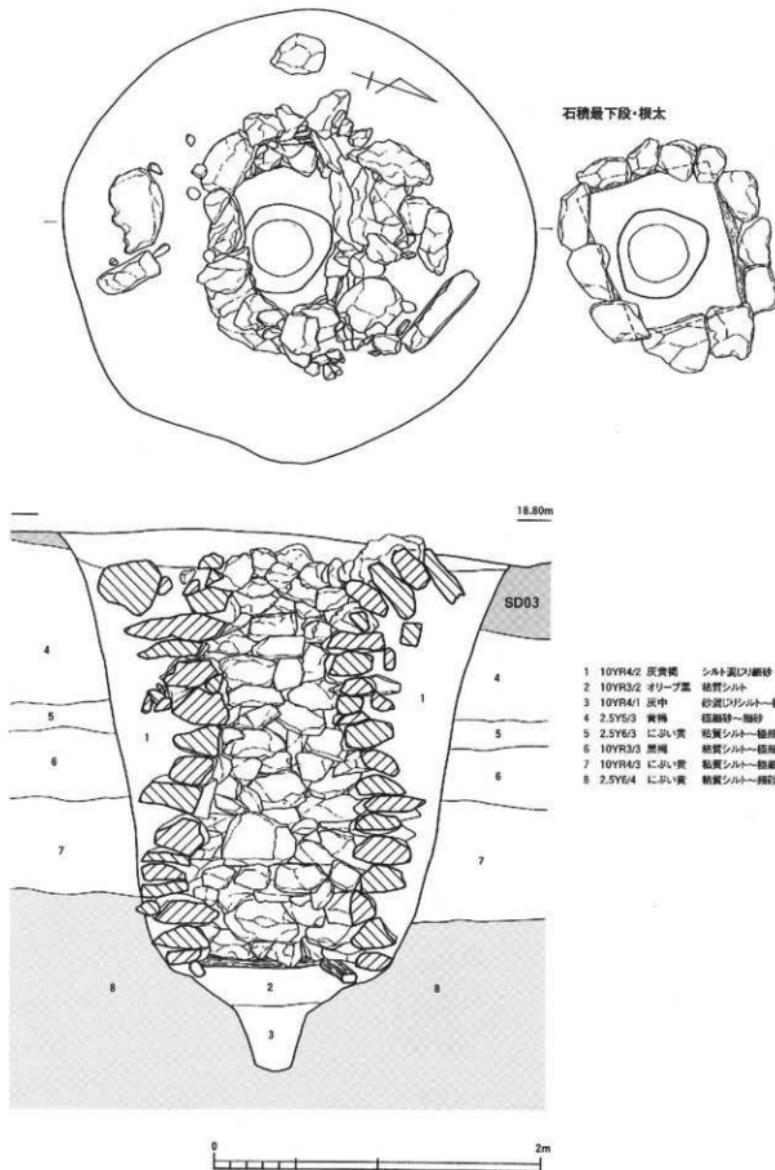
図版8
SB03
SB05



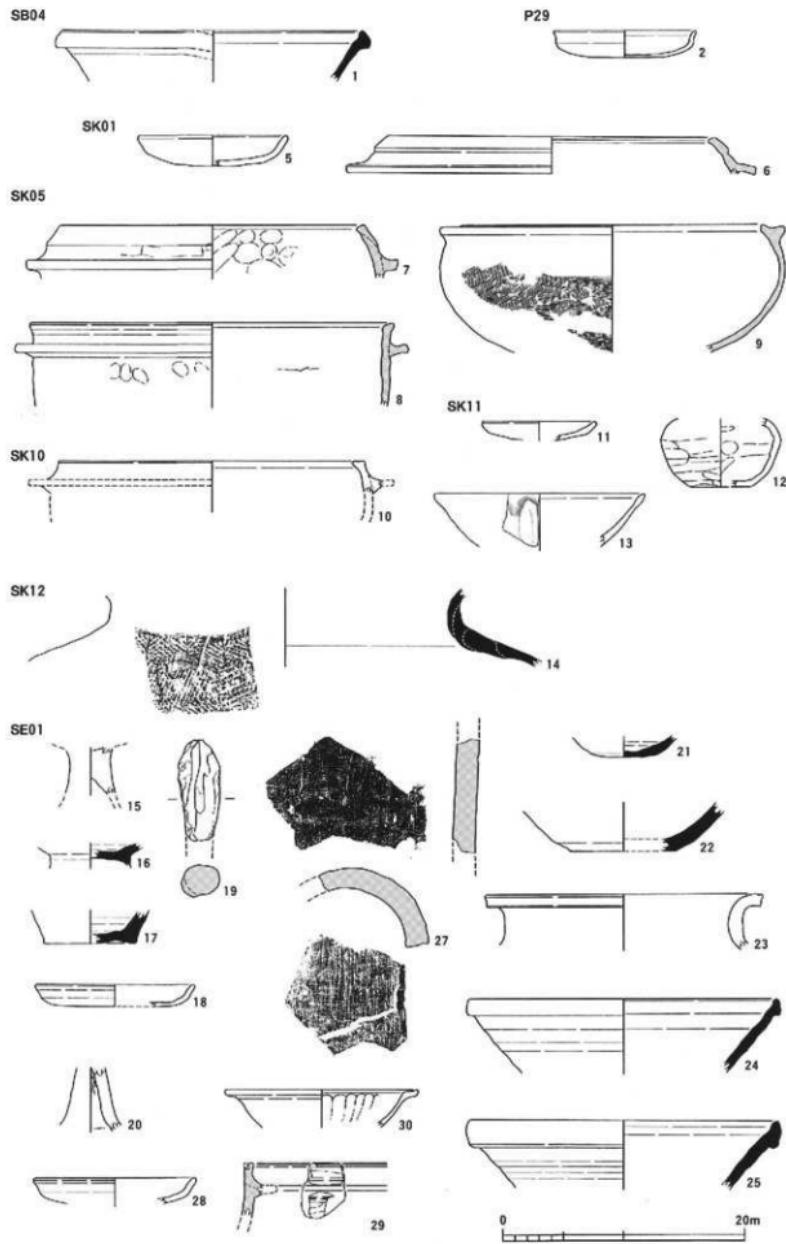
図版9 SD01～SD03土層断面図



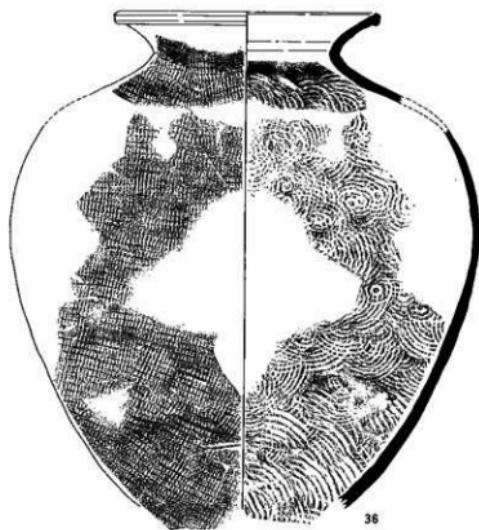




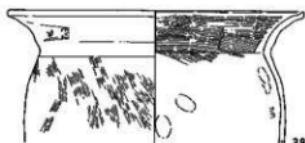
図版12
出土土器①（掘立柱建物跡・土坑・柱穴・井戸）



SD01



SD02



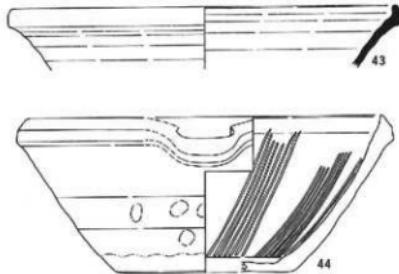
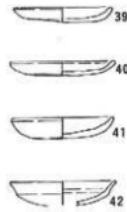
0 20cm

図版 14

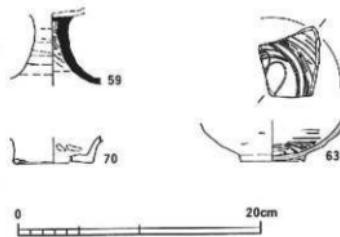
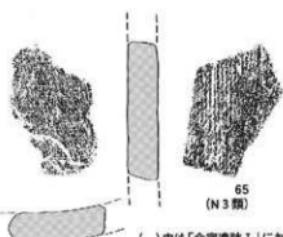
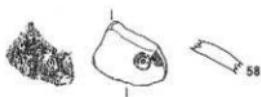
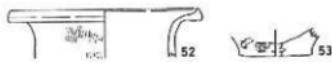
今宿道路
平成13年度調査区

出土土器③ (SD03第1層・第2層)

SD03 第1層



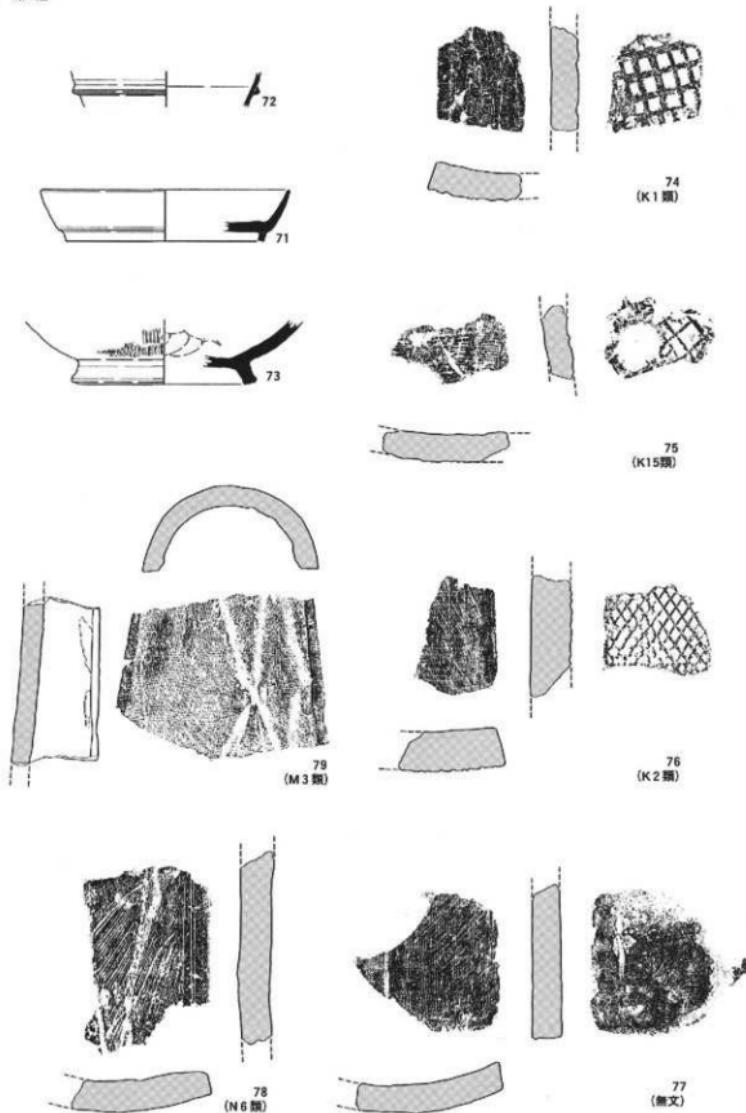
SD03 第2層



()内は「今宿遺跡I」における分類

0 20cm

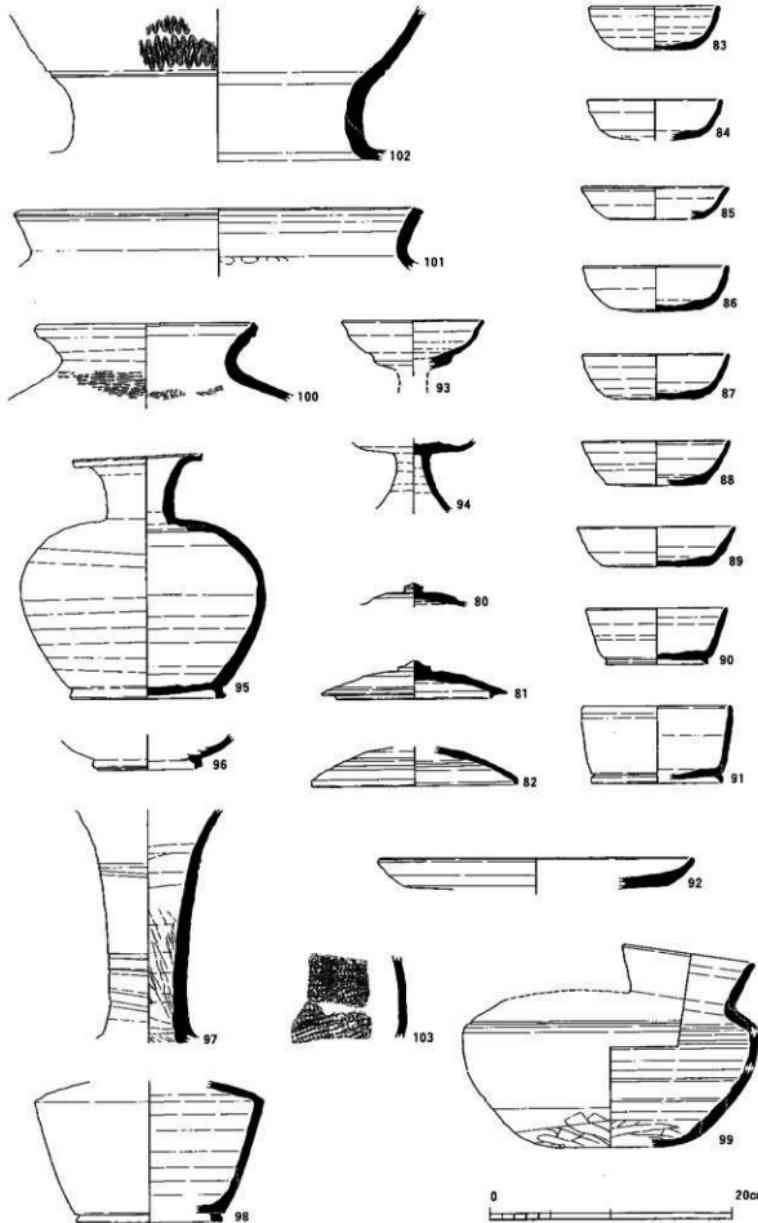
SD03 第3層



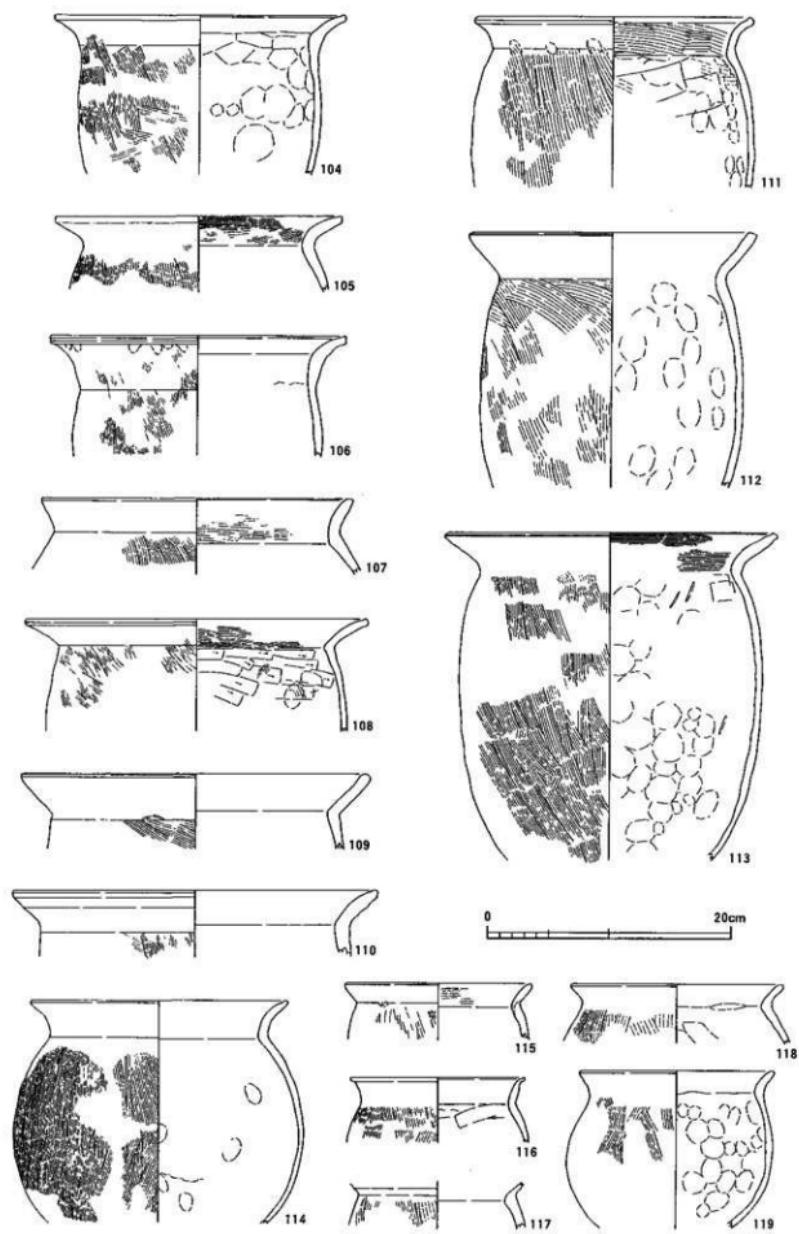
()内は「今宿遺跡Ⅰ」における分類

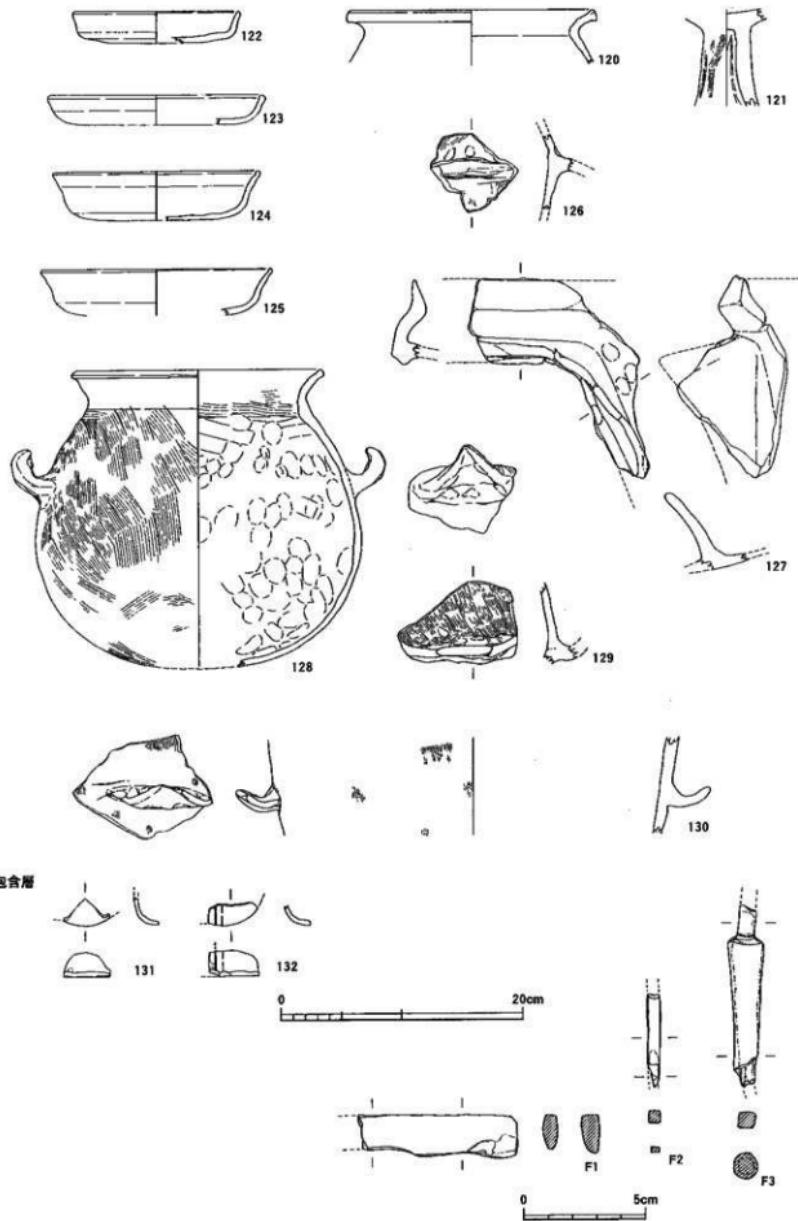


図版 16
出土土器⑤ (SD03第4層～第8層須恵器)



出土土器⑥ (SD03第4層～第8層土器①)

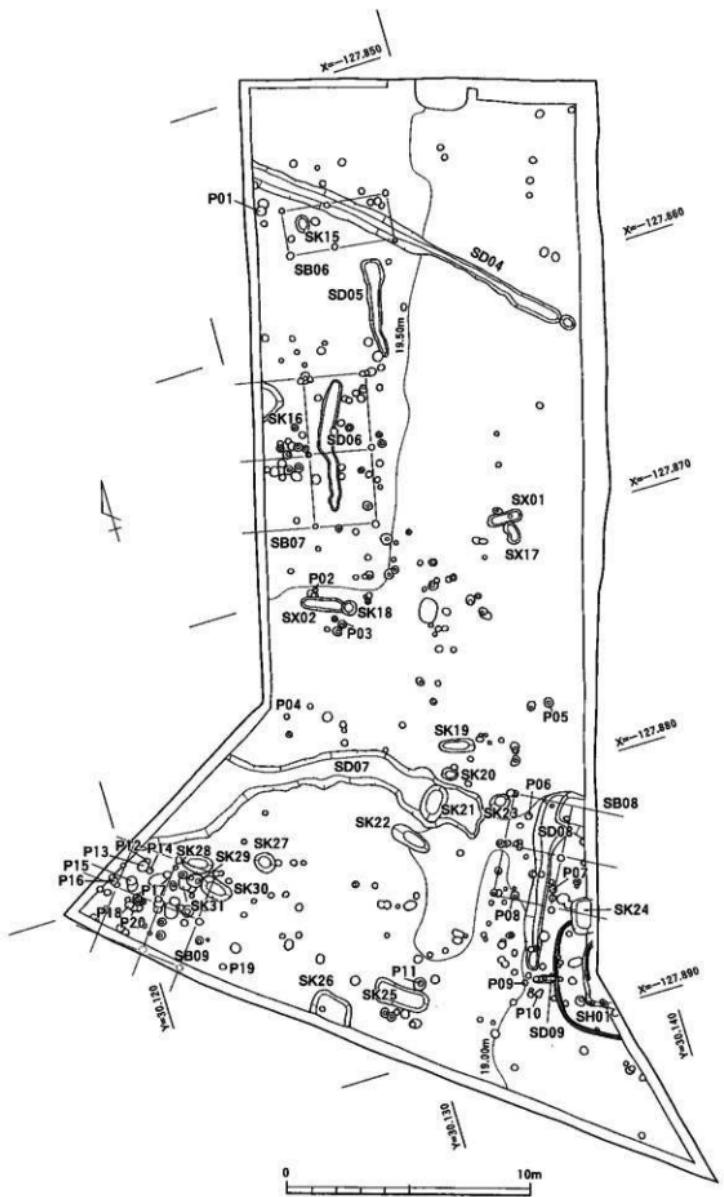
今宿遺跡
平成13年度調査区



図版 19

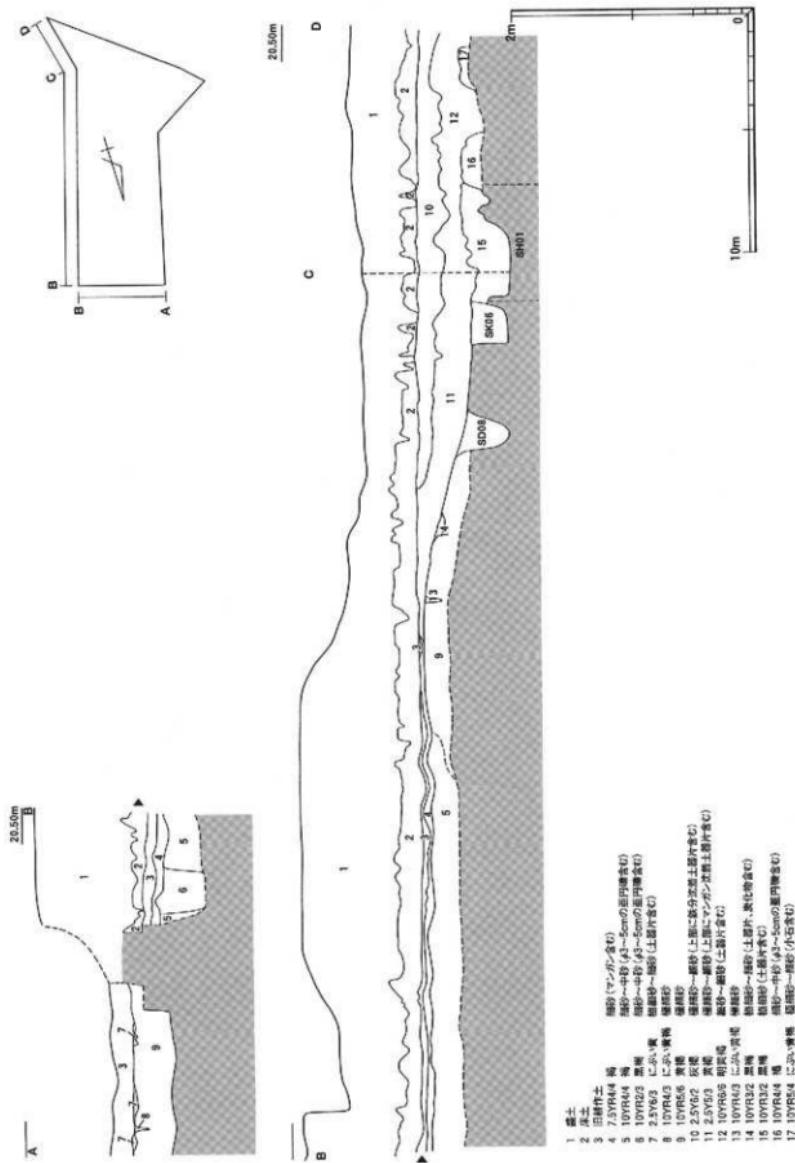
調査区平面図

平成 14 年度調査区



図版 20

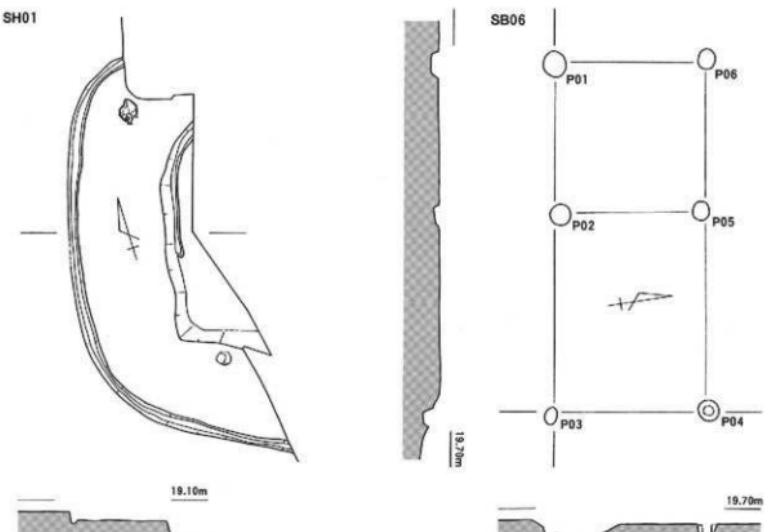
調査区土層断面図

今宿遺跡
平成14年度調査区

図版
21

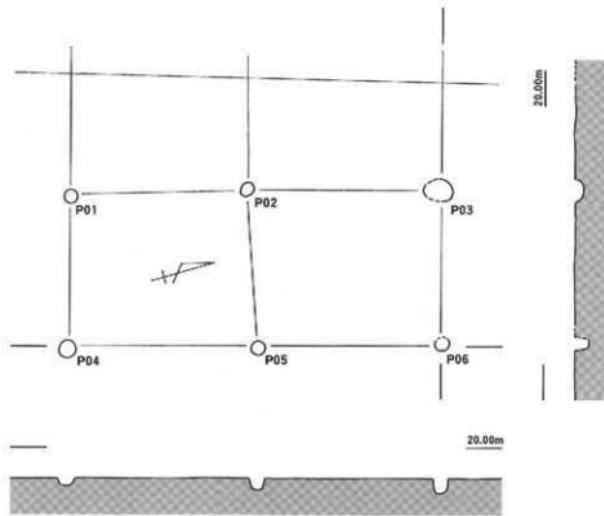
S H 01 · S B 06 · S B 07

今宿遺跡
平成14年度調査区



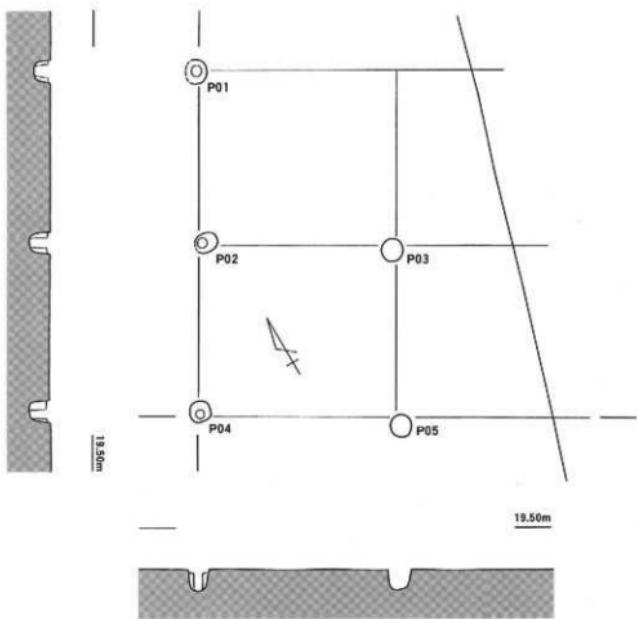
0 3m

SB07

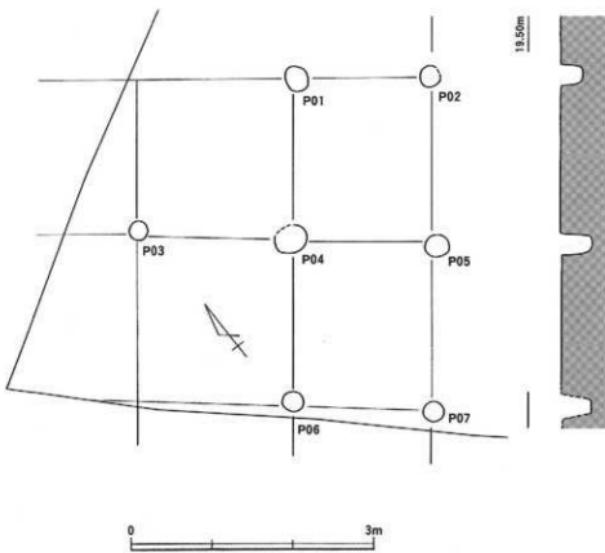


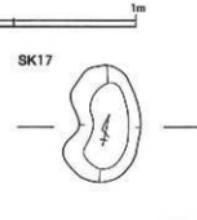
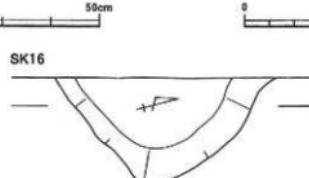
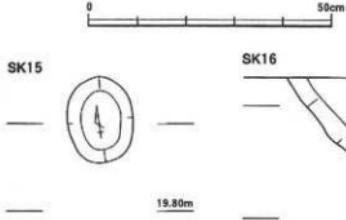
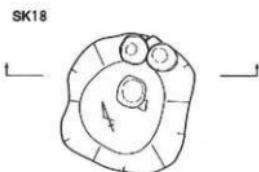
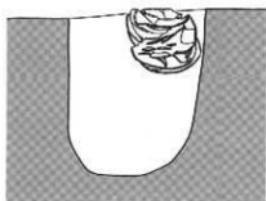
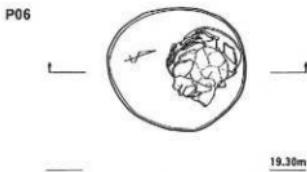
SB08

図版
22
SB08
・
SB09

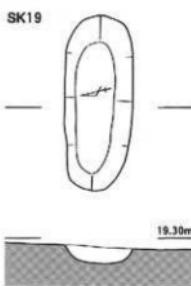


SB09

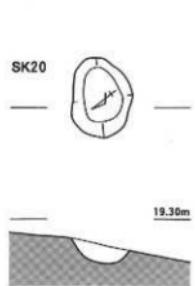




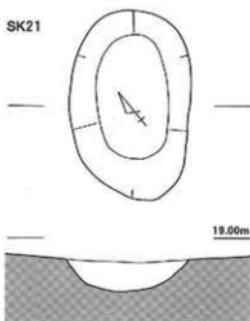
10YR4/2 灰黄色 塗抹跡



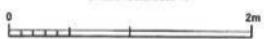
7.5YR4/3 棕褐色



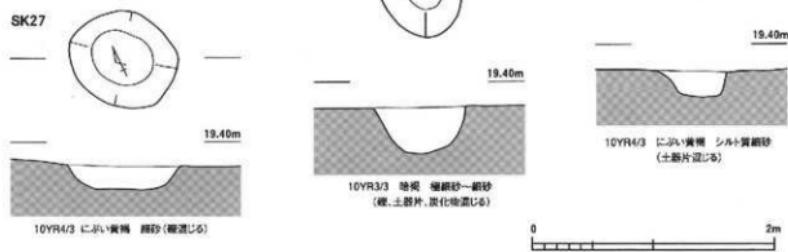
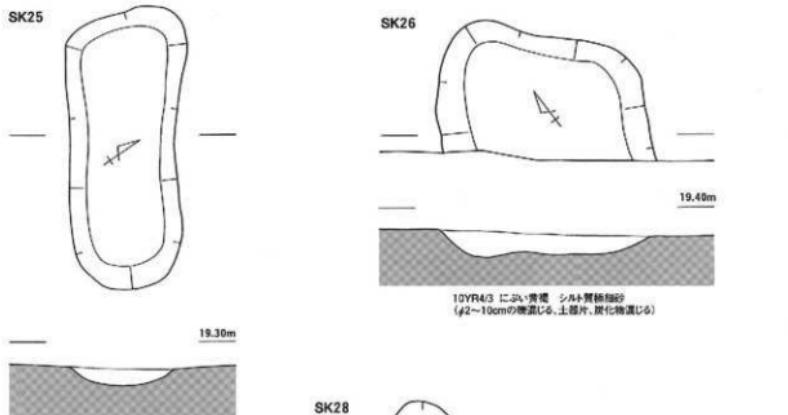
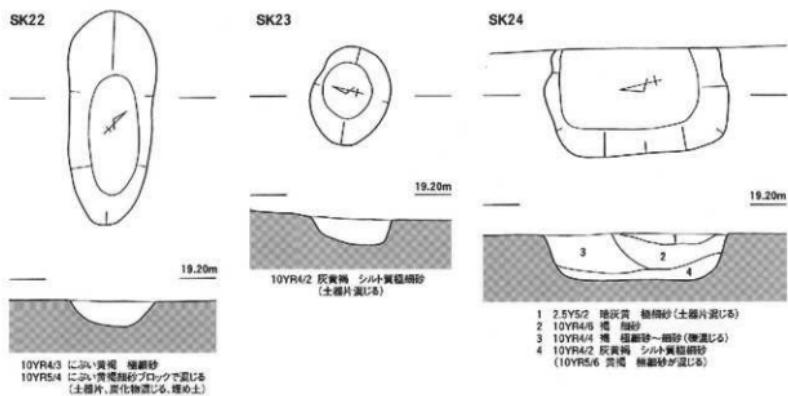
10YR4/2 灰黄色 シルト質泥砂
(土器片、炭化物混じる)



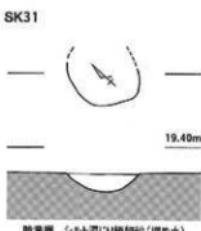
10YR4/3 にがい黄色 シルト質泥砂～中砂
(土器片、炭化物混じる)



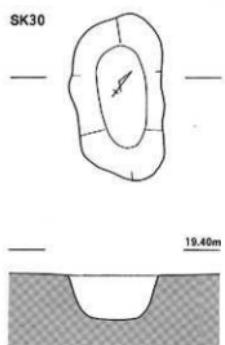
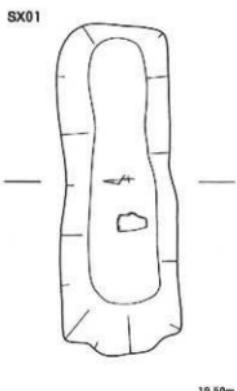
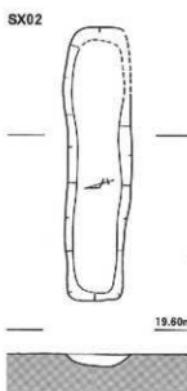
図版 24
SK22 SK29



図版 25 SK30・SK31・SX01・SX02



砂質層 シルト質細砂（埋め土）

10YR4/3 に近い黄褐色 シルト質細砂
10YR4/4 黄褐色ブロックで混じる
(土塊片、変化物混じる、埋め土)1 10YR4/3 に近い黄褐色 極細砂
2 10YR4/4 黄褐色 細粒砂（上部に灰暗じり）5YR4/2 黄褐色 シルト質細砂～中砂
(土塊片混じる)

SD04



黒褐色 シルト混じり堆積 植生砂
細粒シルト質粘土質
堆積。

SD05



黒褐色 シルト混じり堆積 植生砂

SD06



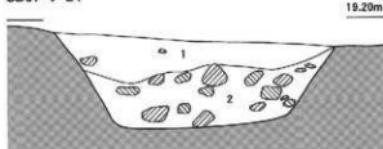
黒褐色 シルト混じり堆積 植生砂

SD09



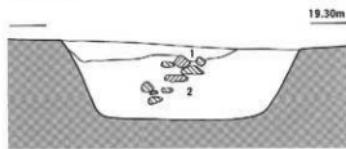
10YR5/4 に近い黄褐色 粗粒
(土礫片、炭化物混じる)

SD07 アゼ1



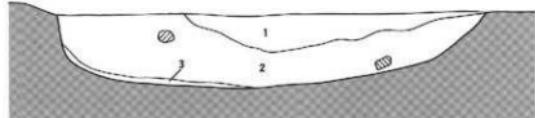
1 10YR5/4 に近い褐色 シルト質
2 7.5YR4/3 棚 内陸

SD07 アゼ2



1 10YR5/4 に近い褐色 シルト質
2 7.5YR4/3 棚 内陸(土礫片、炭化物混じる)

SD08



1 10YR4/6 棚
2 10YR4/6 に近い黄褐色
(10YR6/6 明黄褐色)
3 2.5YR6/4 に近い黄褐色
細砂

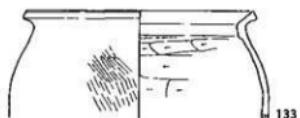


図版 27

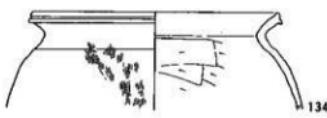
出土土器①
(竪穴住居跡・柱穴・土坑)

今宿遺跡
平成14年度調査区

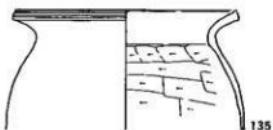
SH01



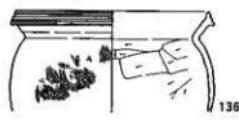
133



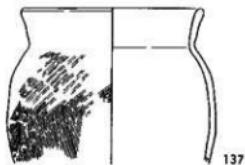
134



135



136



137



139



138



140

P01



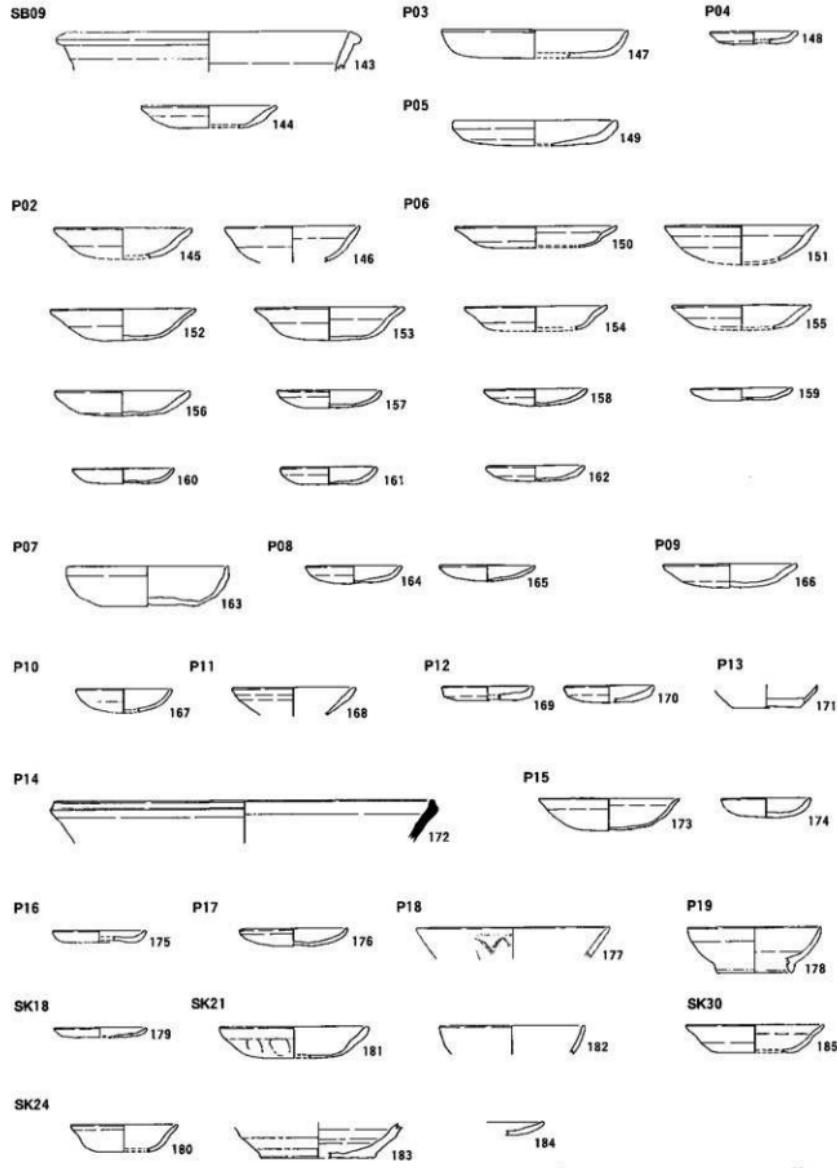
141

SK26



142



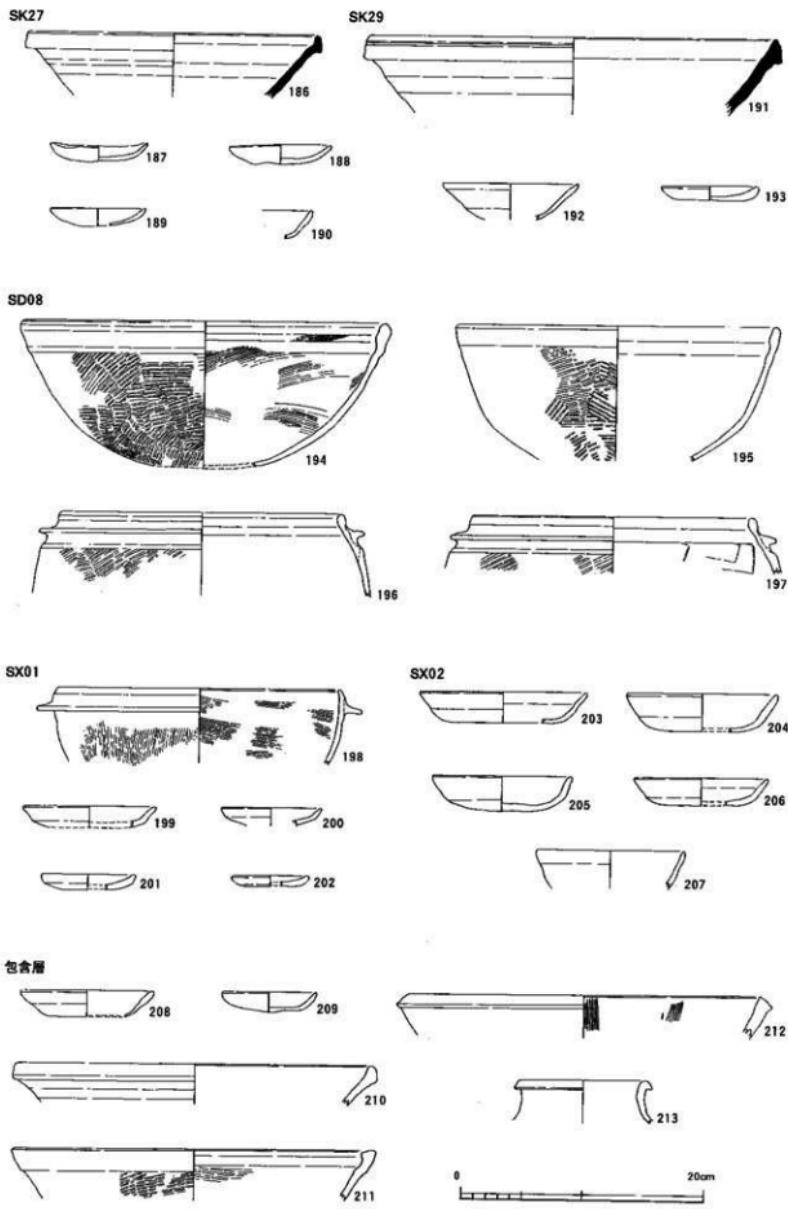
図版
28出土土器②
(掘立柱建物跡・柱穴・土坑)

0 20cm

図版 29

出土土器③(土坑・溝・土壤墓・包含層)

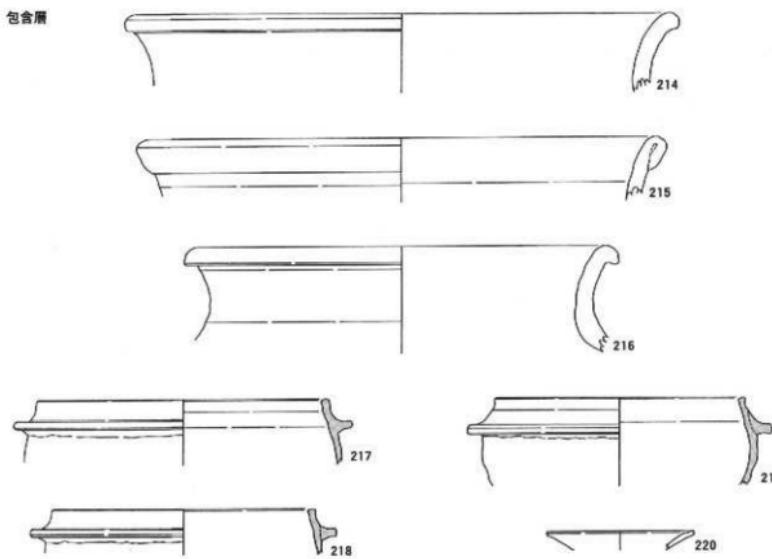
今宿遺跡
平成14年度調査区



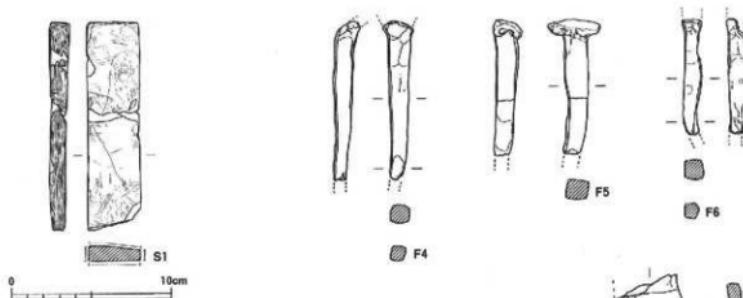
図版30

出土土器(④) (包含層)

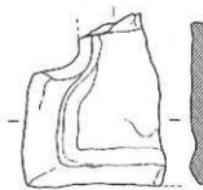
・出土石器・出土金属器



0 20cm

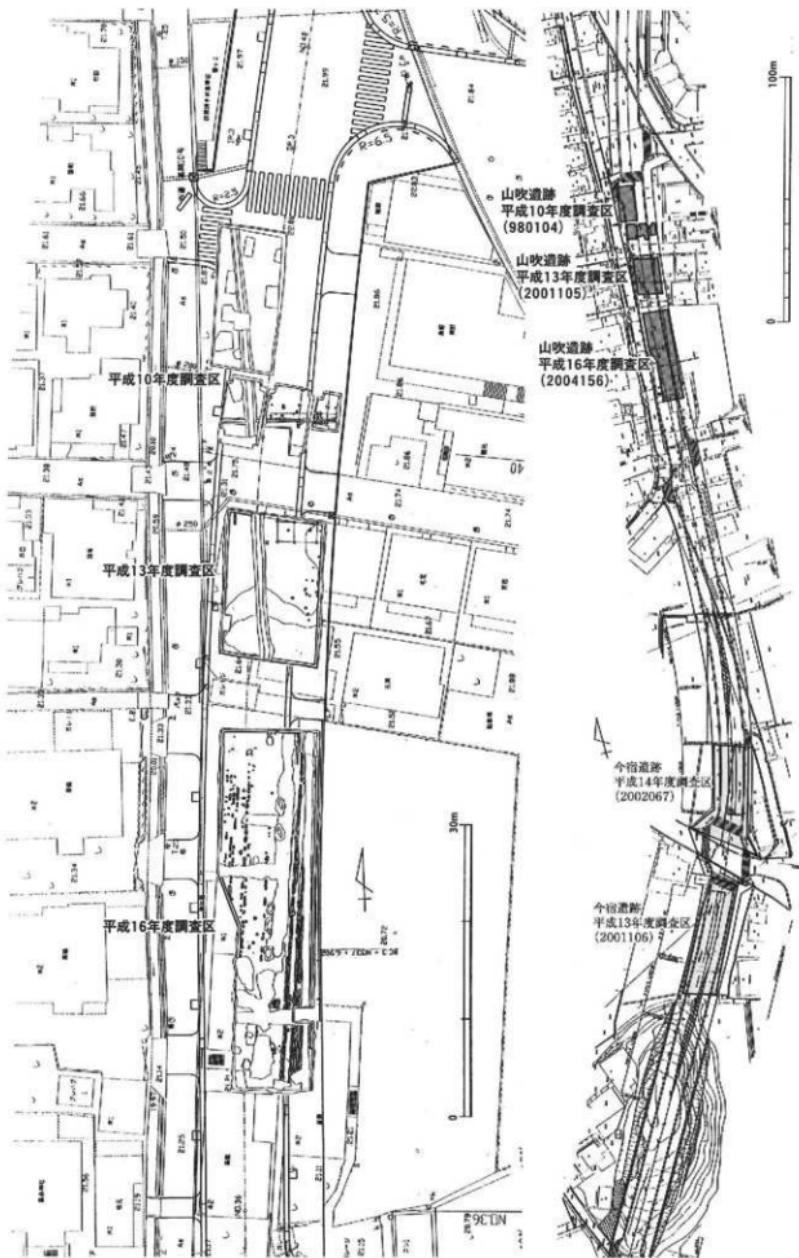


0 10cm



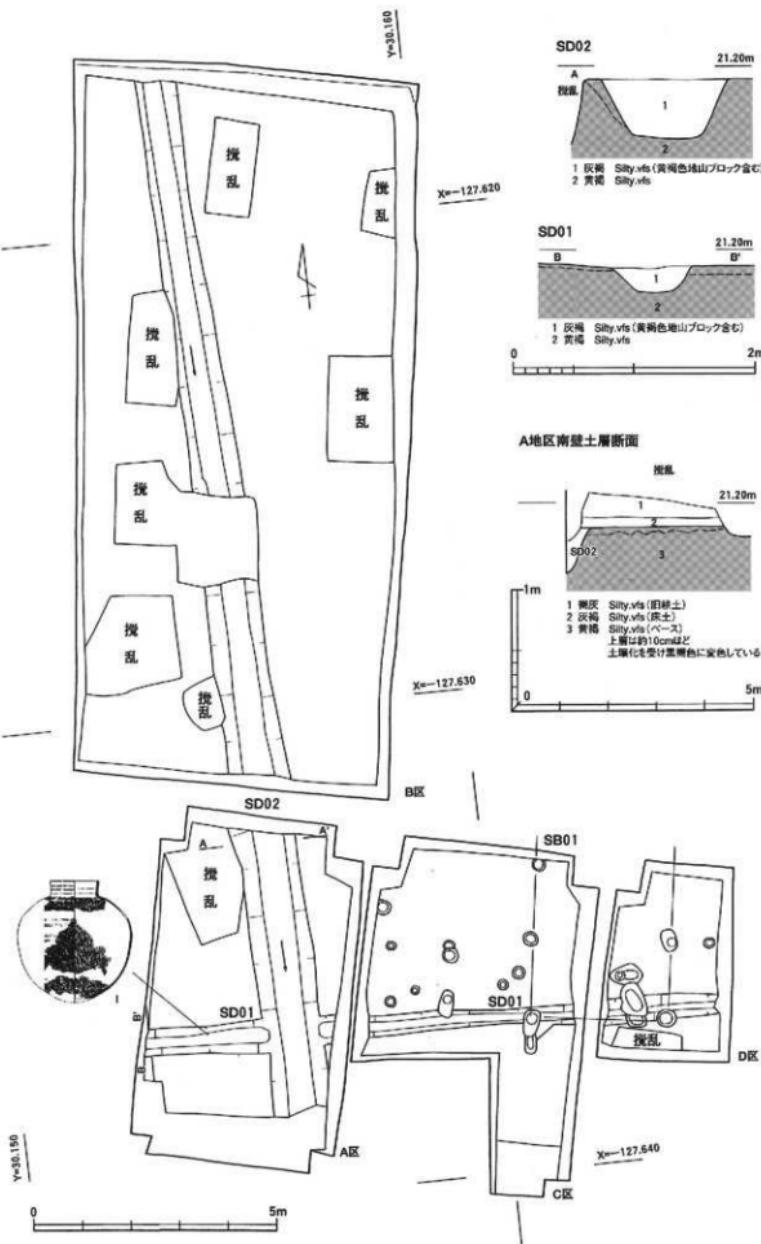
F8

図版 31 山吹遺跡の各年度調査区



図版
32 調査区平面図・溝土層断面図

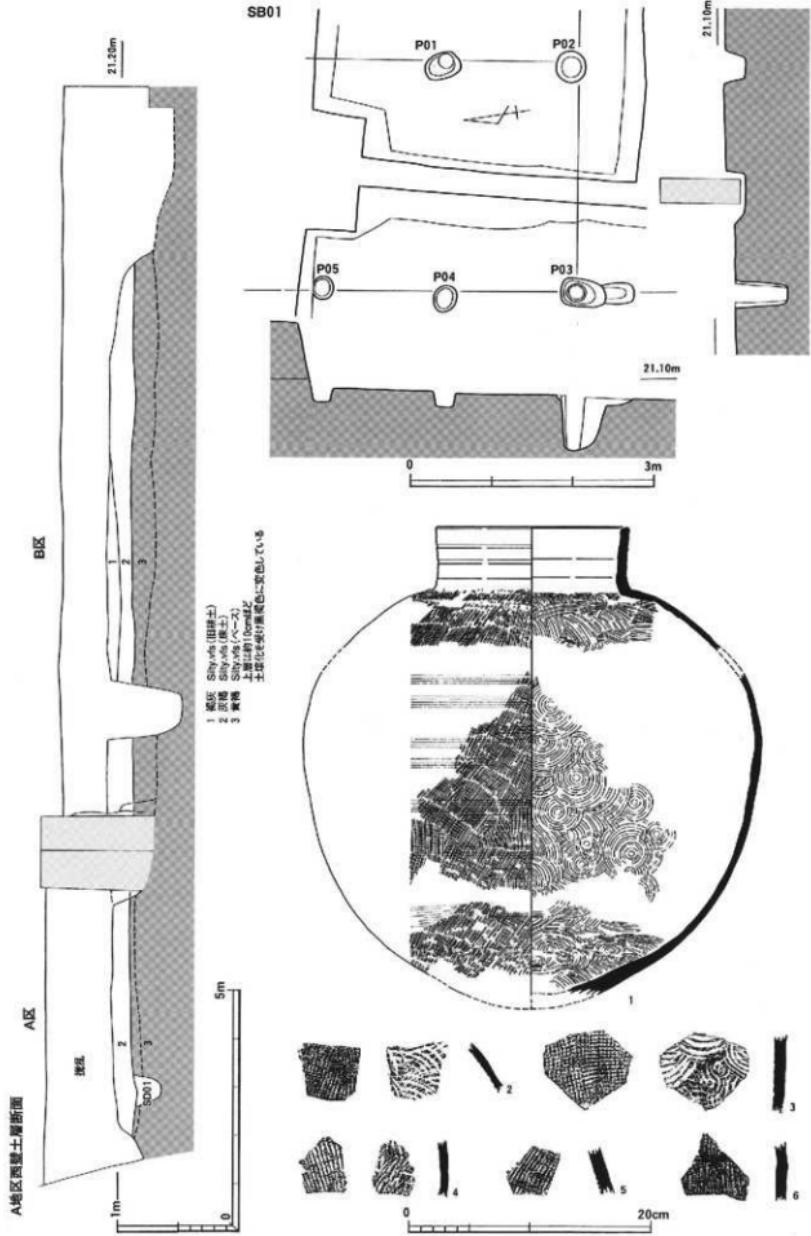
山吹道路
平成10年度調査区



図版 33 調査区土層断面図・SB01・出土土器

山吹遺跡
平成10年

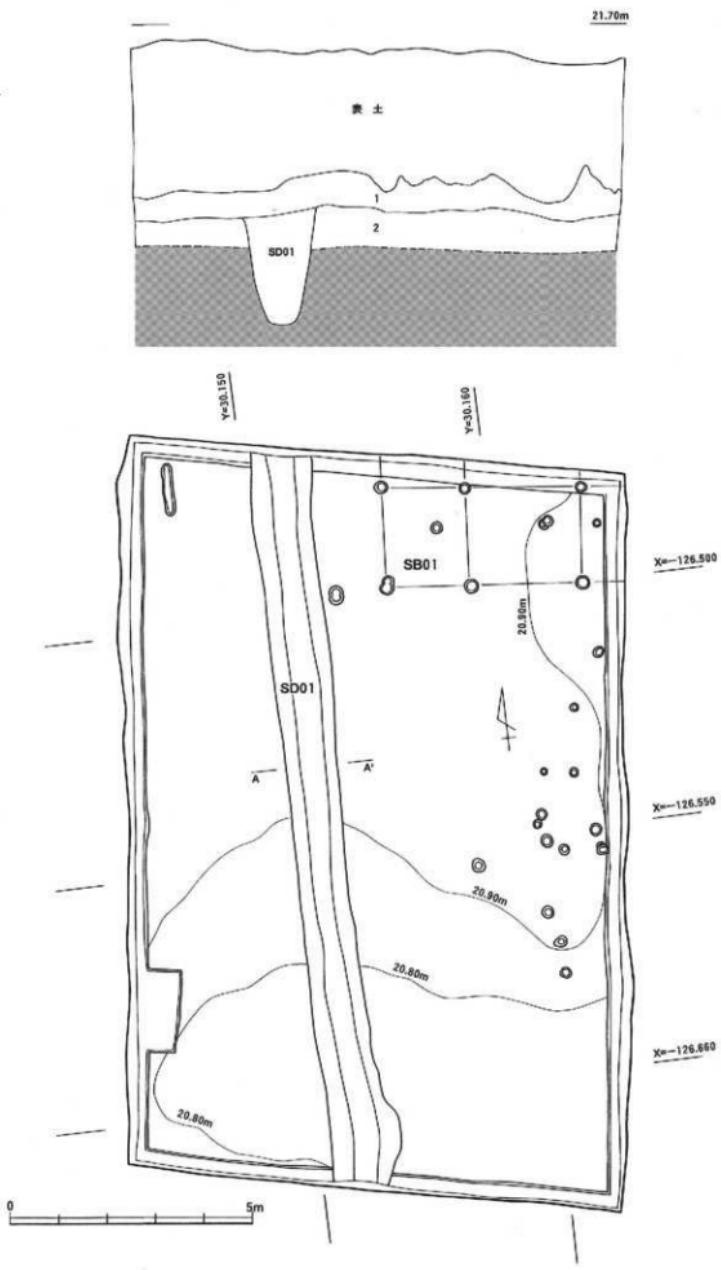
年度調査区



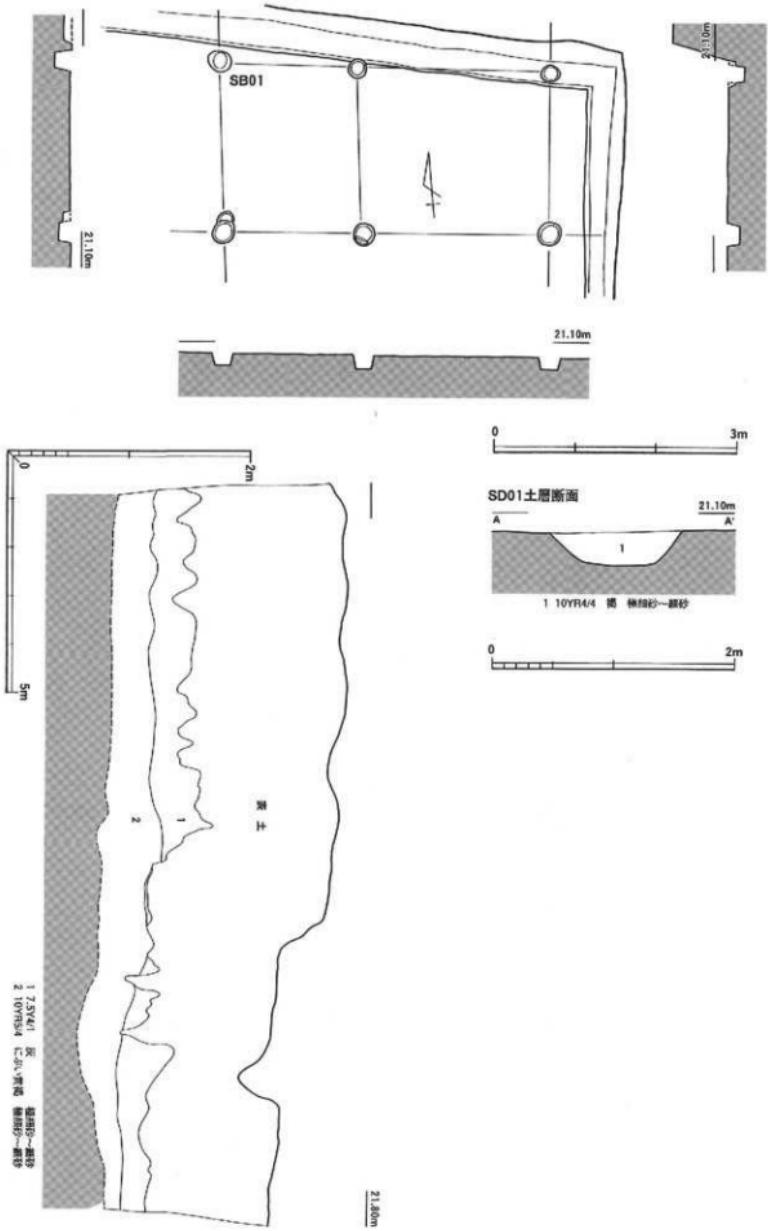
図版 34

調査区平面図・北壁土層断面図

山次遺跡
平成13年度調査区

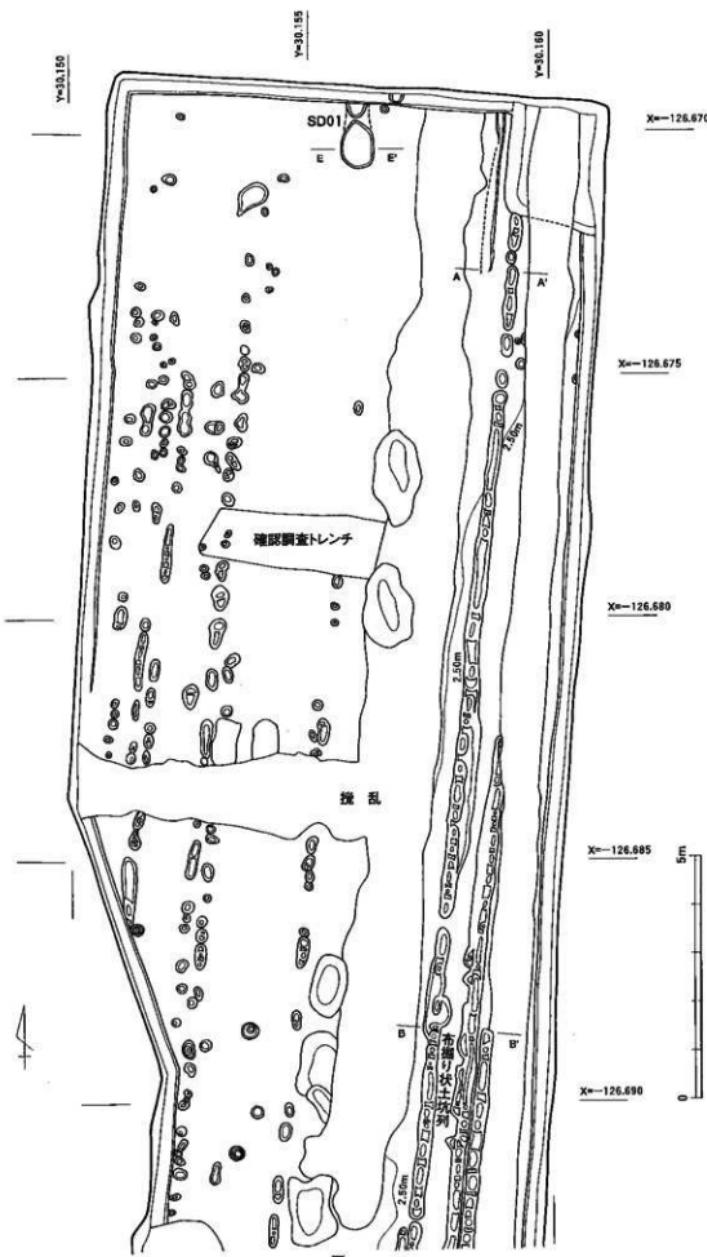


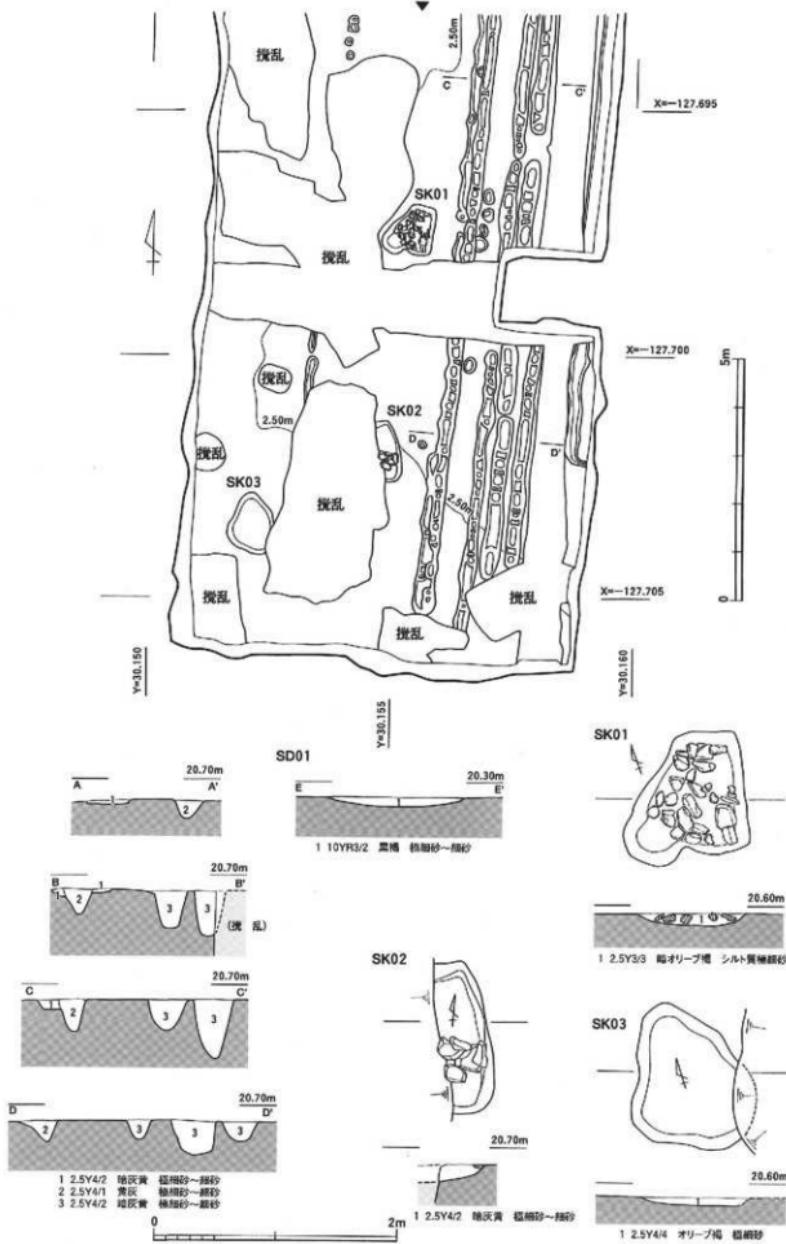
図版 35 東壁土層断面図・SB01・SD01土層断面



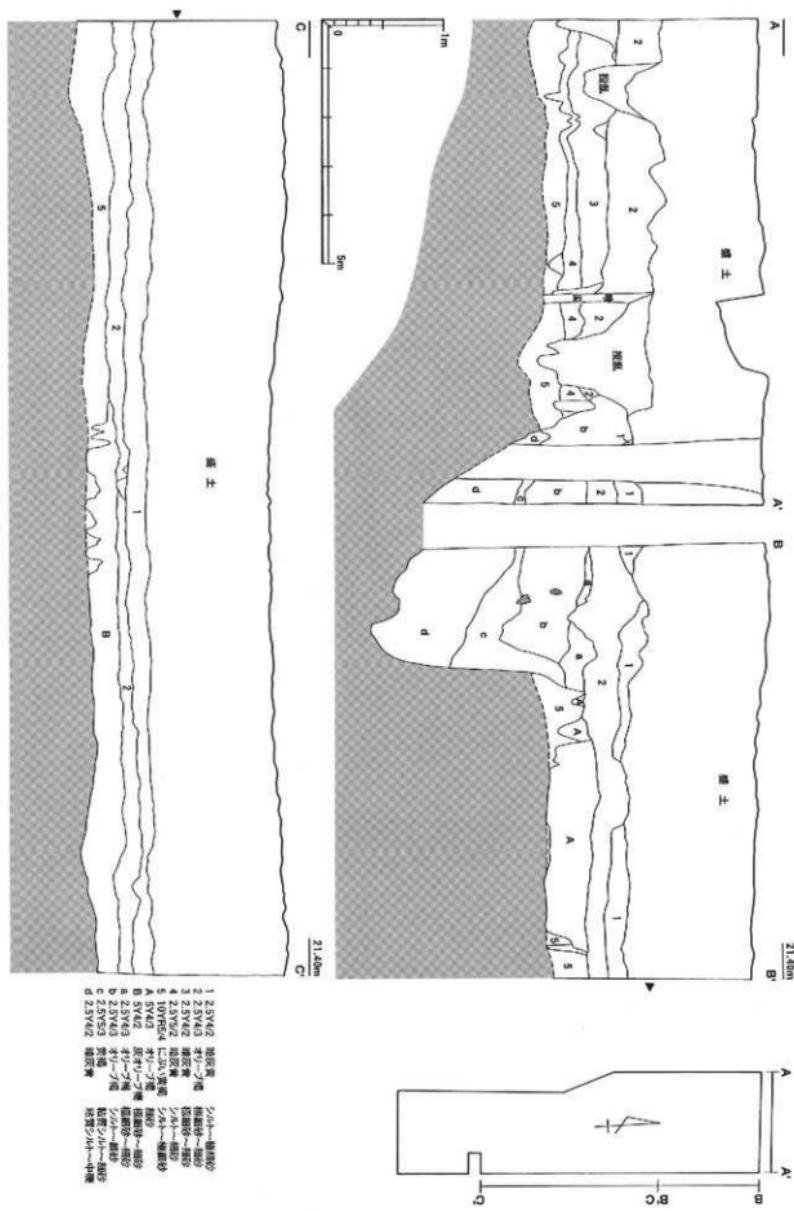
山吹遺跡
平成13年度調査区

図版 36
調査区平面図北・中部





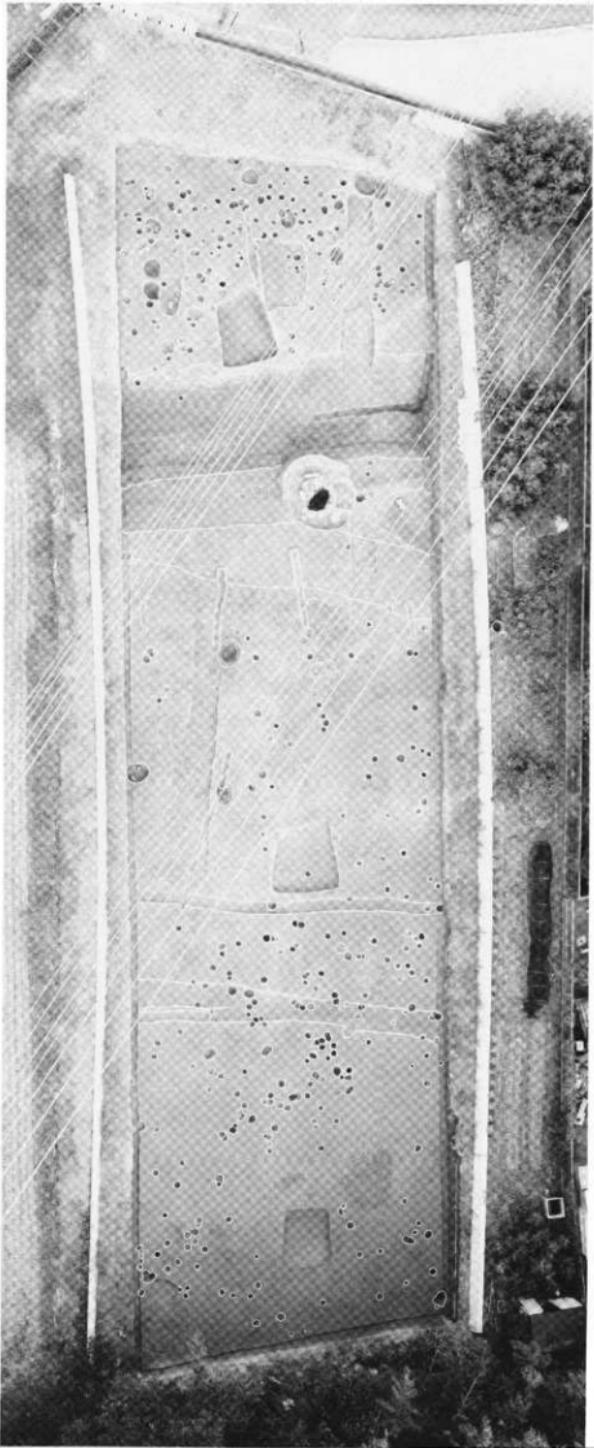
図版38 布掘り状土坑列溝土層断面・SK01～SK03・調査区土層断面図



写 真 図 版

写真図版 1 遺跡

今宿遺跡
平成13年度調査区



調査区全景（空中写真）

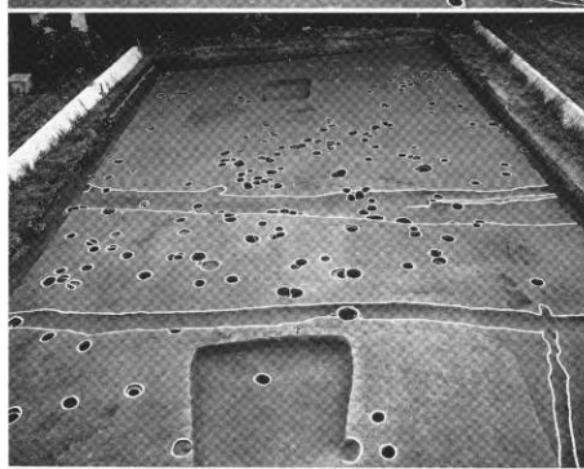
写真図版2 遺跡



調査区全景（北から）



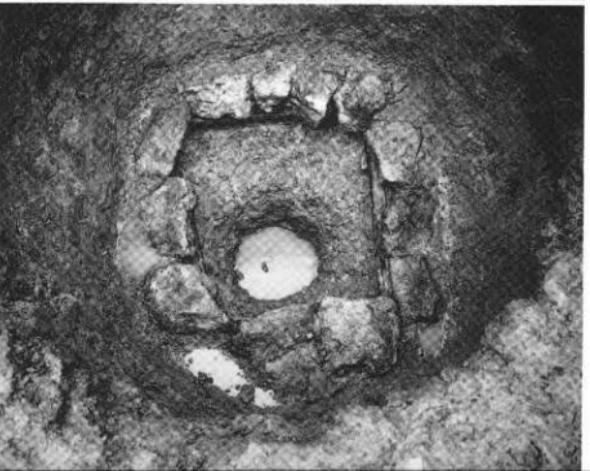
調査区北半部（南から）



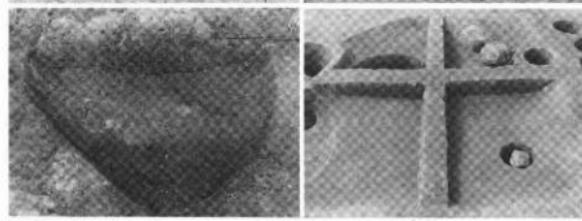
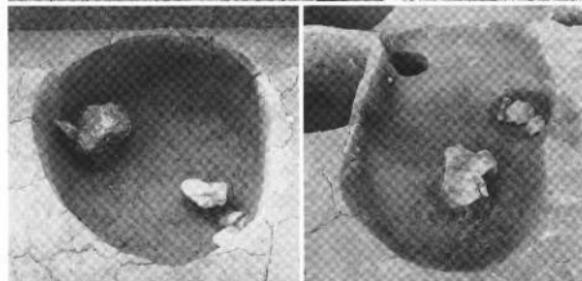
調査区南半部（北から）

写真図版 3 遺構

今宿遺跡
平成13年度調査区



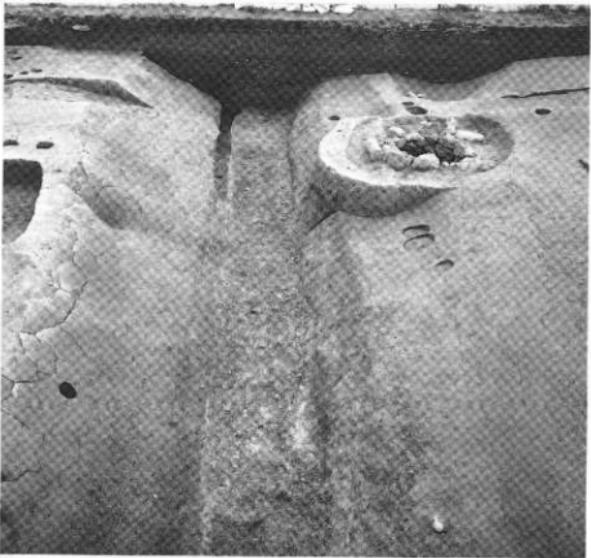
写真図版 4 遺構



写真図版 5

今宿遺跡
平成13年度調査区

遺構



溝SD03全景（西から）

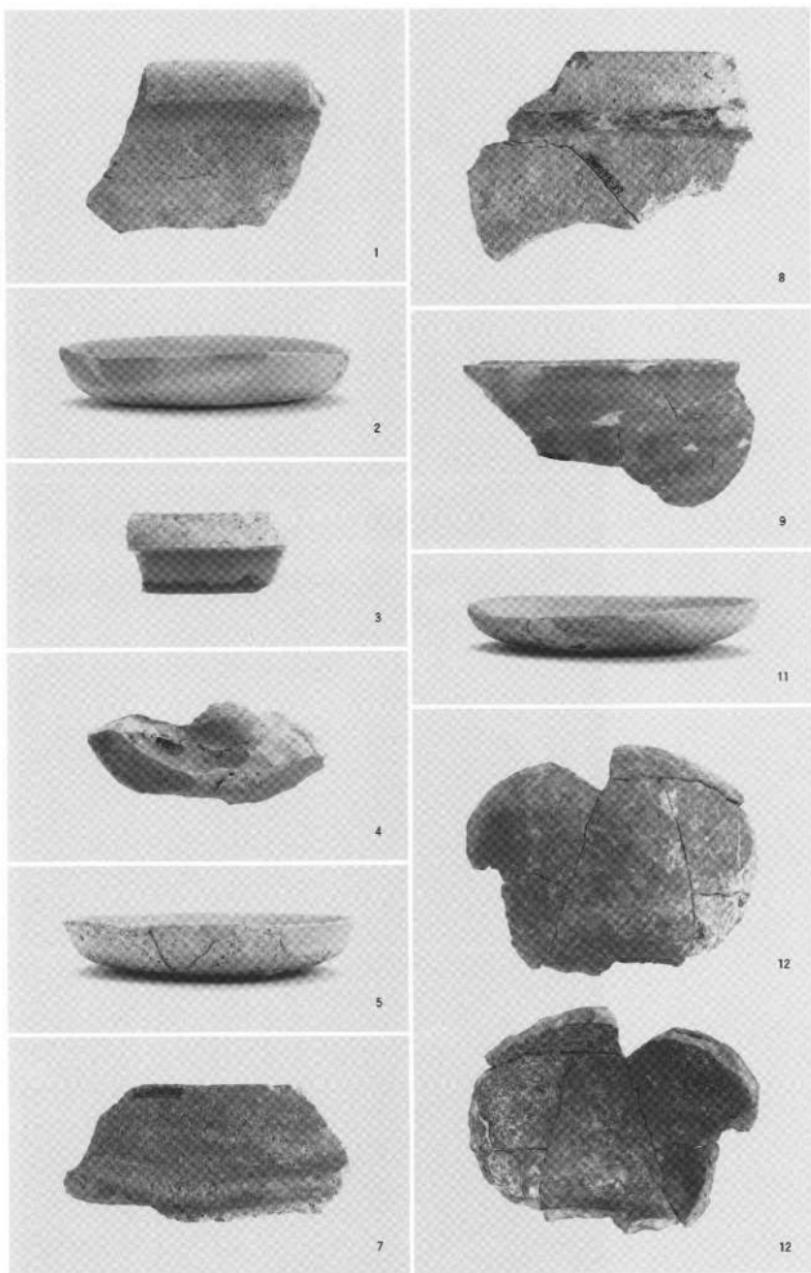


溝SD03 (東から)



溝SD03最下層土器出土状況
(東から)

写真図版 6 遺物

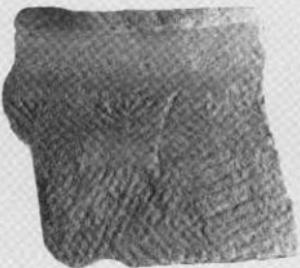


出土土器① (掘立柱建物・土坑①)

写真図版7 遺物



13



14



16



17



18



26



27



28

写真図版8
遺物

今宿遺跡
平成13年度調査区



29



30



31



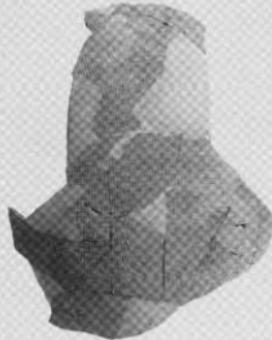
32



34



35



36



37

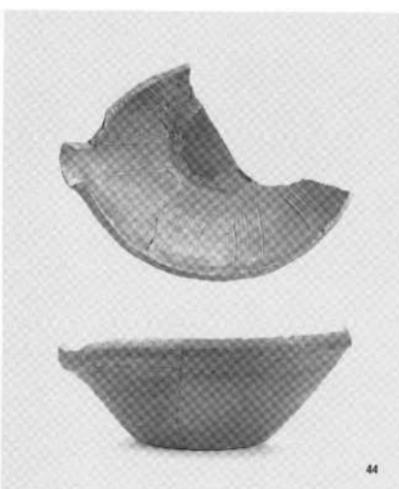
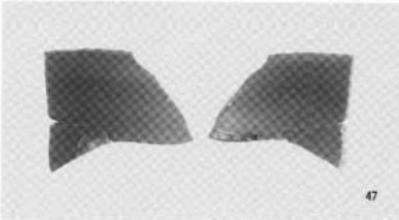
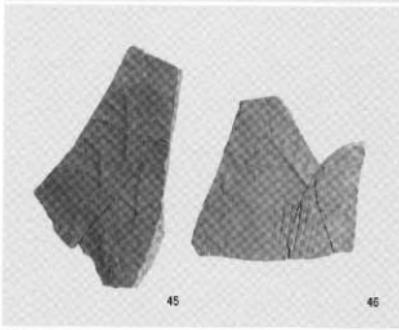
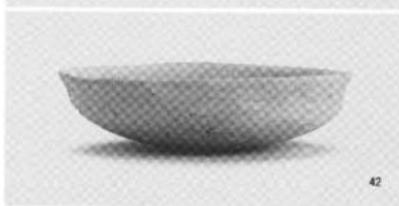


38

出土土器③（井戸②・溝SD01・溝SD02）

写真図版 9 遺物

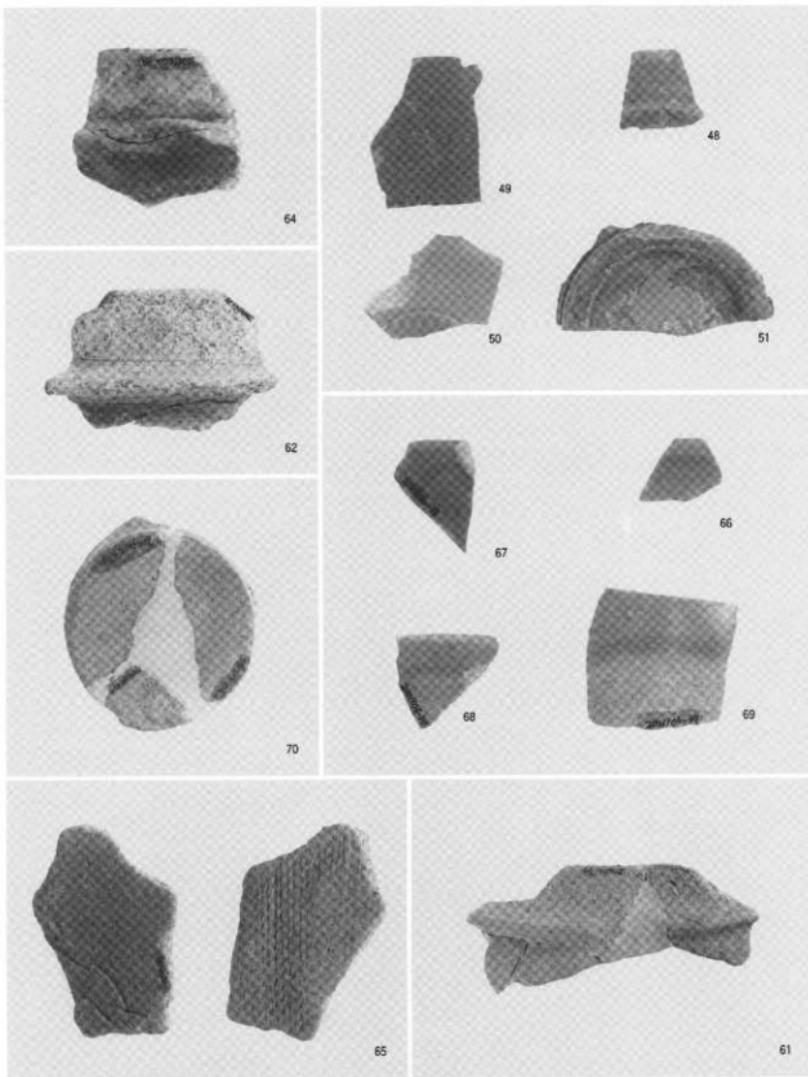
今宿遺跡
平成13年度調査区



出土土器④ (溝SD03第1層・第2層①)

写真図版 10
遺物

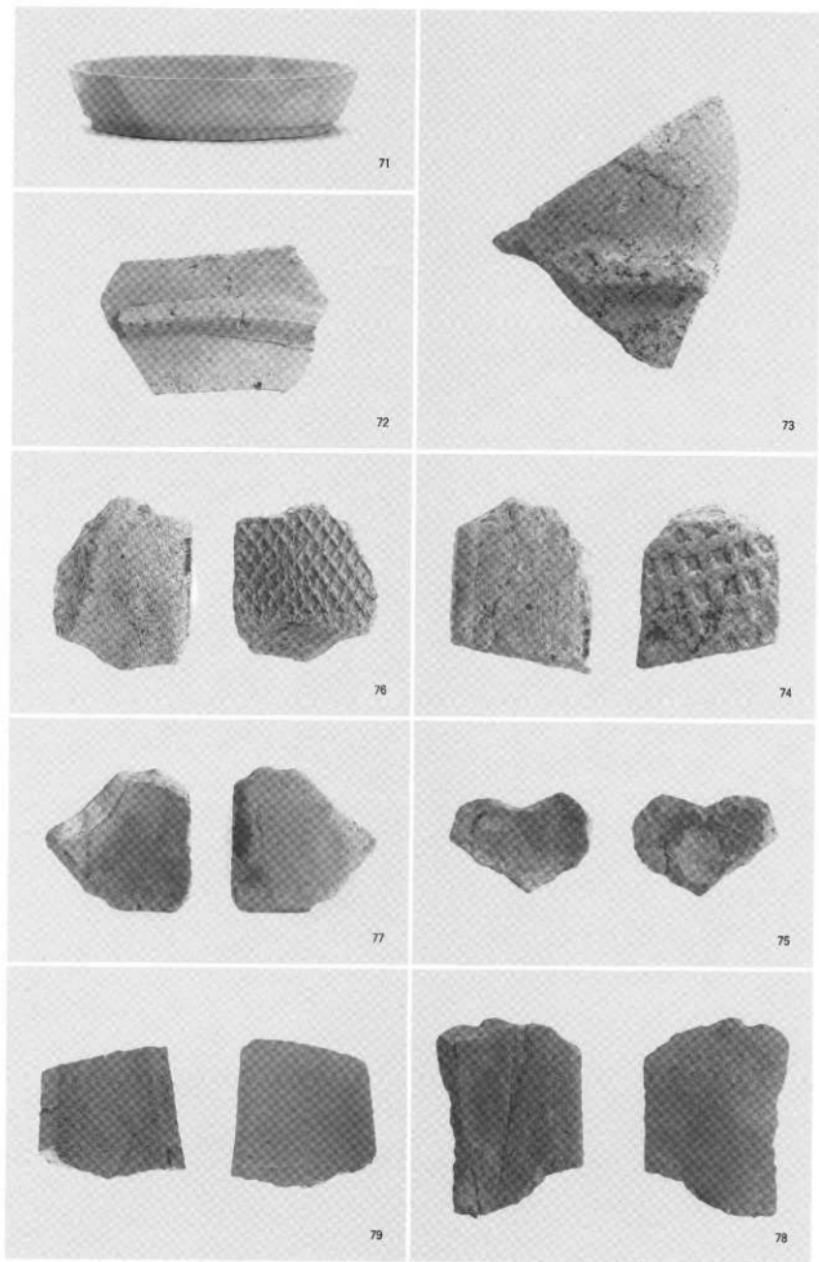
今宿遺跡
平成13年度調査区



出土土器⑤（溝SD03第2層②）

写真図版
11
遺物

今宿遺跡
平成13年度調査区



出土土器⑥(満SD03第3層)

写真図版 12
遺物



80



81



82



83



84



85



86



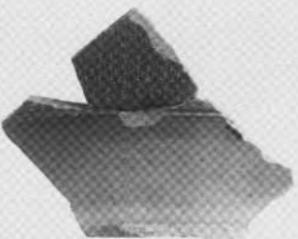
87

出土土器⑦ (清SD03第4層～第8層須恵器①)

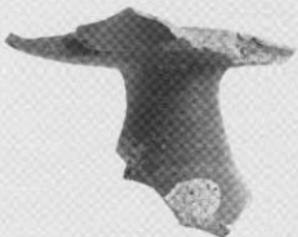
写真図版
13 遺物



93



102



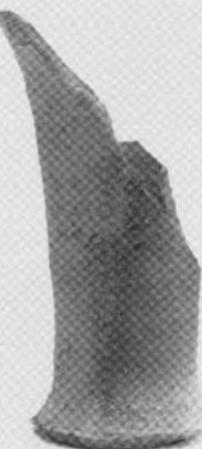
94



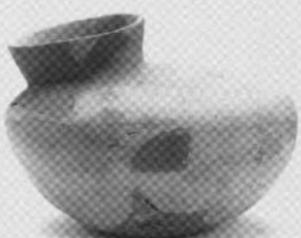
100



95



97



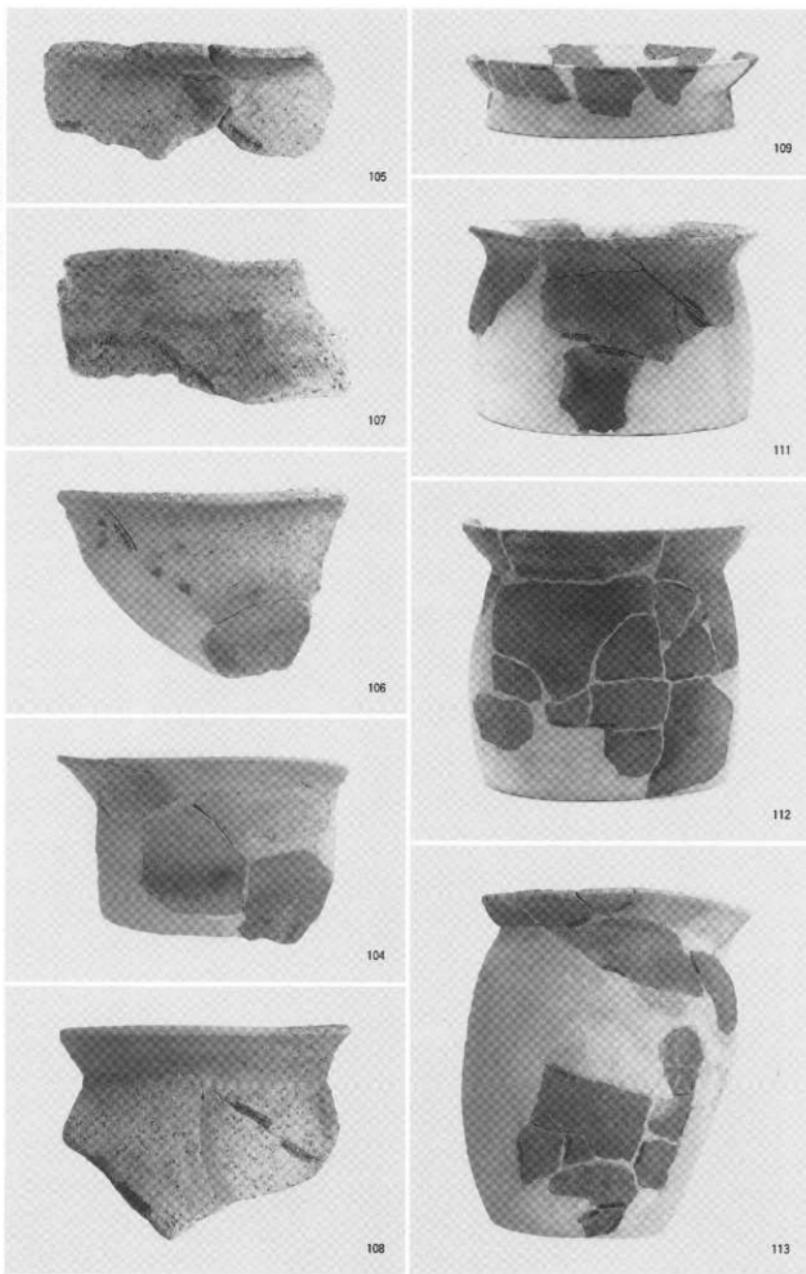
99



98

出土土器⑧ (清SD03第4層～第8層須恵器②)

写真図版 14
遺物



出土土器⑨ (満SD03第4層～第8層土器他①)

写真図版
15 遺物

今宿遺跡
平成13年度調査区

118



116



117



114



119



122



124



121



123



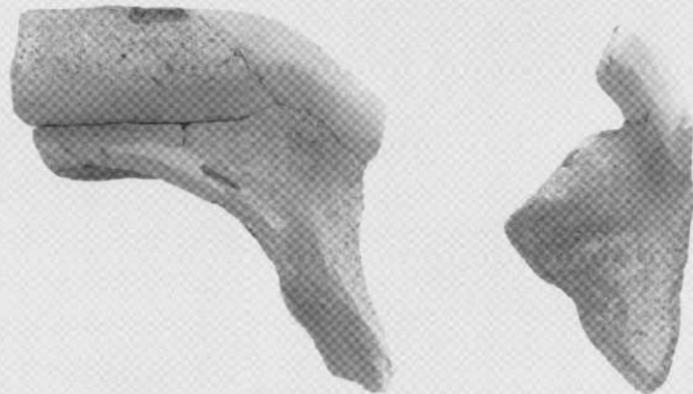
125



出土土器⑩ (満SD03第4層～第8層土師器他②)

写真図版 16
遺物

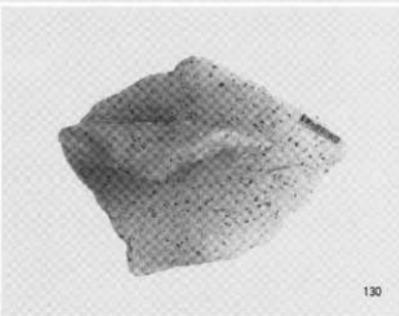
今宿遺跡
平成13年度調査区



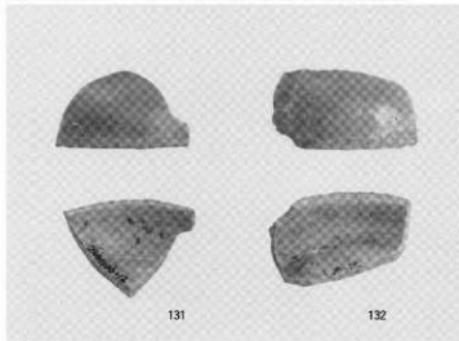
127



128

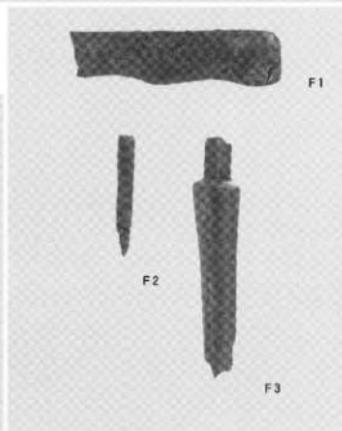


130



131

132



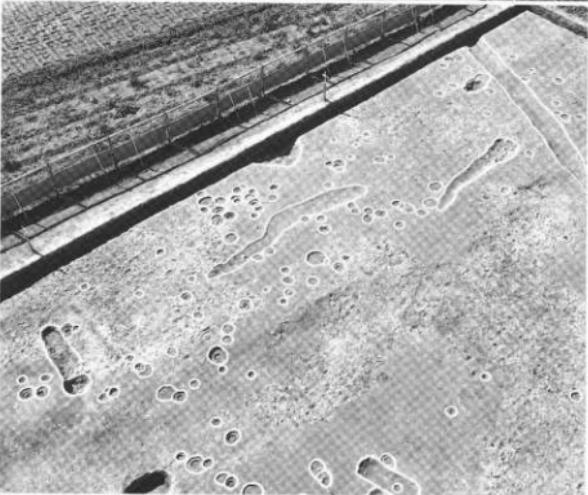
F2

F3

出土土器①) (溝SD03第4層～第8層土器他③・包含層の土器)・出土金属器



調査区全景（南から）



調査区北西部（南東から）



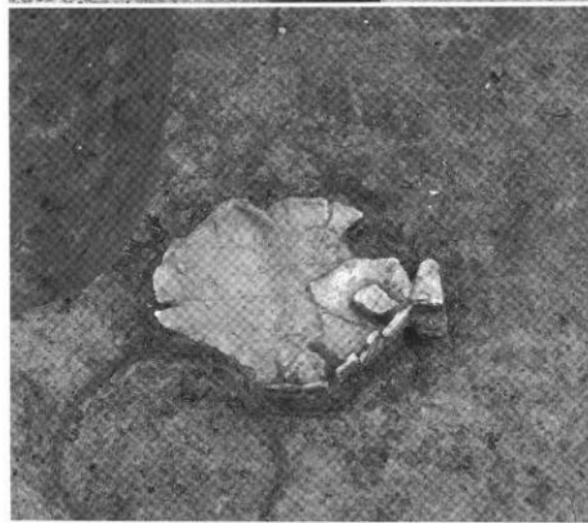
調査区南部（東から）



竪穴住居SH01全景（西から）

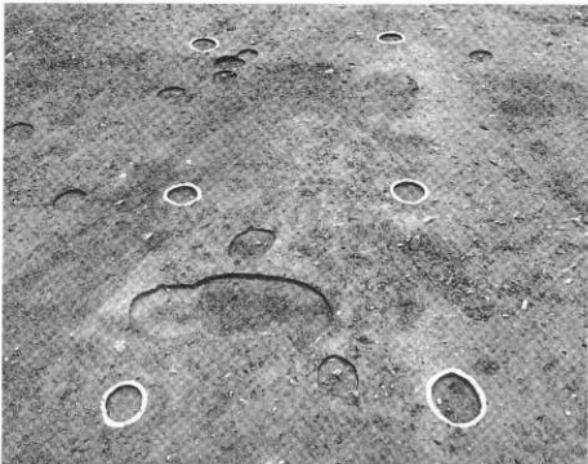


竪穴住居SH01全景（北から）

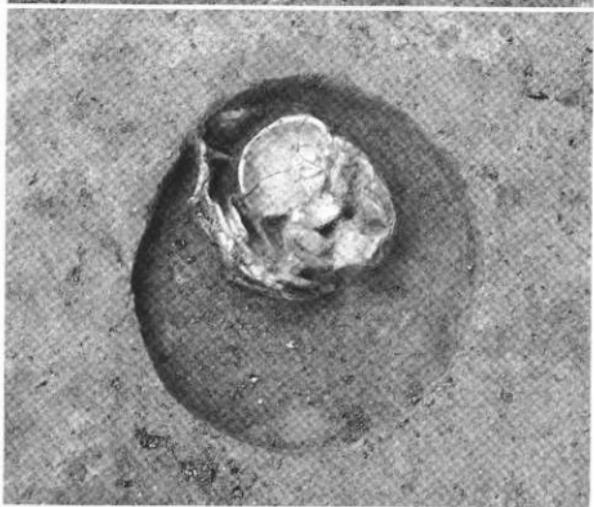


竪穴住居SH01土器出土状況
(西から)

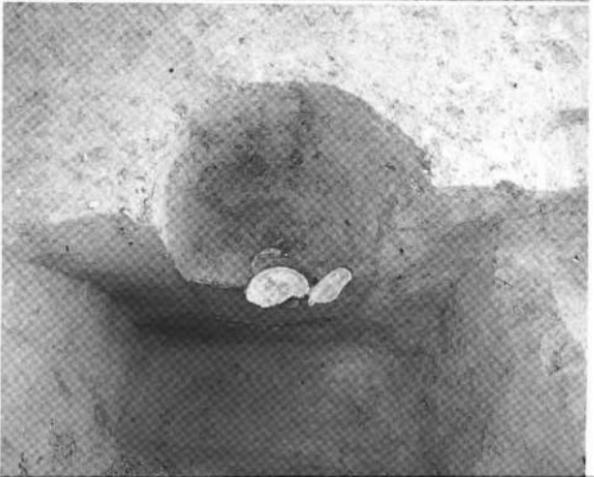
据立柱建物SB06（西から）



柱穴P06土器出土状況（西から）

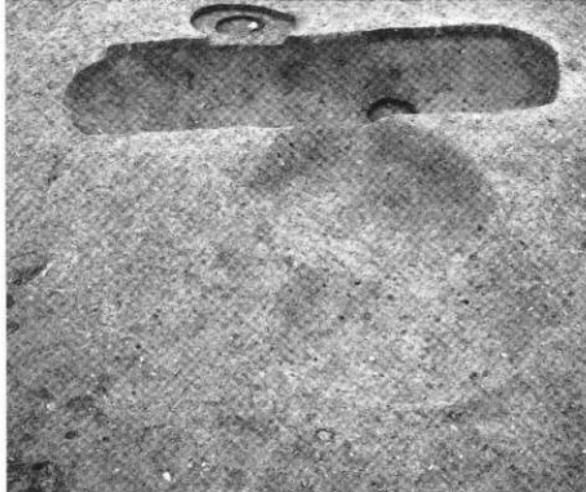


柱穴P08断面（東から）

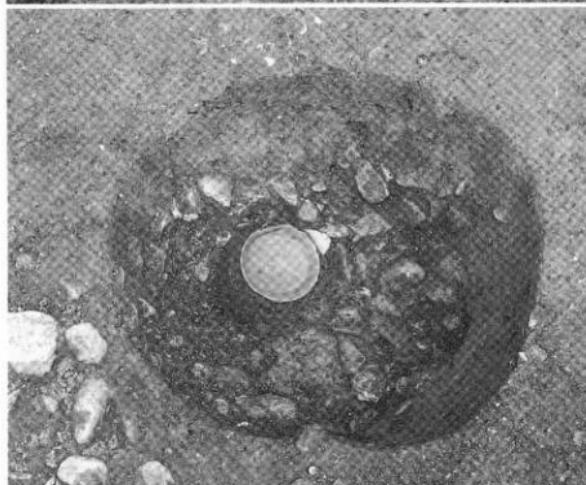


写真図版 20
遺構

今宿遺跡
平成14年度調査区



土坑SK17全景（南から）



土坑SK18全景（西から）

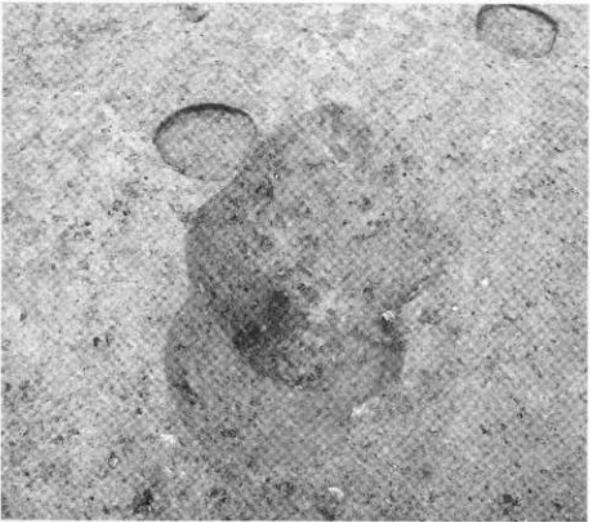


土坑SK18土器出土状況（南から）

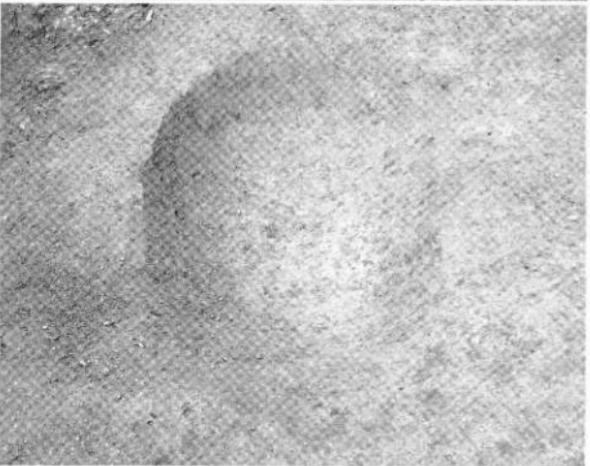
写真図版 21 遺構

今宿遺跡
平成14年度調査区

土坑SK20全景（西から）



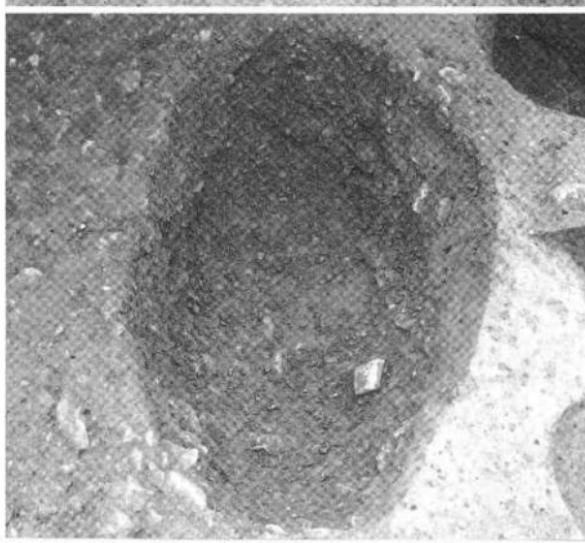
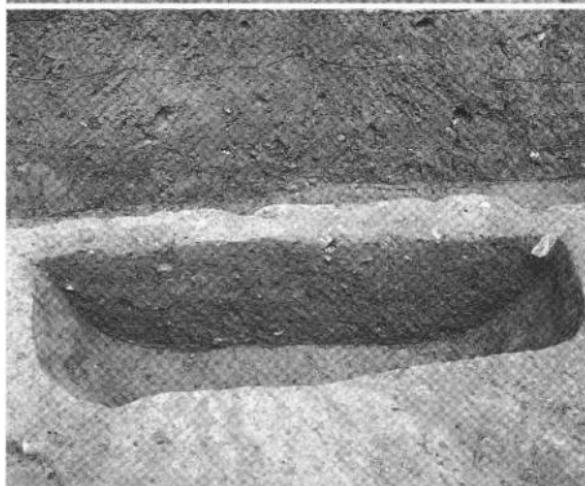
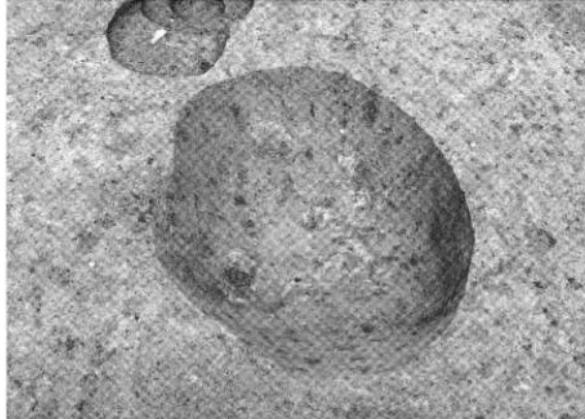
土坑SK21全景（南から）



土坑SK22全景（西から）



写真図版 22
遺構

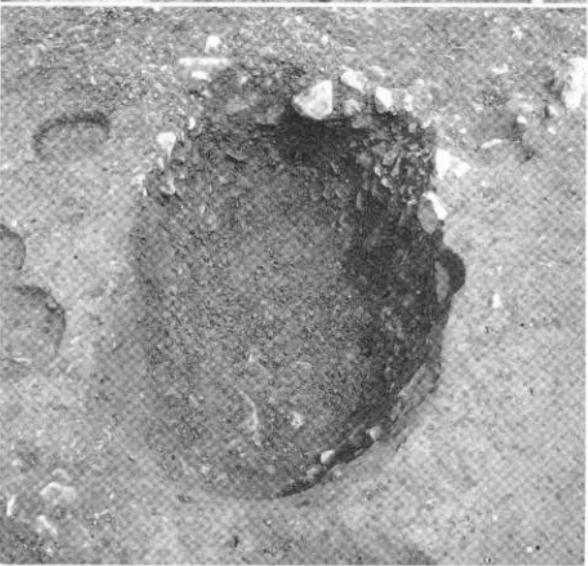


今宿遺跡
平成14年度調査区

土坑SK29全景（西から）



土坑SK30全景（西から）



土坑SK31全景（東から）





土壤墓SX01検出状況（西から）



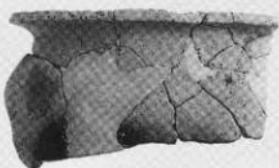
土壤墓SX01全景（東から）



土壤墓SX02全景（南から）

写真図版 25
遺物

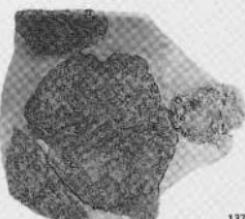
今宿遺跡
平成14年度調査区



133



134



137



136



139



138



140



142

出土土器①（弥生時代の遺構①）

写真図版 26
遺物

今宿遺跡
平成 14 年度調査区



135



142



152



153



157



155



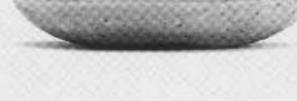
156



158



160

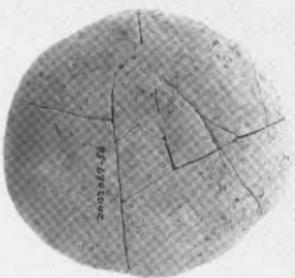


161



162

出土土器②（弥生時代遺構②・掘立柱建物・柱穴）



187



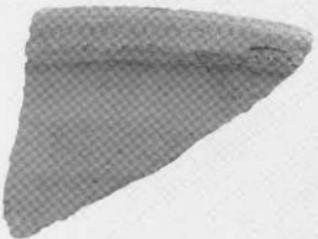
189



191



185



191



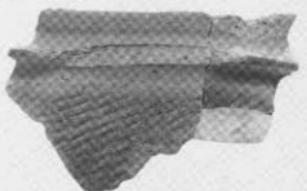
192



194



195



196

出土土器③（土坑・溝①）



197



209



198



204



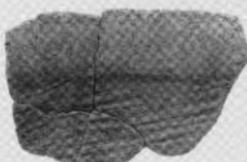
205



211



212



215

出土土器④(溝②・土壤墓・包含層①)



214



213



216



S1



219



F4



F5



F6



F7



F8



C1



C2

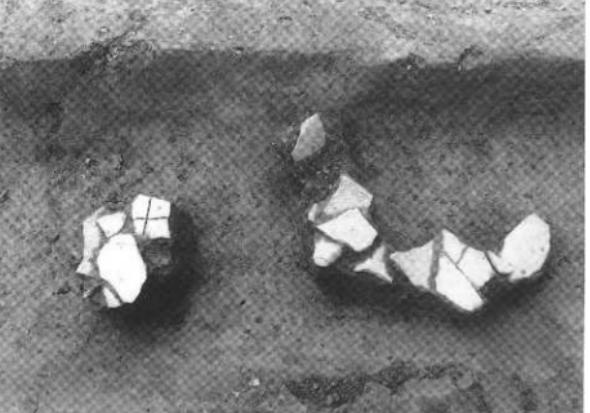
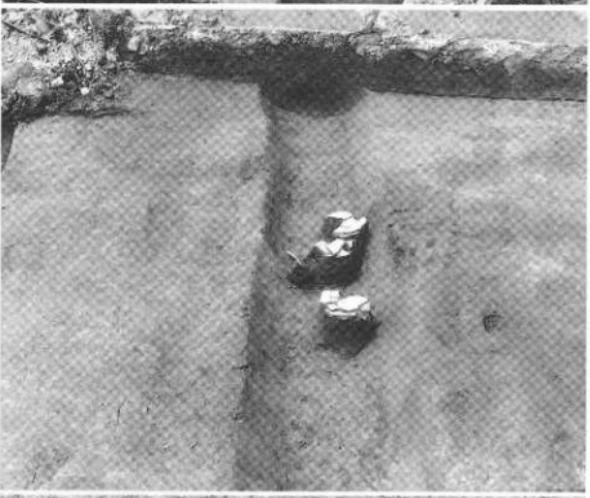
出土土器⑤(包含層②)・出土石器・出土金属器



調査区全景（北東から）



調査区全景（北から）



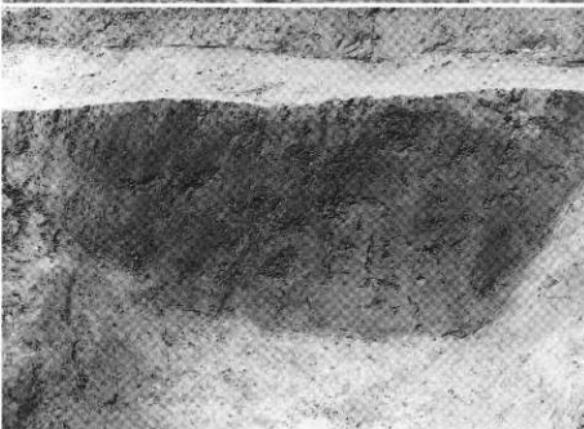
写真図版
32
遺構



溝SD02（北から）



溝SD02（南から）

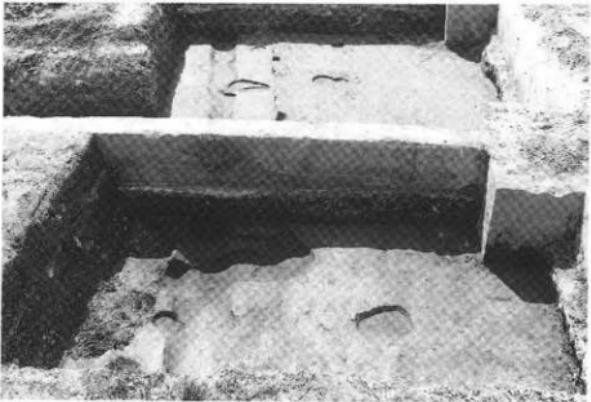


溝SD02土層断面（南から）

写真図版 33
遺跡・遺構

山吹道路
平成10年度調査区

C・D区全景（東から）

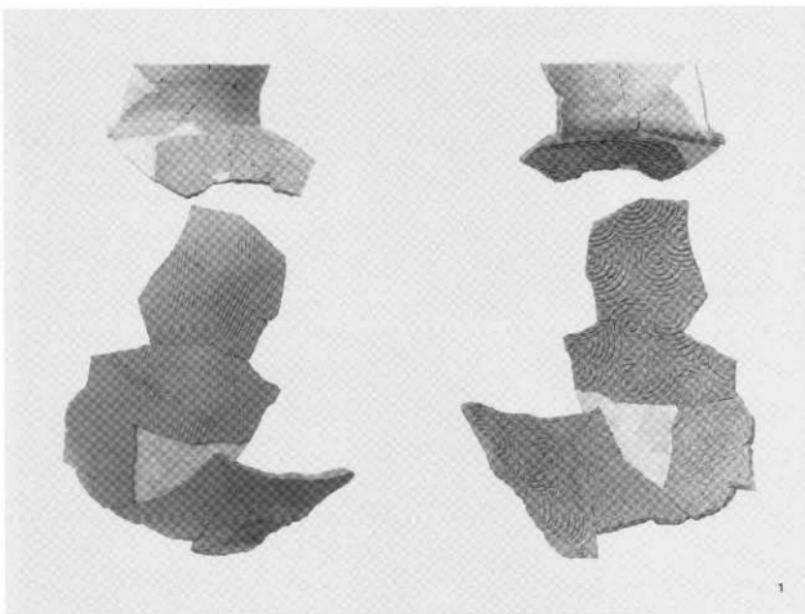


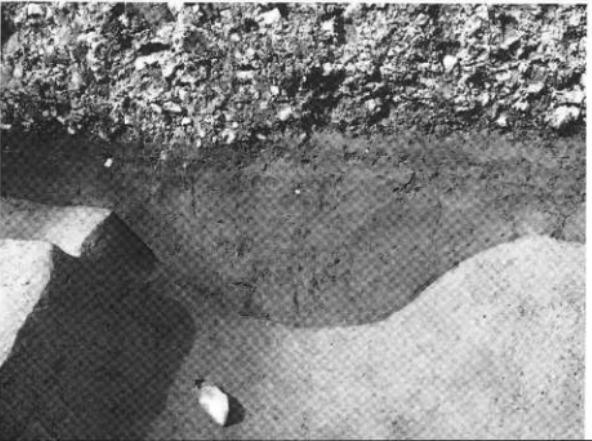
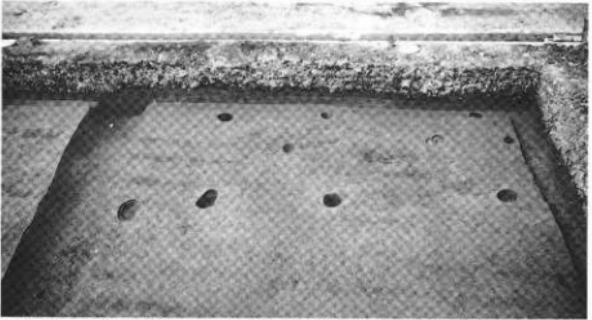
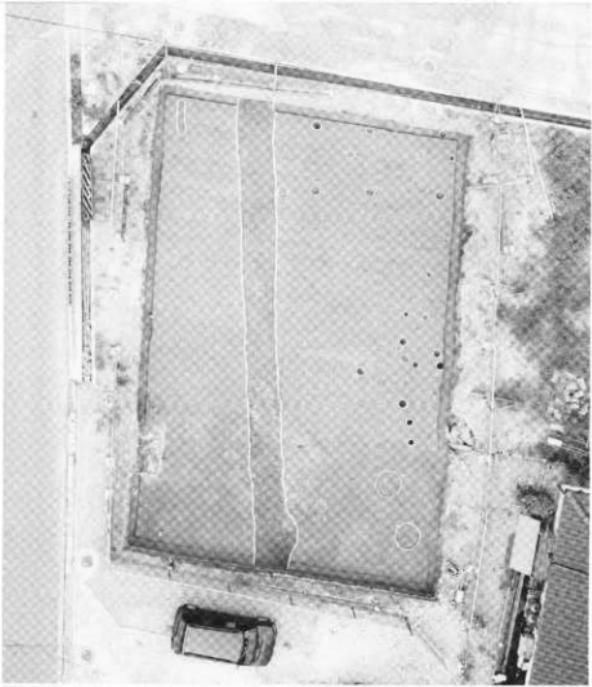
C区（北から）



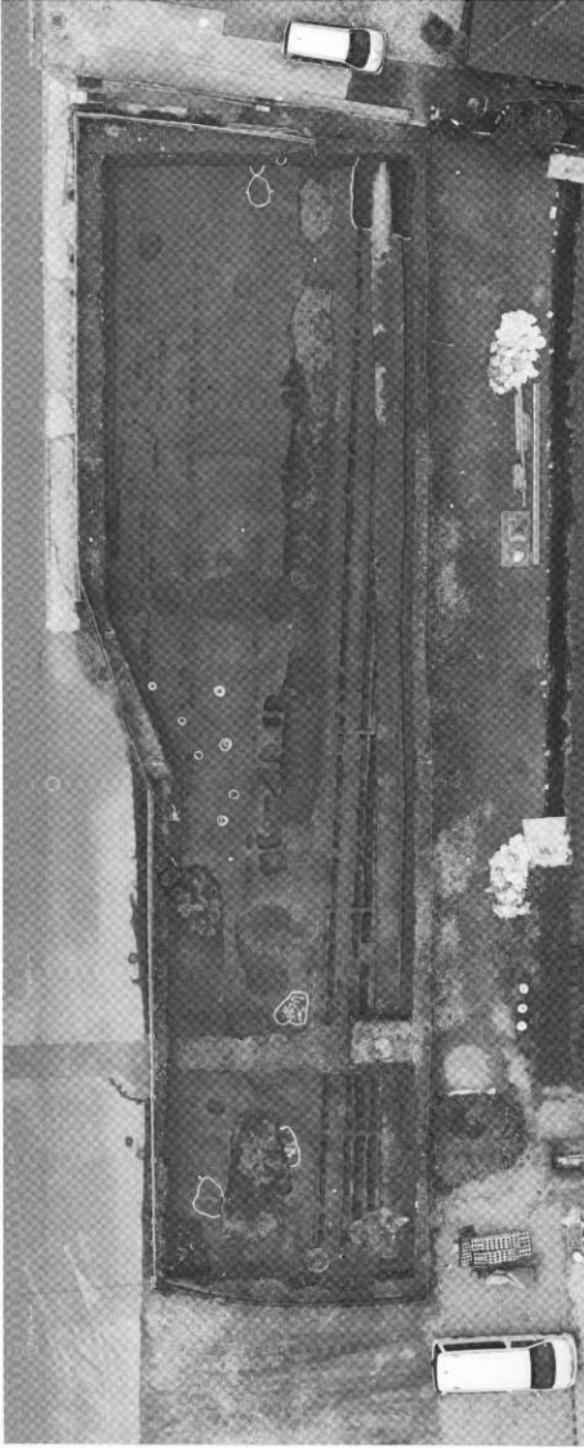
D区（北から）





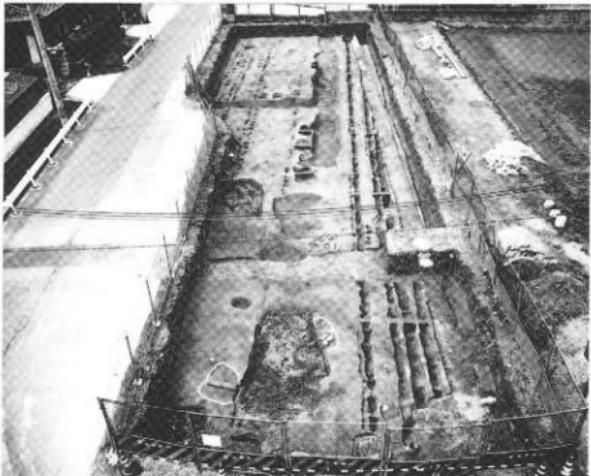


写真図版 36
遺跡



調査区全景（空中写真）

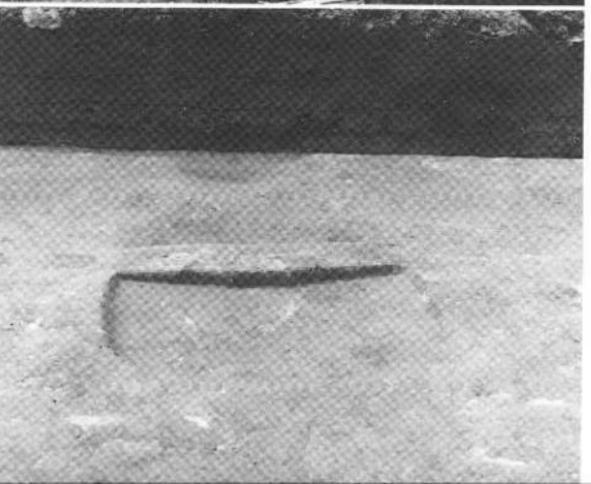
調査区全景（南から）



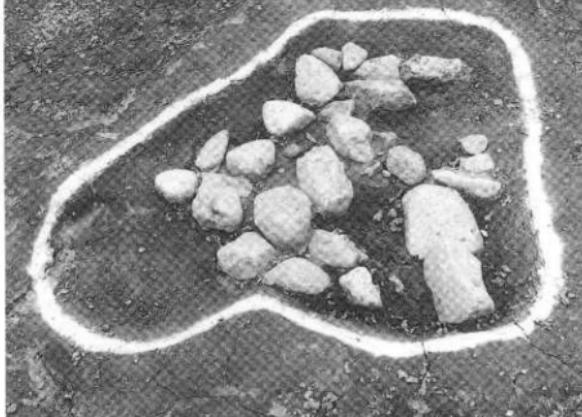
調査区全景（北から）



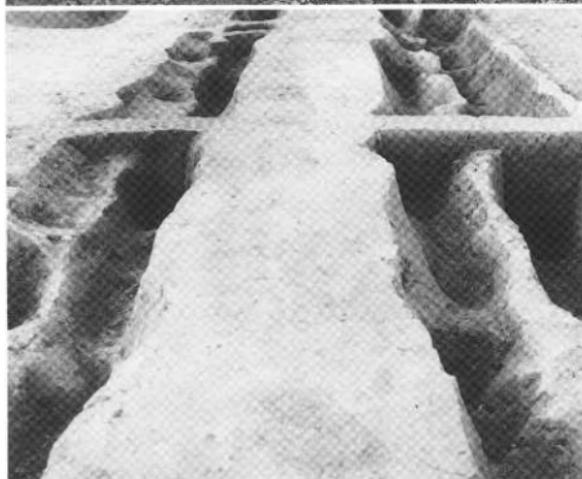
溝SD01（南から）



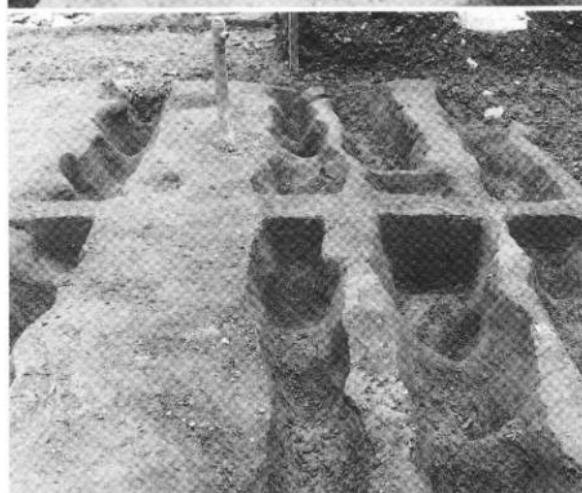
山吹遺跡
平成16年度調査区



土坑SK01（南から）



布掘り状土坑列（南から）



布掘り状土坑列（南から）

報告書抄録

ふりがな	いまじゅくいせきII・やまぶきいせき							
書名	今宿遺跡II・山吹遺跡							
副書名	緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第332号							
編著者名	上田健太郎・山田清朝・篠宮正・小川弦太							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 TEL078-341-7711							
発行年月日	2008(平成20)年3月1日							
(ふりがな) 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡調査番号						
いまじゅく 今宿遺跡	姫路市西今宿5丁目	2001106 28201	34度50分47秒	134度39分45秒	20010810～ 20011022	624m ²	緊急街路 整備事業 山吹線	
	姫路市西今宿8丁目	2002067	34度50分48秒	134度39分45秒	20020517～ 20020722	616m ²		
やまぶき 山吹遺跡	姫路市西今宿8丁目	980104	34度50分56秒	134度39分46秒	19980721～ 19980730	163m ²	緊急街路 整備事業 山吹線	
		2001105	34度50分56秒	134度39分46秒	20010810～ 20011022	150m ²		
		2004156	34度50分55秒	134度39分46秒	20040525～ 20040622	328m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
いまじゅく 今宿遺跡	集落遺跡	弥生時代 後期	堅穴住居	弥生土器				
		飛鳥～ 奈良時代	溝	須恵器・須恵器・瓦				
		中世	掘立柱建物・柱穴・溝・土坑	須恵器・備前焼・瓦質土器・陶磁器				
やまぶき 山吹遺跡	集落遺跡	飛鳥～ 奈良時代	溝	須恵器				
		中世	掘立柱建物・柱穴・溝・土坑	須恵器・瓦質土器・玉類				
		近世	土坑・布置状土坑列	陶磁器				

今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡

緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財調査報告書 2

平成20年3月1日発行

編集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中500
TEL079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 邦栄堂
〒675-2213 加西市西笠原町766
